金田一少女の事件簿～元祖高校生探偵と小さくなった名探偵～

ミカヅキ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〝名探偵の孫〟と〝平成のホームズ〟の出逢い。

それは何を生み出すのか――――?!

意外と好評につき、シリーズ化しました。更新はネタが降ってきた時のみ、チミチミ行います。

アンチヘイトは念のため。

※いい加減話数も増えてネタの範疇を超えてきたので、タイトルを変えました。

目次

もう1人の高校生探偵 ―― 1
西と東の対決？ File1 ―― 15
西と東の対決？ File2 ―― 21
西と東の対決？ File3 ―― 29
露西亜人形殺人事件 File1 ―― 38
露西亜人形殺人事件 File2 ―― 49
露西亜人形殺人事件 File3 ―― 57
露西亜人形殺人事件 File4 ―― 66
露西亜人形殺人事件 File5 ―― 75
露西亜人形殺人事件 File6 ―― 86
露西亜人形殺人事件 File7 ―― 96
露西亜人形殺人事件 File8 ―― 108
露西亜人形殺人事件 File9 ―― 118
露西亜人形殺人事件 File10 ―― 126
露西亜人形殺人事件 File11 ―― 135
露西亜人形殺人事件 File12 ―― 144
露西亜人形殺人事件 Epilogue ―― 152
吸血鬼の館 ―― 163
ドラキュラ伯爵 ―― 168
血の制裁 ―― 176

もう1人の高校生探偵

「はい、閻魔大王ラーメン大盛、お待ちどう様。」
「きたきた……！」
　コトッと置かれたラーメンに、読んでいたマンガ本を隣の席に置いたリュックにしまう。
「ごゆっくりどうぞー。」
　顔馴染みのバイト店員に礼を言って割り箸を取る。
「いっただっきまーす！」
　手を合わせて、まずはスープを1口。
「あ？――――……。あったまる――――――――――――――――……!!!」
「おいおい、若ェ娘さんが何て声出してんだよ。」
　はじめのおっさん臭い声に、店長が呆れたように笑う。
「そんな事言ったってさ――――――。も――――――、外が寒くて寒くて……。やっぱりこんな日はラーメンだよね――――――。」
　行きつけのラーメン屋。いつも頼んでいるラーメン。いつもと違ったのはその後。
　ガラッ……！
「ヘイらっしゃい!!」
　入ってきたのは親子連れと思われる2人組。
（…このオッサンの顔どっかで……。）
　30代後半から40代前後のチョビヒゲの男と、小学校低学年と思われる眼鏡の少年。男の方に見覚えがある気がしたが、どうも思い出せない。
　ラーメンを啜りながら内心首を捻る。
　はて、どこで見たのだろう、と釈然としない思いを抱えつつも、まぁ今は空腹を満たすのが先、と疑問を頭の隅に追いやってラーメンに集中する事にした。
「店長――――。メンマの追加ってあり？」
「またかよ、はじめちゃん。あんたも好きだねぇ、メンマ。」
「だってここのメンマ、マジでウマいじゃん。いくらでもいけるよ。」

「ハッハッハッ…！お得意様にそこまで言われちゃあ、断れねぇな。サービスするよ。」
「やりぃっ！」
その言葉と同時に、中身が半分程減りメンマが無くなっていたどんぶりに、特製メンマがカウンター越しに追加された。
「ねぇ、お姉さんってこのお店の常連さんなの？」
「ん？」
はじめが座っていたのは店の入口側。奥側、はじめから見て右側から声がかけられた。
目をやると、先程入ってきた親子連れの少年の方である。
「そうよ。そのお姉さんはウチの大事なお得意様。頼むのはいつも閻魔大王ラーメンの大盛！そんな細身にどこに入ってるんだか、羨ましいったら…。」
「彩代さんだって充分細身でしょーよー。」
親子連れに水を出しながら少年の質問に答えたアルバイト店員―彩代の言葉に、はじめが苦笑し、少年の方に向き直った。
「少年たち、この店初めてでしょ？」
「分かるの？」
「そりゃーね。この店、味はピカ一なのに外観が残念な感じに小汚いせいでお客さん少ないから。ちょっとリフォームすれば行列店になるのは間違い無いだろーに…。おかげで常連のほとんどが顔見知り。」
「おいおい、〝残念な感じに小汚い〟は余計だよ。」
「ちゃんと〝味はピカ一〟って褒めたっしょ――？」
苦笑する店長に笑みで返す。
「そんなにウマいのか？」
味はピカ一、という言葉が興味を惹いたのか、少年の奥に座っていた父親らしきチョビヒゲの男も会話に入ってくる。
「もちろん。特にこのメンマが最高で、ついいつも追加しちゃう位ですよ。」
「へぇ…。じゃあ、ボクそれにしようかな。」

「んじゃ、オレも…。」
　自信満々に言い切るはじめの言葉に、親子連れが彩代に注文を告げる。
「はい、閻魔大王ラーメンね。大盛？普通盛り？」
「オレは大盛。」
「ボク普通盛！」
「ボウヤ全部食べ切れる？量少なくしようか？」
　小柄な少年の体格を見て彩代が気を回す。
「大丈夫！お腹ペコペコだもん。」
「そう、それじゃ大盛１丁と普通盛１丁ね。少々お待ちください。」
　そんなやり取りの後、ほんの２～３分後の事である。
　この店にとって疫病神とも言える男が来たのは。
「帰ってくれ!!あんたに食わせるラーメンはねぇ!!」
「おいおい…。客に向かって何て言い草だよ？せっかく閑古鳥が鳴いてるこの寂れた店を…、少しでも潤してやろうと来てやったっていうのに…。」
　嫌味ったらしい口調と根性の悪そうな顔で入ってきた男。
「げ…。ヤーな奴が来た……。」
　西津徳盛。この辺りの土地を管理する不動産屋、と言っては聞こえが良いがヤクザまがいの手口でこの店の土地を狙う地上げ屋の社長である。自分の社員を使って店で暴れさせ、客足を遠退かせて店を潰し、安く買い叩くのが常套手段。
　時に社長自ら難癖を付けに来るそのフットワークの軽さにはある意味感心するが、その熱意を慈善事業にでも生かしゃ良いのに、と常々呆れる。
　さっさと食べて帰ろ、とラーメンに集中する事にした。
「ふぅ…。ごちそうさま。彩代さん、お会計よろしく。」
　両手を合わせ、ティッシュで口を拭きながら財布を取り出す。
「はいはい、閻魔大王ラーメン大盛で７００円ね。」
「はい、ちょうどね。」
　ぴったり７００円を渡し、立ち上がってダウンジャケットとリュッ

クを手に取った。
「じゃ、店長また食べに来んね。ごちそうさま――――――。」
「オウッ！また来てくんな!!」
ダウンジャケットを着こみ、リュックを背負って店の外に出ようと、引き戸に手をかけた瞬間だった。
「ぐあぁぁぁ……！」
「え？」
呻くような声の後に、ドサッと何かが倒れ込むような音が聞こえ、思わず振り返る。
「きゅ…、救急車だ…。早く救急車を呼べ!!」
床に倒れ伏した男―西津の姿と、チョビヒゲの男の切羽詰まった声に、反射的に西津に駆け寄った。
「ちょっと、触っちゃ……!!」
はじめの行動を制止しようとした少年に構わず、西津の様子を確認する。
開いた瞳孔と止まった呼吸、首筋に触れても、脈は触れなかった。
「救急車は必要無い…。……もう、死んでる。」
「お姉さん……？」
――――――これが、江戸川コナンと、金田一一との最初の邂逅だった。

所轄の警官から遅れる事数分。
駆け付けた警視庁の目暮警部と高木刑事の立ち合いの下、被害者である西津の身元確認がなされ、死因は青酸系毒物による毒殺と断定された。
そして、被害者が倒れた前後に店内にいた人間のうち、はじめを含む４人が容疑者として挙げられた。
「いや、この状況下なら容疑者になるのは仕方無いんだろうけど、そこのオジサンが容疑者から外れてるのは何でなんですか？」
容疑者として挙げられたのは、はじめの他に店長の小倉功雅とアルバイトの大橋彩代、そしてはじめ同様に客として訪れた理髪店店長の

谷中篤のみ。
子連れで来店していたチョビヒゲの男を指差すはじめに、高木が驚いたような声を上げる。
「え?!ご存知ないんですか?〝眠りの小五郎〟を?」
「〝眠りの小五郎〟……?……ああ、最近ニュースに良く出てる探偵の…?」
「オホン!名!探偵の毛利小五郎だ!!」
〝眠りの小五郎〟というキーワードによって記憶を掘り起こしたはじめに、探偵ではなく〝名探偵〟だと小五郎が訂正する。
しかし、はじめが更に続けた。
「いや、有名な探偵だっていうのと、容疑者から外すっていうのは違くないですか?」
素朴な疑問に、目暮も思わず「そ、そう言われると確かに…。」と頷く。
「それにあの男が倒れる前に、そのオジサンあの男と揉めてませんでした?」
店長の小倉を振り返るはじめに、小倉も「そういや、そうだな…。」と頷いた。
「そ、それは本当かね?!」
「あたしはちょうど帰ろうとして入口の方向いてたんで直接見てはいないですけど、声は聞こえてましたよ。表に出ろってでっかい声でそこのオジサンが叫んでました。」
「そ、そういえば西津さんが倒れる前に毛利さんが西津さんの胸倉を掴んでました…!」
はじめの後に谷中が続け、その言葉に「毛利君、どうなんだ?!」と目暮が小五郎を問い詰める。
「え、えええまぁ…。ふざけた事を抜かしたんでちょっと懲らしめてやろうかと…。」
「じゃあ、君も身体検査を受けて店の外に出てろ!!」
「は、はい〜〜〜〜!!」
目暮の一喝に、小五郎が這々の体で店外に転がり出た。

そして、警察が店内から毒物が検出されるかどうかを調べている間、はじめ達は店の外で待機していた。
「ねぇ、お姉さん！」
「ん？」
何かさっきも同じようなやり取りがあったな、と思いながらはじめが声をかけてきた少年―江戸川コナンに目を向ける。
「何？少年。」
軽く屈(かが)んで目線を合わせながらコナンに尋ねる。
「お姉さん、このお店の常連さんって言ってたけど、あの西津(さいず)さんって人の事も良く知ってた？」
「良く、っていうのがどの程度の事を指すのかは分からないけど、たまに店でかち合ったよ。向こうも、名前までは知らないだろうけどあたしの顔位は覚えてたんじゃないかな？あの男の妨害のせいで結構逃げちゃったお客さんいるけど、それでも通ってたのってあたしと後４～５人位だから。」
「じゃあ、お姉さんは嫌がらせとかされなかったの？」
「いや、あるよ。」
「あるのか？」
そこで、コナンとはじめのやり取りに気付いた小五郎が改めてはじめに尋ねる。
「はい。直接あの男にではないですけど、あの男の部下に１度…。その時はあたしだけじゃなくて、その時店にいた女性客全員被害に遭ったんですけど。」
一旦立ち上がりながら小五郎に目を向ける。
「具体的にはどんな…？」
「男子中学生みたいな低次元の猥談(わいだん)を吹っ掛けられました。その時はたまたま一緒にラーメン食べに来てた知り合いが追っ払ってくれたんで、すぐにいなくなったんですけど…。」
「わ、猥談(わいだん)…？」
「はい。子どもの前ではちょっと口に出すのが憚(はばか)られるような事、と言えばある程度分かりますか？具体的にお教えしても良いんですけ

ど、さすがに子どもの前ではちょっと…。」
「あ、ああいや！そこまでは!!」
流石(さすが)に自分の娘とさして年齢が変わらない若い娘から、そうした話を聞くのが憚(はばか)られたらしい小五郎が、慌てて話を切り上げた。
「もう1つ聞いても良――い？」
コナンの言葉に、再度屈(かが)んで顔をそちらに向ける。
「何？」
「お姉さん、さっきすっごく冷静に西津(さいず)さんの生死確認してたけど、お姉さんって何者？高校生くらいに見えるけど、もしかしてお医者さんとか？」
言葉と口調は無邪気だが、その眼光は鋭い。
最近の小学生ってどうなってんの？と思いつつも、別にやましい事は一切無いので正直に答える。
「いや、本当にただの高校生。ちょっと場慣れしてる事は否定しないけどね。」
「場慣れって？」
「昔っから運が無いのか、間が悪いのかこういう事件に巻き込まれる事が多くてね。少年もそうじゃないの？」
「えっ?!」
急に返ってきたブーメランに、コナンがあからさまに動揺する。
「さっきから気になってたけど、少年って見たとこ小学校低学年ってとこでしょ？死体に慣れすぎじゃない？普通の小学生だったら、大号泣してパニック起こしてもおかしくないくらいのトラウマ案件だよ、これ。」
「あ、あはははは…。ボク、小五郎のおじさんに着いて行く事が多いから……。」
「へえ。事件現場にも、自分から着いてくの？」
「う、うん…。ボクも将来、小五郎のおじさんみたいな名探偵になりたいんだ!!」
「ふ――ん…。」
コイツ中身は普通の小学生じゃないな、と確信しつつも、自分も

他人の事は言えない為、所謂〝ギフテッド〟かと深い追及はしないでおく。
　コナンが小倉や谷中達からも話を聞いているのを、何とは無しに眺めていたはじめだったが、他の3人の様子を見て誰の犯行かを確信した。
（さて、後はどうやって毒を盛ったかだけど…。）
　考えられる限りの毒の摂取ルートを高速でシミュレートしていく。
　ガラッ！
「け、警部殿！どうでした調査の方は？」
　店から出てきた目暮に小五郎が尋ねる。
「問題のラーメンからは毒物は検出されなかったよ！もちろん被害者が飲んだ水や、被害者が座った席に飾ってあった花や、それが挿してあったコップや水からもな！」
「じゃあ、俺と彩代ちゃんの疑いは晴れたって訳か！」
　嬉しそうな顔を見せる小倉と彩代に、「ただし！」と目暮が続けた。
「被害者の左手の親指と人差し指…、被害者が使った箸…。及び、座った席のテーブルの上からは毒物反応が出た！」
「「えぇっ!?」」
（そういう事か……。）
　目暮の言葉に、はじめが毒物の摂取ルートに気付く。
　そして、小五郎の様子を窺った。
　真相に気付いた様子は全く無い。
（〝名探偵〟ってのは誇張だったって事…？むしろこのオッサンよりもこっちの子どもの方が……。）
　言っては何だが、どこにでもいるオジサンにしか見えない。世間一般では〝名探偵〟と称されている男の姿に、どこか釈然としない思いを抱きながらも、はじめが切り出した。
「警部さん、ちょっと聞いてもらっても良いですか？」
「何かね？」
　不思議そうな顔ではじめに目をやる目暮が、先を促す。
「あの男に毒を盛った方法がわかりました。」

「何ィ!?」
「え?!」
「ほ、本当かね?!」
　小五郎とコナン、目暮が目を見開く。
「そして、西津を殺した犯人は、この中にいる……!」
「お、おいおいおい…。探偵でも無いのに、一体何の真似だよ…!」
　はじめの宣言に一瞬気圧された小五郎だったが、雰囲気に呑まれまいと声を張り上げる。
「確か、金田一さんだったか…?そう言うからには何らかの根拠があっての事だろうね?」
「ん…?金田一……?」
　目暮が軽率な発言を窘めるように名を呼ぶ目暮に、高木が何か引っかかったようにはじめの名を呼んだ。
「金田一…、金田一…。どっかで……。」
「高木刑事、あのお姉さんの事知ってるの?」
　はじめの名を繰り返し、記憶を辿る高木にコナンが尋ねる。
「いや、どっかで聞いた事が……。確か…、あ、ああ――――――!!!」
「うを?!」
「何だね急に?!」
　突然はじめを指差し、大声を出した高木にその場にいた全員の目が集まる。
「思い出した…!どっかで聞いた事のある名前だと引っかかってたんです…!!」
「いや、だから一体何だってんだよ?!」
　はじめを指差したまま、どこかキラキラとした目ではじめを見る高木に小五郎が怒鳴り付けた。
「工藤君や服部君、白馬警視総監のお子さんの他にも数々の難事件を解決した高校生がいるって、警視庁内で噂になっていたんです…!同じ捜査一課の剣持警部や明智警視と懇意にしている、あの昭和の名探偵・金田一耕助氏のお孫さん!確か、その名前が〝金田一一〟さん

だった筈(はず)です…!!あなたの事でしょう?!」
「そ、そう言われれば聞いた事がある……!連続殺人事件をいくつも解決している、女子高生がいると…!!」
　高木の言葉に、目暮もまた呟く。
「ほ、本当ですか?!警部殿!!」
「うむ…。本人の希望でマスコミには一切公表されていないが……。警察関係者の間では密かに噂されていた…。」
　そのやり取りに、はじめが気まずそうにそっぽを向くが、コナンは一種の衝撃を受けていた。
（金田一耕助の孫だって……?!）
　東京に、こんなに身近にもう1人探偵がいたとは…。
　しかし、目暮の言葉にはじめへと意識を戻す。
「では、金田一さん。話してくれないかね、君の推理を。」
　はじめも頷き、続ける。
「あの男…、西津(さいづ)は毒を飲まされたんでも食べさせられたんでも無い…。自分で口に運んでしまったんですよ。本人にとってはさほど意識していない、ある癖によってね。」
「く、癖とは何だね?!」
　はじめの語る推理に、彼女が放つ圧倒的な存在感に、その場にいた者達はいつの間にか引き込まれていた。
「それを説明する前に、まずは毒がどこに盛られていたのかを説明する必要があります…。犯人は西津(さいづ)の所持品に毒を塗ったんだ。西津(さいづ)の行動を利用して、あの男が極自然に、自分で毒を口に含むようにね…。」
「こ、行動を利用してってそんな都合の良い方法があるってのか?」
「確実に1つあります。該当する人間なら、この時期ついやってしまう行動が1つね…。」
　小五郎の疑問対する、はじめの言葉に、コナンがハッと気付いた。
「説明するよりも見てもらった方が速いな…。」
　ピンときていない目暮達に、はじめがコナンに歩み寄る。
「少年、ちょっと協力してくれない?」

「うん、ボクが中に入れば良いんだね？」
「あ、気付いた？」
「うん。眼鏡をかけてない目暮警部たちはピンとこなかったみたいだけど…。」
「さすが眼鏡っ子。んじゃ、よろしくね。」
「うん！」
　そう言ってコナンを残して店内に促すはじめに、目暮たちは訳が分からない、といった顔をしている。
「一体何をしようというんだね？」
「ちょっと待っててください。…そろそろ良いかな。少年、よろしく――！」
　はじめが店の外に声をかけ、ガラッと引き戸を開けてコナンが中に入ってくる。
「少年の眼鏡を見てください。」
　先程までとは異なり、透明だったレンズが完全に真っ白になっている。
「何が不思議なんだね。寒い所から暖かい所に来れば、眼鏡が曇るのは当然……?!」
　そこまで言って気付いたのか、目暮警部がハッとした。
「眼鏡をしている人間なら、必ず曇ったレンズを拭く。予め眼鏡の蔓の部分に毒を塗っていれば、後は時間の問題…。特に、あの男は割り箸を使う時に口で割る癖があったみたいですし…。」
「高木くん！被害者の眼鏡を鑑識に!!」
「はい！」
　目暮警部の指示に、高木刑事が鑑識の下へと走るが、はじめがそれを制止する。
「いや、その眼鏡を調べても何も出ませんよ。」
「え?!し、しかし君がたった今、眼鏡に毒を塗ったと言ったんじゃないか！」
「被害者の所持品なんて、事件後真っ先に調べられるもの…。わざわざそんな捻った毒の盛り方をした犯人が、そのままにしておく筈が無

い。だからすり替えた筈ですよ…。西津の眼鏡と自分の眼鏡をね…。」
「す、すり替えたって事はつまり…。」
　高木がただ1人それが出来る人間に向き直る。
「そう…。所持品に眼鏡があった谷中さん。あなたが西津を殺した犯人だ…！」
「な?!」
「嘘!?」
　はじめの言葉に、小倉と彩代が驚愕して谷中に向き直る。
「高木君！谷中さんの眼鏡のチェックを…！」
「は、はい！」
　目暮に指示された高木が谷中に駆け寄り、眼鏡を受け取って鑑識の下へと走る。
「で、でもよはじめちゃん！変じゃねぇか?!この店に入ってから、谷中さんは西津の野郎に1度も近付いて無いんだぜ!?」
「そうよ！谷中さんとあの男の間にはボウヤ達がいて…、あの男に触れるどころか近付く事さえ出来なかったのよ!?なのに、どうやって眼鏡に毒を塗ったって言う訳?!」
「逆を言えば、このトリックが使えるのは谷中さんくらいなんだよ…。」
　詰め寄る彩代に、はじめが静かに告げる。
「…確かにここじゃ毒を塗るのは難しいが…、谷中さんの理髪店なら容易に出来るでしょうな…。」
　目暮の言葉にはじめが頷き、続ける。
「あの男は元々は左利きの両利き。だから食事や咄嗟の時に使うのは左手。いつも割り箸を取るのも食べるのもそうだったからね…。だから箸を割った時に、いつもの癖で噛んでしまったせいで唇や歯に毒が付着し、そのままラーメンを食べたせいで毒を体内に入れてしまった…。因みに、テーブルにも毒が付いてたって事は、席に座る時にでも左手をテーブルに付いたんじゃないかな。たぶん、容疑者に入ってしまうのを承知の上で谷中さんがこの店に来たのは、眼鏡をすり替え

る他に、万が一にもあの男が触ったものを他の人間が触らないようにして他の犠牲者を出さない為…。」
「って事は、他の人間を巻き込まないようにする為か…。」
「推測ですけどね…。」
小五郎の言葉にはじめが頷く。
「警部！谷中さんが所持していた眼鏡から毒物反応が!!」
検査結果が出たらしく、高木が告げる。
「そうか…。どうやら、決定的な証拠が出てしまったようですな、谷中さん…。」
「おい、待ってくれ！こりゃ何かの間違いだ!!」
「そ、そうよ！谷中さんが人殺しなんて…。」
「もういいよ、２人とも…。」
目暮の言葉に、小倉と彩代が食ってかかるが、それは他ならない谷中自身によって制止された。
「私には、君たちに庇われる資格は無いんだ…。」
「「え？」」
そして語られたのは、〝ラーメン小倉〟に対する複雑な心境…。商店街から煙たがられている小倉に対する経済観念への怒りと、採算を度外視する心意気への好意。
この商店街から出て行って欲しい、でもきっとこの店なら他の場所でもやっていける。
そんな愛憎入り乱れた殺人劇は、１人の高校生によって暴かれた……。
その後、連行される谷中を見送った後、コナンははじめに疑問をぶつけた。
「ねぇ、お姉さん。」
「ん？今度は何？」
わざわざ屈んで目線を合わせるはじめを見詰めながら、コナンが尋ねる。
「どうしてマスコミに顔出さないの？探偵なら顔と名前が知られてる方が依頼がいっぱい来るんじゃない？」

はじめは、そんなコナンに〝思ってもみない事を言われた〟という顔で伝えた。
「あたしは1度も〝探偵〟と名乗った事は無いし、自分を〝探偵〟だと思った事も無いよ。これからもなるつもりも無いしね…。」
「え?!何で!?」
本気で驚くコナンに、逆にはじめが尋ねる。
「じゃあ、逆に聞くけど…。何で少年は探偵になりたいの?有名になりたいから?謎を解くのが好きだから?」
「それは…。」
「あたしはね、出来ればこういう事件には関わりたく無いんだ…。」
「どうして…?」
苦しそうな顔で笑うはじめに、思わずコナンが息を呑む。
「人の〝殺意〟とか〝悪意〟とか、そういうドロドロした感情はもう見たくないんだよね…。」
そう言って遠くを見詰めるはじめに、コナンが思わず言葉を失う。
〝この先には踏み込んではいけない〟、という本能的なブレーキに従って……。
〝名探偵の孫〟と〝平成のホームズ〟はこうして出逢った。
この出逢いが何を生み出すのか、それはまだ誰も知らない――――――…。

西と東の対決？　Ｆｉｌｅ１

都内のファミレスチェーン店〝Ｄａｎｎｙ（ダニー）'ｓ（ズ）〟。
はじめはそこにいた。
「いや～、悪いな金田一。またファミレスで…。」
「お寿司は～～～？」
馴染みの警部―剣持（けんもち）に捜査協力する代わりに寿司を奢（おご）ってもらう約束だったのだが、例によって例の如く、金欠の剣持（けんもち）によってグレードを下げられたのだ。
「すまん。今月は何かと出費が嵩（かさ）んでな…。小遣いも下げられてるんだ。」
「だったらせめて回転寿司位さ～…。」
「ほら！ここのカレーは絶品って評判なんだぞ？ここの料理は全部安くてウマいって有名でな！な！ほら、デザートも付けて良いから！」
今日は寿司の気分だったのに、と不満たらたらなはじめを今回はここで許せ、と剣持（けんもち）がメニュー片手に全力で宥めにかかる。
「ちぇ～…。」
渋々メニューを受け取り、妥協の姿勢を見せたはじめに剣持（けんもち）がホッと息を吐（つ）いた時だった。
「人が死んでる！警察を呼んでください!!」
「!?」
ガタタッ！
突然上がった叫びに、２人同時に立ち上がり、声の発生源―店のトイレへと走った。
「誰もトイレには入らないで！警察が来るまで誰も店から出ないでください！」
トイレの前で叫んでいるのは、日本語がペラペラだが外国人らしい、人相の悪い男。
「捜査一課の剣持（けんもち）だ！何があった？」
剣持（けんもち）が警察手帳を掲げ、外国人らしい男に話を聞いている間、はじめが１１０番通報し、店員に店内の客を誰も外に出さないように頼ん

だ。
最初はどう見ても高校生位の子どもに頼まれ、困惑していた店員たちだったものの、その後、状況を把握した剣持が店側に再度状況を説明した事で、それを了承した。
誰も店に入れず、且つ出られない状況が完成したところでパトカーが到着する。
「え?!剣持警部?!」
「何故あなたがここに?」
到着した高木と目暮が、剣持の姿に驚きの声を上げた。
「いや、今日は非番でな…。たまたま来ていたんだ。」
「お、お1人でファミレスですか…?」
偶然居合わせた、と言う剣持にひょっとして触れてはいけない事かと恐る恐る高木が尋ねる。
「いや、そこにいる金田一にメシを奢る約束をしていてな…。」
「あれ?!金田一さん!?」
ちょうど第一発見者である外国人らしい男の影に隠れて見えなかったらしく、はじめの姿を見付けた高木が素っ頓狂な声を上げた。
「どーも…。」
「なんだ、お前ら知り合いだったのか?」
ペコッと頭を軽く下げたはじめに、剣持が不思議そうな顔で尋ねる。
「この前、ちょっとね…。」
そう言葉を濁すはじめに、また何か事件に出くわしたのか、と剣持もその場での追及はしなかった。後で高木を問い詰めよう、と考えはしたが。
そして、目暮たちを交え、改めて第一発見者の外国人から状況を聴取していた時の事である。高校生位の男女3人と中年の男、どうみても小学生の子どもが連れ立ってどやどやとファミレスに入ってきたのは。
「なんだ、お前らは?!勝手に入ってくるな!!」
店に入るなり、レジ付近にいた高校生らしい少女が彼らに駆け寄

り、事件について話しているのを剣持が怒鳴り付けた。
「あ、いや、わたしたちは……。」
「あ、あなたは剣持警部殿?!」
弁明しようとしたらしい黒髪の少女の言葉を遮る形で、一緒に入ってきた中年のチョビヒゲの男が素っ頓狂な声を上げた。
「ん?お前、毛利か?昔一課にいた…。」
「は!毛利小五郎であります!!」
それまでのだらけたような態度を一変させ、ビシッと敬礼をして見せた父親に、娘の蘭が驚いたように尋ねる。
「お、お父さん、その人知り合いなの?」
「ば、バカ!こちらは警視庁の剣持警部殿だ!オレが刑事に成りたての頃に捜査のイロハを教えてくれた人だ!!」
慌てて剣持を紹介する小五郎にならい、蘭も焦って頭を下げる。
「し、失礼しました…!父がお世話になりまして……!!」
「娘の蘭です。」
小五郎もまた、剣持に蘭を紹介する。
「君がそうか…!?いや、大きくなったな…。君がまだ幼稚園位の時に1度会ってるんだが、まぁ覚えて無いだろうな。」
かつての部下と、その娘の成長に剣持が過ぎ去った年月の長さを再確認している間に、はじめは小五郎以外に唯一面識のある相手へと歩み寄った。
以前、ラーメン小倉の事件でかち合った少年—江戸川コナンに。
「や!この間ぶり。」
「お姉さん…!確か、はじめさんだっけ?」
剣持と小五郎らのやり取りを半ば呆然とした様子で見ていたコナンたちだったが、歩み寄ってきたはじめによってハッと意識を戻す。
どうやら知り合いらしい、とコナンらと共にこのファミレスに来た連れ—服部平次と世良真純、そして元々このファミレスにいた遠山和葉が2人のやり取りを見守る。
「良く名前覚えてんね———…。少年は確か江戸川だっけ?」
「コナンで良いよ、はじめ姉ちゃん。ところで、何ではじめ姉ちゃんが

こんな所にいるの？」
　わざわざコナンと目線を合わせる為に屈むはじめに、コナンが驚いたように問いかけるが、逆にはじめがコナンに問い返した。
「いや、それはこっちの台詞（せりふ）だけど…。関係者以外出入り出来ないようにしてもらったのに、何でコナンたちは堂々と規制線の中に入って来てる訳？」
「あ、あたしが呼んだんや！」
　急に話に入ってきた関西弁に、はじめが屈んだまま声の方を振り返る。
　セミロングの髪をポニーテールにした高校生位の少女―遠山和葉がはじめを見詰めていた。
「あんたは？」
　立ち上がりながらはじめが少女に問いかける。
「あ、あたしは遠山和葉や……！」
「いや、名前じゃなくて、何の権限があってここに部外者入れたのかって聞いてるんだけど…。」
　決して責めるような口調では無く、純粋な疑問による質問だったものの、取り付く島もない、結果的に少女の自己紹介を無視した形となった問いかけに反応したのは、隣にいた色黒の少年―服部平次だった。
「なんや、その言い方。事件が起こったって聞いたから和葉はオレらを呼んだんや。この西の高校生探偵、服部平次をのォ……！」
　何故か誇らしげに言い切る少年の名前には、確か覚えがあった。
「服部平次って確か…。関西方面の事件に次々首突っ込んで現場荒らしてるっていう、素人探偵？」
「し、素人探偵やとォ?!」
「？あ、ゴメン。探偵業の許可ちゃんととってんの？無許可の〝自称探偵〟って聞いたからさ…。」
　いきり立つ平次に、キョトンとした様子ではじめが返す。
　傍から見ればはじめが平次にケンカを売っているようにしか見えないが、別に本人にその意識は全く無かった。はじめ自身、止む無く

事件に関わった際には良く〝素人探偵〟扱いされる上に、彼女に服部平次の情報について教えた人物から、〝何の権限も無いただの自称〟と聞いていたが故である。
一般的に、探偵を名乗るには〝探偵業届出証明書〟が必要となる。〝探偵業開始届出書〟という書類に必要事項を全て記載し、必要書類と共に警察署を経由して公安委員会へ提出して発行してもらわなくてはいけない。
はじめの祖父―金田一耕助ももちろん持っていた。
この証明書が無いと探偵業務を行う事は許されない。厳密に言えば、勝手に依頼を受けて報酬を得てはいけないのである。
「きょ、許可はまだもろてへんけど、いずれは独立するつもりなんや！依頼料も交通費以外はもろてへんから、商売しとる訳やない!!」
はじめの疑問に痛いところを突かれた、と言わんばかりに平次が一瞬言葉に詰まる。
因みに、その場にいた他の探偵2名（世良真純―会話に入るタイミングを損なったとコナン）も一瞬、ウッとした顔をしたが、生憎誰も気が付かなかった。
「？つまりボランティアって訳？」
「そうや！」
報酬は受け取っていないからセーフ！と言い切る平次に一先ず納得したはじめだったが、すかさず突っ込む。
「でも、あんた自分が巻き込まれた訳でも、依頼された訳でも無い事件に良く首突っ込んで現場荒らして鑑識の人困らしてるって聞いたけど……。」
「な?!誰がそんな事言うてん!!?!」
はじめの言葉に、平次よりも先に和葉が目くじらを立てる。
「明智さん、警視庁捜査一課の警視さんだけど…。」
「け、警視…?!」
思ったよりも大物が出てきた事に平次の声が思わずひっくり返る。
「現場にズカズカ入り込むから、犯人の足跡や毛髪と選別するのが大変だって鑑識の人が溢してるから、あたしも気を付けるようにって言

われたんだよ。」
まぁ、はじめの場合巻き込まれる事件が大抵陸の孤島状態だったり、本物の離れ小島だったりで警察の到着が事件解決後になってしまう事も多く、不可抗力としてある程度大目に見られているところもあるのだが。
その分、警察がすぐに駆け付けられる場合には、生死確認などの止むを得ない場合を除いて現場に足を踏み入れないようにしている。
例外として、鑑識が全て調べ終わった後で剣持(けんもち)や明智の許可を得て同伴の下、現場に入る事もあるにはあるが。
閑話休題(かんわきゅうだい)
一方、平次を始めとする高校生探偵トリオはちょっとした衝撃を受けていた。
これまで、事件解決を第一に動いていたつもりだったが、それが迷惑になっている場合には気付いていなかった事に。いや、より正確に言えば自分では気を付けていたつもりでも現場を荒らしてしまっていた事にである。
しかも、平次は以前父親である大阪府警本部長—服部平蔵にこの事について叱責を受けていた事も同時に思い出した。その時は頭に血が上っていた上、その後の事件解決によって自分の中で何となくうやむやにしてしまっていたのだが…。父親故の説教とばかり思っていたが、現実問題として迷惑をかけていたとは…。
元々は持ち前の正義感で探偵を目指していた3人である。
実際に問題点を提示されれば、それを素直に理解し受け入れられるだけの度量はあった。
心無しか顔色が青くなっている3人に、はじめも何となく心情を悟った。
それ以上突っ込む事はせず、ただ一言「現場入りたいなら鑑識さんが調べ終わってから、刑事さんに許可もらって同行してもらいなよ。」とだけ呟く。
3人の高校生探偵は、やや青い顔のまま、重々しく呟いた。

西と東の対決？　Ｆｉｌｅ２

「……そういえば。コナン、そろそろその人たち紹介してくんない？」

思い出したようにコナンを見やるはじめに、コナンが頷く。

「こっちの色黒のお兄さんが西の高校生探偵―服部平次さん。それから、このポニーテールのお姉さんが平次兄ちゃんの幼馴染の遠山和葉さん。それからそっちが、同じく高校生探偵の世良真純さん。後、あっちに小五郎のおじさんと一緒にいるのがおじさんの娘の蘭姉ちゃんだよ。」

「ふーん…。」

一応ペコッと頭を下げるはじめを紹介する為、コナンが続ける。

「平次兄ちゃん、和葉姉ちゃん、世良の姉ちゃん。この人は金田一一（はじめ）さん。はじめ姉ちゃんは、あの金田一耕助さんの孫なんだって！」

「金田一耕助やと?!」

探偵を志す者ならば知らぬ者はいない〝名探偵〟の名に、平次が目を剥いた。

「聞いた事があるよ…。日本じゃ最も有名と言われている〝名探偵〟。それが君のお祖父さんだったのか…。」

世良もまた、驚きを隠せない様子で呟く。

「……別にそんな事いちいち言わなくても良いだろ？」

溜息を吐（つ）くはじめに、コナンが不思議そうに口を開こうとした時だった。

「ところでお前ら、一体どうやって入ったんだ？まさか、また目暮に呼ばれたか？」

小五郎たちとの近況報告が一通り終わった剣持（けんもち）が、第一発見者の外国人の男から話を聞いている目暮に目をやりつつ、小五郎に尋ねる。

「い、いやぁ…。実はそこにいる遠山和葉ちゃんがそこの西の探偵小僧に電話を寄越しまして…。いざ来てみたら入口の警官に通してもらえたもんで…。最近は現場に来ただけで、「目暮警部に呼ばれたんですね」ってスルーなんすよ……。」

「ったく、あいつら…。後で纏めて説教してやる…!!!」
「ま、まぁまぁ剣持警部。確かにあまり褒められた事では無いが、今までの毛利くんの功績に免じてここは1つ……。」
職務怠慢だ、と怒る剣持の声を聞き付けて目暮が宥めに来るが、剣持の怒りは止まらない。
「目暮!そもそもお前が事件現場にひょいひょい通すから毛利が図に乗るんだ!!そもそも探偵ってのは依頼されて動くもんで、自分から関係無い事件に首突っ込むもんじゃねぇだろうが!こいつらがズカズカと現場に入り込むせいで被疑者の残した証拠が台無しにされる事もあるってのに……!!!」
剣持の叱責に、小五郎始め探偵たちだけでなく、小五郎に頼りっきりの目暮や高木も思わず首を竦めた。
因みに、剣持と目暮は階級こそ一緒だが、剣持の方が年上であり先輩にあたるので目暮は剣持に頭が上がらない。
「大体、すぐに探偵に頼るなんてお前それでも刑事か?!」
「オッサン、オッサン。それブーメランだから。」
段々とヒートアップし、論点がズレ始めた剣持に、はじめがアンタが言うなよと突っ込む。
「ッホン…!お前は勝手に現場を荒らしたりせんだろうが。あくまでもオレは現場保全の観点からだな……。」
咳払いをして誤魔化し、無理矢理話を戻した剣持に呆れたような視線を送りつつ、再度突っ込む。
「何でも良いけど早いトコ容疑者の絞り込みしなよ…。」
はじめの言葉に、コナンが食い付く。
「容疑者って、やっぱり殺人事件なの?」
「いや、第一発見者の外国人は自殺じゃないかと言ってたけど…。」
思わず答えた高木が、「子どもに何教えてんだ!」と剣持に怒られた。
しかし、すぐにはじめへと向き直り問いかける。
「金田一、これは殺しか?」
「たぶんね……。」

「何でそう言えるんや？」
剣持（けんもち）の問いに頷いたはじめに、平次が不審そうに尋ねる。
「逆に聞くけど、アンタが自殺を考えるならどんな場所を選ぶ？」
「つは？いきなりなんや？」
「良いから。で、どんな場所を選ぶ？」
「そら、自分の部屋で首吊るとか、高いビルから飛び降りるとか……。」
はじめの急な質問に平次は面喰らうものの、再度尋ねられた事で一応答えを出した。
「まぁ、そんなトコか…。」
平次の答えに頷いて見せながら、はじめが続けた。
「大体の場合、自殺する人間っていうのは3パターンに分かれるんだよ。1つは自分の慣れ親しんだ場所で死を選ぶパターン。2つ目は邪魔なんかが入らないように、逆に人気の無い場所や時間帯を選ぶパターン。そして3つ目は、高いビルや踏切なんかの苦しまずに死ねるような場所を選ぶパターンにね…。」
はじめの雰囲気が先程までの親しみ易いものとは一変し、紅茶色の瞳が鮮やかさを増していく。
「だけどここは休日のファミレスの、しかも昼時…。まぁ、ここが被害者の行きつけだった、って言うんなら自殺の可能性も無い訳じゃないけど、それを言うならわざわざトイレを選んだっていうのと、死因が引っかかる…。」
「おい、死因は？」
はじめの推測に、小五郎が高木を振り返る。
「え?!あ、はい。毒です！青酸系の毒物が混入された飴（あめ）玉が遺体の口の中に入っていました。同様の飴（あめ）玉が遺体のポケットにも入っていましたので、恐らくそれが……。」
「別におかしい事なんて何もねぇじゃねぇか。」
小五郎の言葉に、はじめが訝し気な顔をする。仮にも〝名探偵〟と呼ばれている男にしては、あまりにも察しが悪い。
「おかしくない？自殺するっていうなら、わざわざ毒入りの飴（あめ）なんて回りくどい物を用意する必要は無いだろ？そのまま毒を呷（あお）れば良

い。」
「た、確かに…！」
「そう言われればそうだな…。」
　はじめの説明に、小五郎がハッとし、剣持(けんもち)もまた頷いた。
「それに直前の電話が気になる……。」
「電話って？」
　コナンがはじめに尋ねる。
「第一発見者の外国人が、事件発生時にちょうどトイレに入ってたらしくてね。その時に被害者との電話のやり取りを聞いてたらしいんだよね…。」
「そうそう！その外国人が最初に警察呼べって叫んでたんや！人が死んどるから、誰もトイレに入ったらアカンっちゅうて…。そしたら、そこの警部さんが詳しゅう話聞いて、店員さんに指示し始めたんや…！」
　はじめの言葉に、和葉が思い出したように口を開いた。
「何者なんだ？その外国人…。妙に現場に慣れてるようだけど…。」
「さぁ…。そこの刑事さんたちとは知り合いみたいだけど…。」
　世良の疑問に、はじめが高木の方を見やる。
「ま、まぁ、警察の関係者って言えなくもないけど…。」
　高木の答えに、蘭がハッとそれに該当する人物を思い出した。
「もしかしてその外国人って……。」
「ええ…。仕事柄、思わずそうしてしまって…。」
　突然会話に割って入ってきた男の声に、その場にいた全員が振り返る。
「キャ、キャメル捜査官!?」
　自身の話だと気付いて近寄ってきた、第一発見者の男―アンドレ・キャメルがそこにいた。
「捜査官って…。」
「この人相の悪い外国人知り合いなんか？」
　蘭の思わぬ一言に、和葉と平次が不審そうにキャメルへと詰め寄る。

「うん！FBIの捜査官で、今はたまたまお休み取って日本に旅行に来てるんだよね？」
「あ、ああ…。」
　何故かコナンが代わりに説明し、キャメルが頷く。
「へぇ…。日本語うまいんだ…。」
「キャメル捜査官は日本通なんだよ！」
　はじめの感心したような声に、再びコナンが答える。
（なんでさっきからコイツが答えるんだ…？）
　そんなにこの男と親しいのか。
　若干疑問に思ったものの、状況を説明し始めたキャメルに再び意識を戻した。
「そ、それで仲間と食べたここのカレーの味が忘れられなくて、1人で食べに来たら事件に遭遇した訳で…。」
「では、よろしければトイレで死体を発見した時の事を詳しく知りたいんですが…。」
「普通は断る所だが、君にはいつも世話になっているからな…。」
　キャメルの言い分に、小五郎が目暮に伺いを立て、目暮が渋々許可を出した時だった。
「ちょっと待て。まだ鑑識が調べ終わっていない。現場を調べるなら、鑑識の仕事が終わってからにしてもらう。」
　剣持（けんもち）がすぐにでも現場に足を踏み入れそうな小五郎たちにストップをかける。
「「は、はい…。」」
　その剣幕に、小五郎と目暮が反論せずに頷いた。
「で、ではキャメルさん、もう1度彼らに説明してやってくれんか？」
　気を取り直すように、目暮がキャメルに頼む。
「わ、私は亡くなった男性がいた2つ隣のトイレで用を足してたんですが、声が聞こえてきて…。」
「声って？」
　コナンの疑問に、キャメルが詳しく続ける。
「確か、いくら幼馴染っていってもそんな頼みは聞けないよ…。阿部

さんに毒を盛って殺したのは自分だ…。だったら自分は責任を取るしかない!!って言い終わったら急に呻き声がして、慌ててトイレから出てみたらこの状況に…。」
その言い方に、はじめは先程から感じていた違和感の正体を悟った。
口調に違和感があるのだ。10～20代ならともかく、被害者の男は恐らくは30～40代前後。先程遺体が運ばれていく際に、剣持(けんもち)の計らいで遺体を確認させてもらったが、〝自分〟という一人称を使うような生真面目なタイプには見えなかった。
薄汚れた作業着と、碌(ろく)に手入れされていない無精ひげ…。腕まくりされていた袖も左右非対称で、むしろ大雑把且ついい加減なタイプだと言える。
(だとしたら…。)
「キャメルさん、ちょっと聞きたいんだけど…。」
その〝阿部〟という人は亡くなった人とかなり親しい間柄だと思う、名前をちゃん付けで呼んでいた、と締めくくったキャメルにはじめが声をかける。
「何ですか?」
「あの被害者、もしかして語尾に〝や〟とか〝で〟とか付けてなかった?」
「そう言われれば、ちょうどその少年のような喋り方をしていたよ!」
はじめの言葉に、思い出したようにキャメルが平次を指差す。
「え?オレ?ほんなら、関西弁やったっちゅうんか!?」
「カンサイベンっていうかは知らないが、そこの彼女が言うように語尾に〝や〟とか〝で〟とか付いてたよ…。」
「だったらその〝阿部ちゃん毒殺事件〟…、関西の方で起きた事件かもしれないな…。」
キャメルの証言に世良が目暮を見やる。
「すぐに調べろ!」
「はい!」
その視線を受けた目暮が、高木に指示した直後だった。

「いや、〝阿部ちゃん〟で調べてたら出てこないよ…。」
はじめが、それを制止する。
「どういう事だ、金田一？」
急に何を言う、と言いたげな周囲の視線をよそに、剣持がはじめに問いかける。
「あの被害者が関西の出身だったなら、たぶん〝阿部ちゃん〟じゃなくて〝飴ちゃん〟って言ったんだと思うよ。」
「確かに、それなら毒入りの飴玉咥えさせられとった事への辻褄も合うしのォ…。」
はじめの言葉に、平次のみが納得したように頷く。
「ちょっと待て！2人だけで納得するな。詳しく説明してくれ。」
理解する事を早々に諦めた剣持に、はじめが溜息を吐く。
「関西出身者だったら、〝自分〟は〝お前〟の事。つまり、〝飴ちゃんに毒を盛って殺したのはお前だ。だったらお前、責任を取るしかないぞ〟って意味になる。」
「せや…。そして、その姉ちゃんの言う通り、今のを関西弁に直すとこうなんねん。〝なんぼ幼馴染ゆうたかて、そないな頼み聞かれへん！飴ちゃんに毒盛って殺したんは自分や！せやったら自分…、責任取るしかないで!!〟ってな。」
平次の言葉に、キャメルの以外の人間があっ！という顔をする。
「そうそう、その口調！私が聞いたのはその言葉と全く同じです！でも、何故〝Ｍｅ〟の筈の〝自分〟が〝Ｙｏｕ〟になるんです？」
しかし、キャメルだけはいまいちピンときていない。
「例えば、〝手前どもの責任です〟の〝手前〟は自分の事だけど、この場合はケンカ言葉で〝手前ェ〟って言うと相手の事を指すのと同じ…。日本語は色々難しいのさ！」
「まぁ、ＴＶで関西弁を聞き慣れているワシら日本人なら分かるだろうが、アメリカで日本語を習ったあんたには無理だろうな…。」
納得出来ていないキャメルに世良が軽く説明してやり、目暮がフォローを入れた。
「被害者に毒入りの飴を咥えさせた犯人がまだこのファミレス内にい

る筈だよ…。被害者と幼馴染の、関西出身の相手がね……。」
　はじめの言葉に、コナンがほぼ無意識に続ける。
「キャメル捜査官が犯人の声を聞いてないって事は、犯人は被害者を電話でトイレに呼び出したってトコか……。」
「ああ…。たぶん、自首を勧める被害者とこのファミレスで待ち合わせしとったけど、同じテーブルにつかんと携帯でトイレに呼び出して毒殺したんや…。電話でうまい事誘い出せたら後は殺すだけや…。喋る必要あらへんし、携帯をトイレに沈めたらデータは消えてまうしな…。」
　コナンの後に平次が続き、世良が締める。
「でも、犯人にとって想定外だったのは、そのトイレに偶然ＦＢＩ捜査官がいて素早く死体がある事を告げ、これまた偶然居合わせた捜査一課の刑事が素早く客を店内に閉じ込めてしまった事か……。」
「よーし！容疑者を３０～４０代の男に絞って１人ずつ事情聴取だ！被害者と幼馴染ならその位の年齢だろうからな！」
「はい！」
　目暮と高木がフロアへと踵を返す。
　その様子を何とはなしに目で追っていたはじめに、不意に平次が話しかける。
「流石（さすが）、金田一耕助の孫やな…。なかなかの推理力やないか。」
「…どーも。」
　急に何だ、と平次を見やるはじめに、平次が続けた。
「せやけど、この事件はオレがもろたで…。犯人が関西人やったら、オレの方が有利やからのォ…。この勝負、オレの勝ちや！」
「…勝負？」
　平次の言葉に、はじめがピクリ、と反応した。

西と東の対決？　Ｆｉｌｅ３

――――――――――その言葉を聞いた途端、怒りで目の前が赤く染まったかのような錯覚を起こした。
「それ、本気で言ってんの？」
「あ？」
はじめの、それまでの空気を一変させるかのような怒りに満ちた声に、平次が聞き返す。
「はじめ姉ちゃん？」
そのやり取りに、コナンを始めとした、その場を離れた目暮と高木以外の人間が何事かと２人に注目した。
「人が１人死んでるのに、それを勝負にするってのはどういう了見（りょうけん）だって聞いてんだよ……！」
「な、何が悪いねん…！探偵としてどっちが上か白黒付けるんが、そんなに悪いっちゅうんか!?」
問い詰めるようなはじめの言葉に、悪気の無かった平次は納得がいかない。
コナンたちもまた、何故はじめがそこまで怒っているのかが理解出来なかった。
確かに、殺人事件を〝勝負〟扱いするのは不謹慎だが、そこまで極端に反応する程の事だろうかと。
それは平次も同じ事。
平次にしてみれば、自分よりも先に〝阿部ちゃん〟の真相に気付いた彼女の実力を認め、ライバル意識から何気無く出た言葉に過ぎない。
しかも、はじめは彼の〝昭和の名探偵〟金田一耕助の孫。元々直接の面識が無い、噂程度にしか知らない〝工藤新一〟にも勝負を仕掛けにきた程フットワークの軽い平次である。生来負けず嫌いでプライドの高い平次が相手にとって不足無し、とある意味燃え上がったのは仕方の無い事かもしれなかった。
一方、はじめにしてみれば、その言葉自体が信じ難いものである。

はじめがこれまでに巻き込まれてきた事件は、そのほとんどが猟奇的な連続殺人。それも、大抵が復讐によるものだった。

被害者だけでなく、犯人自身も苦しんできた事件をこの場にいる誰よりも多く見てきたはじめだからこそ、〝殺人事件を勝負事に利用する〟という発想自体が信じられないものである。

同じく数々の事件に関わってきた高校生、という立場でありながら、その立ち位置は全く異なる。〝探偵〟を自称する平次や世良、そしてコナンとは異なり、はじめはただの1度も自身を〝探偵〟と名乗った事は無い。幼馴染や、懇意にしている刑事らに祖父の名を出されて紹介される事はあっても、自分で祖父の名を出し、捜査に加わろうとした事は1度も無かった。

幼い頃から、祖父の話を良く聞いていたから。

人が作り出した惨劇、憎悪、そして悲哀…。それを祖父は幼かったはじめに語った。

子や孫の中で、自身の血を最も色濃く受け継いでしまった孫に。

自身(祖父)と同じように、最愛(はじめ)の孫もまたいずれ数奇な運命に翻弄されるだろう事が、祖父には分かっていたのだろう。

希代の〝名探偵〟金田一耕助。その人生は決して平穏とは程遠いものだった。しかし、彼自身は〝探偵〟という職業を選び取った事からも分かるように、ある種自身で望んでそれを受け入れていたとも言える。

だが、孫であるはじめは違う。はじめもまた、昔から事件に巻き込まれ易い子どもだったが、自分から首を突っ込んでいく事は無かった。むしろ、そうした事件に巻き込まれる事を忌避(きひ)していた位である。

だからこそ祖父—耕助は最愛(はじめ)の孫に自身が関わってきた事件について語ったのだ。将来、自身(祖父)の手の届かない場所ではじめが事件に巻き込まれても、身を守り、尚且つ事態を迅速に収束させる事が出来るように。

そして、祖父の予想通りに成長したはじめは様々な事件に巻き込まれる事となった。

――――――――――――――――――――はじめ自身の感情を置き去りにするように。
その高過ぎる知能故に、人間の隠された感情や裏の顔に気付いてしまうはじめにとって、それは何よりも辛いものだった。
隠されている人間の本性に気付いてしまう。その裏に秘められた、怒りや憎しみ、悲しみの感情が分かってしまう。
しかし、見ないフリ、気付かないフリをするには彼女は真っ直ぐ過ぎた。優し過ぎたのだ。――――――――――犯人にさえ同情してしまう程に。
だからこそ、はじめは謎を解く。
それ以上の悲劇を生まない為に。被害者だけでなく、犯人をも憎しみから掬(すく)い上げる為に。
その為に事件に向き合ってきたはじめにとって、平次の言葉は決して赦せるものでは無かった。
だからこそ、はじめは平次に言い放った。
「これは小説でもゲームでも無いんだ…！殺人事件を〝勝負〟に利用するあんたの感覚、まともじゃね――――――よ!!!」
「なっ?!」
「何やて?!」
はじめの言葉に、平次と和葉がいきり立つ。
あわや、一触即発、となりかけた時、
「落ち着け、金田一!!!」
声を荒げるはじめの肩を後ろから掴み、剣持(けんもち)が制止した。
「気持ちは分からんでもないが、ちょっと落ち着け…。この坊主も悪気は無かったんだ。流石(さすが)に言い過ぎだぞ。」
「あたしは間違った事は言ってない…！謝る気は無いね……!!!」
剣持(けんもち)が窘めるが、ヒートアップしてしまったはじめはそのままそっぽを向く。
「分かった、分かった…。ちょっと席に戻って休んでろ。オレも後で行くから。」
このままはじめがここにいては、余計に状況を悪化させるだけだと

悟った剣持(けんもち)がはじめをフロアに押し出した。
「…分かったよ。」
剣持(けんもち)の介入で、はじめも自身が極度の興奮状態にある事を悟った。そして、それによってわずかに理性が戻る。
このままここにいてはまたトラブルになるだけだろう、と判断出来るだけの落ち着きは取り戻していた。
剣持(けんもち)に逆らう事無く、この場は任せて先程までの席へと戻る。
「金田一がすまなかったな…。」
はじめが席に着いたのを確認し、剣持(けんもち)が平次に振り返る。
「あ、いや…。」
先程までは平次自身も頭に血が昇っていたものの、剣持(けんもち)が介入し、トラブルの相手であるはじめがその場を離れた事で、落ち着きを見せていた。
「や、オレも言われてみれば不謹慎な事言うてしもたから……。」
つい、思いがけないライバルの出現に興奮してしまったが、振り返ってみれば、確かに不謹慎な発言だったと己を振り返る事が出来る程度には冷静になっていた。
「それはそうかもしれへんけど、あんな言い方しなくたってええやん!!いくら何でも、言い過ぎちゃう?!」
「うん…。服部くんも悪気は無かったんだし…。ちょっと過剰に反応し過ぎじゃないかな?」
しかし、それで収まらなかったのは不当に幼馴染を貶められた(と、思っている)和葉だった。蘭もまた、はじめの過剰にも見える反応に眉を寄せている。
小五郎やコナンも言葉にはしないものの、同様の考えを持っているのはその表情で分かった。
剣持(けんもち)が何とフォローしたものか、と頭を悩ませる。
そんな中、
「まぁ、確かに言葉はきつかったかもしれないけど、言ってる事は間違って無いと思うよ?」
言い方はきつい、としつつもはじめの言い分に一応の理解を見せた

のが世良だった。
　元々帰国子女である彼女は、本音をオブラートに包みがちな日本と違って、自分の意見をはっきりと述べる環境に身を置いていた。ケンカじみた言い合いにもある程度慣れている。
「でも、世良さん…。」
　蘭が世良に反論しようとした時だった。
「すまんな…。服部くんだったか？金田一も、何も彼を貶める為にあんな事を言ったんじゃないんだ。あいつにも色々あってな……。」
　流れが変わりかけたのを好機、と剣持(けんもち)がもう1人の娘と言っても過言でない、年の離れた友人(はじめ)の為にフォローに入る。
「色々、とは？」
「うむ…。あいつは、昔から事件に巻き込まれ易くてな…。」
　何か理由があるのか、と真っ先に聞く姿勢を見せたかつての後輩――小五郎に、向き直りながら説明する。
「それも、そのほとんどが連続殺人だ。動機のほとんどが復讐の、な……。」
「ほとんどが連続殺人って…。」
「復讐がほとんどって…。」
　思いがけない剣持(けんもち)の言葉に、蘭と和葉が言葉を失う。
「〝名探偵〟の血がそうさせるのか、何とも因果な事にな…。あいつは毛利たちと違って〝探偵〟を名乗った事も無ければ、自分から事件に首を突っ込む事も無い。だが、巻き込まれちまう。1度巻き込まれれば、それを黙って見ていられるような奴でもないんだ。」
「……この前、はじめ姉ちゃんが言ってたんだ。」
　剣持(けんもち)の言葉に思い出したようにコナンが呟く。
「自分の事を〝探偵〟だと名乗った事はないし、思った事も無い、これからもなるつもりも無いって…。出来れば事件には関わりたく無いって言ってた。人の〝殺意〟とか〝悪意〟とか、ドロドロした感情はもう見たく無いって…。」
　あの時の、遠くを見詰めていたはじめの苦し気な横顔を思い出し、コナンは自分たちとは考え方も立ち入りもまるで違うはじめに思い

を馳せる。
「…さっきも言ったが、金田一が巻き込まれる事件は怨恨による復讐の連続殺人がほとんどだ…。その犯人の多くは被害者たちに何らかの被害を受け、法にも守ってもらえず、憎しみを募らせて決死の思いで復讐を決行していた…。事件が解決しても、後味の悪さは残る。あいつも、何度も傷付き、時には自分も死にそうな目に遭いながらも絶対に逃げ出す事はしなかった。復讐なんかじゃ誰も救われない、被害者の為にも、犯人の為にも、早く止めてやらなきゃってな……。」
「犯人の為…？」
そんな事など考えた事も無かった。
剣持(けんもち)の言葉に、平次は勿論、その場にいた者たちが愕然とする。
「あいつは、いつも言ってるよ。復讐なんて間違ってる。犯人も、そんな事をしたくてしたんじゃない、そうせざるを得ない状況に追い込まれちまっただけだってな。だから止めないといけない、って言って、犯人が捕まった後も留置所や刑務所に定期的に面会に行ってるんだ。あいつのお陰で捕まった犯人の中には、そんなあいつの行動で更生し始めてる奴もいる。」
「捕まった後に、面会を……？」
そんな事考えた事も無い。
自分は〝探偵〟だ。〝探偵〟は、目の前の謎を解き、犯罪を犯した人間を捕まえる事が仕事だ。
――――――――捕まった後の事なんて、考えた事も無かった。
コナン、否。工藤新一は目から鱗が落ちる思いだった。
――――――――そんな探偵、聞いた事も無い。
しかし、人間的にどちらが正しいのかと言われれば……。
思わず考え込んだ新一の思考を、剣持(けんもち)の声が引き戻した。
「言い方こそキツかったが、事件に関わる際にはあいつなりに真摯に対応してるんだ。だからこそ、〝勝負〟って言葉が赦せなかったんだろう…。」
金田一(はじめ)一。
剣持(けんもち)から語られた彼女の姿は、探偵たちの心に密やかな、しかし確

実な変化をもたらした。それが今後、どのような影響を与えるのか、それはまだ誰も知らない――――――――――…。

――――――――一方、その少し前。

剣持(けんもち)たちと離れたはじめは、先程まで座っていた席に戻っていた。

「あれ?!金田一さん?」

そこに、目暮と高木が彼女の姿を見付ける。

「どーも…。」

「君1人かね?剣持(けんもち)警部はどうしたんだい?」

「さっき、ちょっと…。」

目暮の問いに言葉を濁し、目を逸らすはじめに不思議そうな顔をする目暮だったが、はじめの言葉に意識を戻す。

「そういえば、容疑者は絞れたんですか?」

「あ、ああ。事件前後にトイレに入った男性客は7人いたんだけど、最終的にアリバイの無い3人に絞る事が出来たよ。」

「3人…。」

高木の言葉に、はじめが考え込んだ。

「……その中に、事件が起こってから食事を注文した人っていますか?」

「あ、ああ…。2人いるが、それがどうかしたのかね?」

「因みにメニューは?」

目暮の答えに、そちらの方を見ながらはじめが尋ねる。

「確か、カレーライスと塩ラーメンだったかな…。」

「そのメニューにおしぼりって付いてました?」

記憶を辿る高木に確認するが、高木が首を振る。

「いや、無かったと思うけど…。」

「じゃあ、店員さんに確認してください。そのどちらかが、おしぼりをもらってる筈です。被害者の口に飴玉(あめ)を咥えさせた時に付着した毒を拭き取る為にね。」

「何だって?!どういう事だね?!」

はじめの断言に、目暮が食い付いた。

「第一発見者のキャメルさんが最初に自殺だと思ったのは、トイレで

他の人間の気配を感じなかったから…。当然、手も洗えなかった筈ですよ。水音なんかすれば、誰かがそこにいたのはすぐに分かる。その後すぐに店を出れば問題無かっただろうけど、生憎それも出来なかった。かと言って、そのまま毒を手に付着させたままじゃ自分も危険…。おしぼりをもらって拭き取る位の事はした筈。何も注文していないのにもらうのは不自然ですから、カモフラージュの注文も一緒にね…。」

「し、しかしテーブルの上におしぼりなんて…。」

「ポケットにしまうか何かしたんじゃないですか？毒物の付着したおしぼりを店内に捨てれば、指紋で誰が捨てたのかすぐに分かってしまうし…。身体検査でもすれば、すぐに出てくると思いますけど。」

はじめの補足に、目暮が高木を振り返った。

「すぐに調べるぞ！」

「はい!!」

そして、その直後。

「おお、いたいた。金田一、こっちはどうだ？」

剣持(けんもち)が小五郎らを後ろに引き連れてはじめに歩み寄る。

平次と目が合ったのを、ふいっと剣持(けんもち)に向き直る事で視線を外しつつ答えた。

「今容疑者の身体検査中…。」

はじめと目が合った瞬間に口を開こうとした平次だったが、結局言葉が見付からずにそのまま口を噤む。

一瞬微妙な空気になりかけたのを、コナンが空気を変えるようにはじめに尋ねた。

「し、身体検査って事は怪しい人がいたって事だよね?!」

「まぁね…。」

「って事は、見付かったのか関西人。」

良く見付けたな、と言いた気な剣持(けんもち)に説明する。

「いや、別に関西人を見分ける必要は無いんだよ。」

目暮たちにしたのと同じ説明をしてやれば、探偵たち、特にコナンと服部がその手があったか、とでも言いたそうな顔をした。

――――――――――その後、青酸系の毒物が付着したおしぼりを隠し持っていた容疑者が自供し、事件は終わりを告げた。

はじめは、平次たちとは目を合わせる事無く、言葉すら交わさずにその場を後にした。

何か言いたそうな彼らの目に、気付かないフリをして……。

同世代の〝探偵〟を名乗る者たちとの邂逅は、幕を閉じる。彼女の心に、ほんのわずかの後悔を残して。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ１

長者番付の常連だった売れっ子ミステリー作家、山之内恒聖が６０歳の誕生日を前に急死した――――――…。

山之内には身寄りが無く、数十億に上ると見られる遺産の行方が世間の耳目を惹いた。

心臓を患っていた山之内は、ここ１年程は公の席に出る事も無く、北海道の山中深くにある別荘に籠り、燃え尽きんとする蝋燭の炎の如く執筆に没頭していたという…。

山之内の終の住処となった別荘を、人はこう呼んだ――――――。

人形の棲む家〝露西亜館〟……。

ファミレスチェーン店〝Ｄａｎｎｙ，ｓ〟で起こった殺人事件から１週間程経ったある日――――――…。

はじめは学校から帰宅した後、夕食までの時間を自室で過ごしていた。

いつも通りに床に敷いたホットカーペットの上に直接座り込み、気に入っているブランケットをかけ、ローテーブルの上には温かいココア。

背後のベッドにもたれかかるようにして、趣味の１つである編み物で暇を潰していた時だった。

『電話だよ！電話だよ！電話だよ！』

「ん…？」

メールやラインならまだしも、電話とは珍しい。

編み棒を操っていた手を止め、ローテーブルの上に置いていたスマホを手に取る。

「いつきさん…？」

とある事件がきっかけで知り合った、フリーライターのいつき陽介。

その後も何かと世話をしたりされたりなど、持ちつ持たれつの関係

を続けていた。
　言うなれば年の離れた友人、といったところか。
　と言っても、社会人と高校生なのでそれほど頻繁に連絡を取り合っている訳でも無い。ますます珍しい、と思いつつスマホをタップした。
「もしもし？」
『お――――、金田一！久しぶりだな！』
「久しぶり。急にどしたの？いつきさん。」
『いやぁ、実は折り入ってお前に頼みたい事があってな…。明日、時間作れるか？』
「特に用は無いから、今位の時間なら空いてるけど…。何？また厄介事？」
　これまでも、いつきの頼みで外出した先で事件に巻き込まれた事が数回ある。
　まぁ、全部が全部ではないし、別にいつきが意図した訳ではないのだが…。
　しかし、経験上やや警戒したような返事を返したはじめを誰も責められまい。
　いつきも電話先で苦笑するのが分かった。
『まぁ、そう言うなって…。実は、お前に解いて欲しい暗号があるんだよ。』
「暗号…？」
　いつきの言葉に、はじめがピクリと反応する。
　これはやっぱり厄介事だな、と断じながらも、いつきには何かと世話になっているので話も碌（ろく）に聞かずにお断りします、とは言えなかった。
『おう。詳しい事は明日話すから、取り敢えず明日の放課後に編集部に来てくれ！』
「……まぁ、いつきさんには何かと世話になってるし？話位なら聞くけど…。最終的に引き受けるかどうかは別だよ？」
『分かってる分かってる！んじゃ、明日の、そうだな夕方の４時位に

常談社の編集部まで頼む！』
「りょーかーい。って切るの早……。」
言うだけ言って電話を切るいつきに、思わず溜め息を吐きながらスマホをローテーブルの上に戻す。
代わりにココアのマグカップを手に取り、呟いた。
「……嫌な予感がするな…。」
これまでにも数々の事件に巻き込まれてきた事で磨かれてきた勘が警鐘を鳴らすのを感じたが、同時に自分はこの一件を引き受けるだろう、という妙な確信もあった。
いや、逆に言うならば、自分が行かなくてはいけない、という予感があった。
――――――そして翌日。
はじめは幼馴染の七瀬美雪と、はじめの助手を自任する後輩の佐木竜二と一緒に、いつきに指定された常談社の編集部を訪れていた。
「ってか、何でお前らも一緒に来んの？」
いつきを待っている間に、美雪と佐木を見やりながら尋ねる。
「ボクは先輩の助手ですから♡」
「あたしはミス研の部長として、暗号に興味があって…。」
「ったく…。」
まぁ、いつきならば気にしないだろうが…。
「や～、ワリ――――、ワリ――――！わざわざ来てもらって悪かったな～。おお、七瀬クンと佐木クンも久々だな。」
時間に遅れる事約５分。
いつきが編集部へと入ってきた。
「こんにちは。」
「お久しぶりです。」
「遅かったじゃん、いつきさん。」
笑顔で会釈する美雪や佐木とは対照的に、ムスッとした顔で遅刻を言及するはじめに、いつきが苦笑しながら謝る。
「悪かったって。ケーキでも奢ってやるからそれで機嫌直せよ。なっ！」

「もう…。それより、解いて欲しい暗号って？」
「おっと、その前にちょっと紹介させてくれ。」
さっさと本題に入ろうとしたはじめを制止し、いつきが後ろを振り返った。
はじめと美雪、佐木もそれに釣られていつきの後ろへと視線を向けた。
いつきの影に隠れて見えなかったものの、３０代半ば位のスーツ姿の男が立っていた。
「文芸常談（じょうだん）で副編やってる宝田光二さんだ。」
「どうも…。いつきさんにお噂は伺ってます。あの名探偵―金田一耕助のお孫さんだそうで…。」
「はぁ、金田一一（はじめ）です。こっちの２人は幼馴染の七瀬美雪と、後輩の佐木竜二。」
眼鏡の奥の目を細め、穏やかな笑みで挨拶する男に取り敢えずはじめも立ち上がり、挨拶を返す。美雪と佐木も、それを見て慌てて立ち上がった。
「七瀬美雪です。」
「助手の佐木竜二です。」
「誰が助手だ。誰が。」
「イテッ！」
調子の良い佐木をポカっと殴ったところで、宝田がやや不安そうな顔をし、いつきに宥められているのが見えた。
「大丈夫ですよ！こう見えてもＩＱ１８０の天才なんスから！」
「ゴホン…。え～、実はですね個人的に極秘のお願いがありまして。うまくいった暁（あかつき）にはそれなりの謝礼を…。」
「それなんですが…。確認したいんですが、それはあたしに〝探偵〟として頼みたい、という事でしょうか？」
宝田の話を途中で遮り、真意を確認する。
「え？ええ。いつきさんから、金田一さんも数々の事件を解決してきた優秀な探偵さんだと紹介されまして…。」
その言葉に、いつきをギロリと睨み付ける。

「いや、ほら暗号解読の話からそんな話になってな…。」
自分が地雷を踏んだ事に気付いたいつきが慌てて言い訳をする。
「つたく、調子良いんだから…。」
溜息を吐いた後に宝田に向き直り、断った。
「いつきさんが調子良い事言ったみたいですが、あたしは探偵を名乗った事はありませんし、名乗るつもりもありません。所謂私立探偵としての資格を持っている訳ではないので、報酬も受け取る訳には…。」
「え?!話が違いますよ、いつきさん…!」
「大丈夫ですって。金田一、まずは話位は聞いてくれんだろ?」
話が違う、といつきを振り返る宝田を再度宥めながら、いつきが悪戯っぽい笑みを浮かべながらはじめに念を押す。
「そりゃ話を聞く事は出来るけどさ…。」
「要するに、〝探偵〟として金はもらえないって事だろ?だったらほら、暗号解読の〝アドバイザー〟としてバイトするってのはどうだ?」
「なるほど!それならセーフですね!」
「いや、それって言いようの問題じゃない?」
黒寄りのグレーな発言をかますいつきに、佐木がその手があったか、と頷くがそういう問題だろうか。
まぁ、実際に他人について調べるのではなく、あくまでも暗号解読であればギリギリセーフかもしれないが。
「じゃあ、まぁ…。詳しいお話を伺っても良いですか?」
はじめが宝田に詳しい説明を求めた時だった。
「宝田さん!音羽屋証券さんから急ぎの電話が入ってますけど…。」
「あ…、後でかけ直すって言っといて!」
電話が入っている、と告げに来た女性社員に宝田があからさまにギクリと表情を強張らせる。
「ま、全く落ち着かないな!ここは!あまり人に聞かれたくないし、場所を変えましょう!」
取り繕うように席を立った宝田の様子に、はじめはある種の焦りを

感じ取った。
（この様子だと仕事関係じゃなくてプライベートかな……。）
それも、恐らくは宝田にとっては歓迎出来ない連絡だろう。
いつきと共に宝田の後を追いながら、徐々に不穏な空気を感じ取る。
「遺産相続ですか？」
「ええ、私にとっても振って沸いたような話で…。」
常談社近くのファミレス（Ｄａｎｎｙ’ｓではない）に場所を移し、全員に飲み物（はじめにはそれにプラスしてベイクドチーズケーキ）が届いたのを待ち、宝田が口を開く。
話を切り出すと同時に差し出された書類には、底意地の悪そうな初老の痩せた男の写真。
はじめには見覚えの無い男だったが、それを見た美雪が驚いたような声を上げた。
「あっ！この人…。最近亡くなったミステリー作家の山之内恒聖ですよね。」
「ああ、名前だけは聞いた事ある…。」
読んだ事は無いが流石に名前位は知っていた。本屋に行った時に、ポップ体の手書き広告を目にした覚えがある。
「も～、ミス研の癖に知らないの？超有名ミステリー作家じゃない。」
「ミステリーに興味無いし……。名前知ってただけでも褒めてほしいね。」
そもそも、ミステリー研究部に所属していると言っても、はじめは幽霊部員。美雪に付き合って、人数稼ぎのために入部したに過ぎない。
「実は、その山之内先生の莫大な財産の相続人の１人に、どういう訳か私が選ばれたんです。」
「え――――――――!!」
宝田の言葉に、美雪と佐木が驚愕のあまり立ち上がる。
「や、山之内恒聖の財産って言えば、何十億の世界じゃないですか!!」
「ワォ。」

美雪の叫びに、思わずはじめも驚いた。
「宝田さんは長い事、山之内の編集者としてほとんど家族同然の付き合いを続けてきたんだよ！山之内は身内も無いし、そういう意味じゃ最も親しくしていた宝田さんに財産を、ってのも何か良い話だろ？」
「へぇ…。そんな事もあるのかねぇ…。」
いつきの言葉に、はじめが皮肉気に相槌（あいづち）を打つ。
書類に載っていた山之内恒聖（こうせい）の写真、それがどうもはじめの〝勘〟に引っかかったのだ。
〝人相学〟という学問がある。人の顔にその人の性格や生き方が表れている、という考え方によるものだ。
山之内のような三白眼（さんぱくがん）は、人を簡単に信用せず、疑り深く、自分から心を開かないと言われている。
目頭から目尻まで太く長い眉は、外面の良さと淡々と人を切り捨てる冷酷さ。
口が歪んでいるようにも見える表情は、表向き見せている顔と実際の本性のギャップ。
写真から読み取れる山之内恒聖（こうせい）の顔立ちは、とても他人に自分の財産を、それも何十億とも言われている巨額の遺産を遺すような人間には思えない。
勿論、はじめは専門的に人相学を観ている学者でも占い師でもないのだから、間違っているかもしれないが、これまでに様々な事件に巻き込まれてきたはじめだからこそ、その〝勘〟が告げていた。
〝この男は信用出来ない〟と――――――…。
「――――ただ、ちょっと難しい条件がありまして、それで金田一さんお力を拝借したいと…。」
「条件…？」
宝田の言葉に、はじめがピクリと眉を動かす。
「ええ…。実は相続人というのは私を含めて5人いるんです。全員、先生の親しい友人や恩人で先生を含めてちょっとした素人楽団（しろうと）のようなものを組んでお付き合いしていた仲間です。勿論、それぞれ大変なミステリーマニアなんですが、事前に届いた〝案内状〟によればま

だ相続が決まった訳ではなく、我々はあくまでも〝相続候補者〟にすぎないようなんですよ…。」
「候補者？」
　一気に話がキナ臭くなってきた。
「山之内先生はこの５人の候補者に対して、相続資格を手にする為のゲームのようなものを用意していらしたんです。私たちはこれから亡き山之内先生の指示に従って、北海道の先生の別荘へ行き、定められた時間の中で用意された〝暗号〟を解く。そうやって隠された〝遺書〟を見付けた者だけに遺産が与えられるというんです。」
「――――――よーするに、その〝暗号〟をあたしに解いて欲しいと…？」
「頼むよ金田一！オレのつまんない原稿、たまに拾ってもらってんだよ、この人にはさ!!」
　この時点で嫌な予感しかしないが、いつきには何かと世話になっているし、唐突な頼み事はお互い様である。いつきに頭を下げられては無下（むげ）には出来ない。
「……その〝暗号〟ってどんなものなんですか？」
「〝案内状〟の中に先生が作られた詩（うた）のようなものが同封されていました。」
　そう言って宝田が封筒から取り出した紙には、５行の詩のような文章が書かれていた。
『楽団は朝礼で前から順に首を刈られた
　さぁお次は数合わせ
　２番目の子の首を５番目の子の首の
　右に並べてみてごらん
　楽しいリズムの始まり始まり』
「何これ？さっぱり意味わかんない！」
「う～～～～ん…。」
　美雪と佐木が首を捻る中、はじめの頭脳は高速で回転していた。
（前から順に…、数合わせ…。２番目を５番目の右に…。このままじゃ〝解読〟の為のピースが足りないな…。他に何か、〝鍵〟になる

ものがある筈……。）
「宝田さん。暗号はこれだけですか？」
「え、ええ。あらかじめ渡されていたのはこの封筒だけで……。」
「そうですか…。…この暗号はたぶん、これで完成じゃない筈です。恐らく、その別荘に〝鍵〟となる何かがある筈。」
「はじめちゃん、〝鍵〟って？」
「それはまだ分からない。だけど、この〝暗号〟を解くにはその別荘まで行かなきゃいけないのは確かみたいだ…。」
美雪の問いに、〝暗号〟から目を離さずに答えるはじめに、宝田が目を輝かせる。
「それでは…?!」
「ええ。このお話、お引き受けします。」
「おお…！ありがとうございます！金田一さん…!!」
喜びを露わにする宝田に、はじめは昨日感じた〝予感〟を再び感じていた。
〝暗号〟に対する好奇心もあるにはある。
しかし、それ以上にはじめの心を動かしたのは、沸々と感じる、項の毛が逆立つような緊張感。
（この感じ、前にも……。）
何が原因かは分からないが、はじめの〝勘〟は確かに感じ取っていた。
この遺産相続は、波乱を巻き起こすと。

――――――その同時刻、とある公園。
「さあさあ…、謎の怪人の正体は？そして、銃を突き付けられた名探偵の運命はいかに――――――？」
子ども達の前で、人形劇を披露しているピエロの仮面を被った男の前に現れたのは、同じく5人の相続候補者の1人――幽月来夢。
彼女の姿に気付いたピエロは、人形劇を切り上げる。
「さて、この続きはまた明日！」
「え～っ!!そんな～。」

「ねー、ねー。名探偵はどうなっちゃうの～？」
名残惜しそうに纏わりつく子ども達を軽くいなし、ピエロは帰宅を促した。
「ほら…、日も沈みかけている。暗い公園にはこわーい怪人が現れて子どもを攫っちゃうよ？さあ、お帰り。優しいお母さんが待ってるお家へ……。」
「は～い！」
「ピエロさん、バイバーイ！」
バタバタと、集まっていた子どもたちが皆公園を出たのを見届け、幽月はピエロへと歩み寄った。
「お願いしていた件――――――、考えていただけました？」
「あなたにはちょっとした恩もありますからね。お受けしましょう、幽月さん。」
人形劇の人形を、トランクにしまい込みながら後ろを振り向かずに返事を返すピエロに、幽月が笑顔を見せる。
「良かった！あなたがついてくれれば百人力だわ！」
「さあ…。私はいち奇術師です。あなたのご期待に添えるかどうか…。」
「いち奇術師？」
謙遜してみせるピエロに、幽月がおかしそうに続ける。
「私にまでそんな事をおっしゃって？私は、その仮面の下のあなたの素顔を知っている人間ですよ…。そうでしょう？高遠遙一さん……。」
幽月の言葉にピエロの仮面を外し、振り返ったのは、逃亡中の指名手配犯にして最悪の犯罪コーディネーター。通称〝地獄の傀儡師〟――高遠遙一。
はじめの、宿敵とも言える因縁の相手である。
〝平行線〟と称される2人の天才が再び顔を合わせる時、運命はどう動き出すのか。
そして、もう1人、この〝舞台〟に招待された天才がいた。
――――――――同じく同時刻、とあるカフェ。

同じく5人の相続候補者の1人――犬飼高志(たかし)は、宝田や幽月(ゆづき)同様に自身の見込んだ〝探偵〟に助力を依頼していた。
「それで？引き受けてくれるかい？」
「ええ。暗号も興味深いが、何よりクラスメイトのよしみです。一肌脱ぎましょう。この、白馬探(さぐる)がね…。」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

――――――――――それから数日後、はじめは美雪や佐木と共に北海道へと降り立った。

因みに、今日は水曜日。平日ど真ん中だが、両親の許可は得ている。正確に言えば、父親は学校を休んでまで妙なバイトの為にわざわざ北海道まで行く事に当然渋ったものの、母親は事情を聞くなりあっさりと許可をくれた。

母は金田一耕助の娘。まして、母自身も結婚前は私立探偵を務めていた身である。父親譲りの娘（はじめ）の推理力と犯罪への〝嗅覚〟を誰よりも理解しているが故に、はじめが何か感じたのであれば何かあるのだろう、とむしろ行くように勧めた程だった。

閑話休題（かんわきゅうだい）

「……凄い霧だよな。」

「ホントね。本当にこんな山奥に館があるのかしら？」

宝田の運転するレンタカーで、山之内恒聖（こうせい）への別荘へと続く山道を登りながら、窓の外を眺めたはじめが呟く。

窓の外は一面乳白色の霧。２ｍ先でさえ見通す事は難しく、宝田は先程から万が一対向車が来た場合の接触事故を避ける為に定期的にクラクションを鳴らしていた。

「……美雪、それから佐木も。別荘に着く前に一応言っとく。」

「なあに？」

「何ですか？先輩。」

はじめの真剣な声音（こわね）に、美雪と佐木が何事かとはじめを見詰める。

「別荘に着いたら、絶対にあたしから離れるな。まぁ、別荘って言っても元ホテルらしいから、お風呂とトイレ、寝る時くらいは部屋に鍵をかけとけば良いだろうけど…。絶対に１人じゃ行動するなよ。」

「え、何で？」

「先輩～、別に殺人犯がいるって訳でもあるまいし、そんなに用心しなくても…。」

不思議そうな美雪と苦笑する佐木に、「良いから。」と念を押す。

「嫌な予感がするんだよ…。」
「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ、金田一さん。他の相続候補者たちは確かに言わばライバルですが、私も良く知っている人たちですし、別荘にはお世話してくださる執事さんたちや、弁護士の先生もいらっしゃる筈ですから。」
　ははは、と軽快に笑う宝田に、はじめは真剣な顔で忠告した。
「宝田さん。あなたもです。絶対に1人で出歩かないでください。」
「そんな大袈裟な…。」
　考え過ぎですよ、と全く意に介せずに笑い飛ばす宝田に、はじめは溜息を吐きながらこぼした。
「大袈裟だったら良いんですけどね…。」
　数十億の遺産と5人の相続候補者。しかし、相続出来るのはたった1人…。
　嫌な予感がする。
　人間の欲には際限が無い。
　これまでにも、欲に駆られた人間が引き起こした犯罪をいくつも見聞きしてきた。
（宝田さんから目を離さないようにしないと…。）
　何事も無く終われば良い。
「あ、ほら！見えてきましたよ。あの湖の浮き島に建ってる館…、あれが山之内先生の別荘――――――露西亜館です。」
　宝田の声に前方に目をやれば、5つの塔からなる特徴的な扁球型の屋根の、城のように巨大な館が建っていた。
（あそこだけ外国みたいだな……。）
　広い湖の真ん中、浮き島の上に壮大な様子で建つその館は、まるで外国に迷い込んだかのような錯覚を起こさせた――――――。
　やがて、一同を乗せたレンタカーは湖の岸へと到着する。
「すごーい！ああいうのロシア風建築っていうんですよね、宝田さん？」
　車から降りるなり、湖の淵ギリギリへと走り寄った美雪が、弾んだ声で宝田に尋ねる。

「ええ…！良くご存知ですね。あのイスラムのモスクを思わせるような玉ねぎ型の屋根がロシア風建築の特徴です。ロシアは、元々ギリシャ正教の国で東ローマ帝国の首都だったコンスタンチノープル。つまり、今のイスタンブールを通ってキリスト教と共に伝わったイスラム文化が反映されているそうです。」
「ふーん…。」
宝田の解説にはじめが相槌を打った時だった。
「お疲れ様でございます、宝田様。」
霧の中から現れたのは、眼鏡をかけた柔和な面立ちの初老の男。
「……そちらが金田一様、七瀬様、佐木様でございますね？お待ちしておりました。私、山之内先生の執事の田代と申します。」
「あ、どうも田代さん。」
「どーも。金田一です。」
「ほう……！あなたがあの名探偵の…。」
それまで柔らかな笑みを浮かべていた田代が、はじめが名乗った途端に表情を変えた。
「？」
その豹変具合にはじめが思わず眉を顰めると、取り繕うように笑みを浮かべ、一同を促す。
「さっ…、どうぞ。ここからは船となります。」
モーターボートに乗り込み、浮き島の館へと向かう。
「…あんま歓迎されてないみたいですね、あたし…。」
ヒソリと宝田に囁けば、宝田もまたはじめに囁き返した。
「本当はきっと面白くないんですよ！長年仕えた執事の自分が遺産相続から外されているから…。」
(だったら、あたしよりも、むしろ宝田さんに当たりが強くなりそうなもんだけど…。)
いまいち腑に落ちないものの、他に心当たりがある訳でもないし、今は取り敢えず無事に遺産相続の一件を終わらせられるかの方が重要である。
はじめは目の前に迫る館へと意識を戻す。

ザザァア……！
接岸されたモーターボートから、順に降り立ったところでモーターボートを操っていた船頭が田代に頭を下げた。
「――――では、あたしゃこれで…。」
「ご苦労様です。」
ババババババ……!!!
「あれ？船戻っちゃった。」
「……これも、山之内センセの指示ですか？」
佐木の呟きに、はじめが田代に尋ねる。
「ええ…！全て亡くなられた山之内先生のご指示でございます。」
「……そうですか。」
周囲は深い湖。おまけに季節は間も無く冬。
日中は多少気温が上がる為、小さな船でも行き来が可能だったが、北海道のこの辺りは日が落ちると気温が一気に下がり、氷が張るらしい。
（泳いで渡るのはまず無理……。）
まぁ、例え季節が夏だったとしてもはじめは５ｍ以上泳げないのだが。
（嫌な予感しかしない……。）
ヤバイ所に来てしまった、という危機感がハンパ無い。
「それにしても、すっごい別荘！」
「ホントっスね――――。絵になるな～！これがロシア風建築の屋根ですか――――！確かに玉ねぎみたいっスね――――!!」
はじめが警戒心をヒシヒシと感じているのを尻目に、美雪と佐木は？気にはしゃいでいた。
（やっぱり、連れて来たのは間違いだったかな……。）
万が一の時は、この２人だけでも無事に帰さなくては…。
はじめが最悪の場合を想定し、いざという時の〝覚悟〟を決める。
「どうぞ！こちらです。」
田代の言葉と同時に、両開きの扉が重たげな音を立ててゆっくりと開く。

ギイィ……！

「やあやあ！良くいらっしゃいました！おや？そちらのかわいいお嬢さんは？」

はじめたちが館の中に入るなり、脂下(やに)がったニヤニヤとした笑いで美雪に歩み寄ってきたのは、酔っ払いの中年男。

（何だ？このオヤジ…。）

因みに、〝かわいいお嬢さん〟の中に、はじめは入っていない。

今日のはじめは、ネイビーのダウンジャケットに黒いニット帽、カーキのチノパンに黒いスノーブーツといったボーイッシュなものであり、黒のネックウォーマーで顔が半分隠れていた為、パッと見少年のようだった。一応、ダウンジャケットの下はハイネックのベージュのセーターを着ていたので体の線が分かるが、モコモコとしたダウンジャケットの上からでは男に見えても仕方が無い。

日頃からボーイッシュな服装を好むはじめがガーリーな服装を好む美雪と一緒にいると、良くこうした勘違いが起こる為、はじめも既に慣れていた。美雪と違って肩程の長さの髪を無造作に後ろで括っているだけで、化粧っ気も無いので、薄着の夏ならばともかく、厚着している冬場は2人並んでいると初々しいカップルに間違われる事も少なく無いのだ。

別にはじめが男っぽいという訳では無く、やや中性的だがある程度整った顔立ちをしているのだが、良く一緒にいるのが見た目も性格も女らしく、近所でも美少女と評判の美雪なので、体型が分からなければ黙っていると可愛らしい顔立ちの少年に見えてしまう。

目の前の酔っ払いも、はじめを少年と勘違いしても不思議は無かった。

閑話休題(かんわきゅうだい)

「あの、ひょっとしてミステリー評論家の神明(じんめい)先生じゃないですか…？」

最初は近付く酔っ払いに戸惑っていた様子の美雪だったが、男の顔に見覚えがあったらしく、本人に尋ねる。

「いやいや、良くご存知で！私はマスコミ嫌いであんまり表には出な

いんだが――――――…。宝田くん！君のお知り合いかね？」
「ええ…。まあ、そんなところです。神明先生。」
　自分の事を知っている、という点が自尊心を満たしたらしく、神明はいっそう締まりの無い顔になった。
「はは～～～。ひょっとして例の助っ人がこの美少女かね？」
「い…、いえ！それはあたしじゃなくてあっちの方で――――――…。」
　ますます近付いてくる酔っ払いに、困惑しながらも美雪が助けを求めるようにはじめを見た。
「どーも…。」
「あ？この頭の悪そうなガキが!?」
　会釈して見せたはじめに、神明が眉を寄せる。
　どうやらジャケットを脱いでいないはじめを、まだ男と勘違いしているらしく、敵対心剥きだしで…。
「お言葉ですが、この人は一応、彼の名探偵―金田一耕助の孫なんですよ！」
「何ィ!?」
　宝田の言葉に、神明が信じられない、といった様子ではじめを振り返る。
「へぇ！そりゃ驚いたな！」
　そこに歩み寄って来たのは、はじめたちとそう変わらない年齢の高校生位の少年たちだった。２人とも整った顔立ちで、茶色の髪をしていたが、顔立ちに共通点は無く、服装もタイプが全く違う為、どうやら兄弟では無いらしい。
　最初に言葉を発した、髪質が真っ直ぐの、ラフな服装の少年が、はじめに向かって興味深そうに話しかける。
「金田一耕助と言えば、戦後間も無く起きた犯罪史上に残る大事件〝獄門島〟の連続殺人を解決に導いた、不世出の名探偵だ。そのお孫さんと謎解き合戦が出来るとは光栄ですね！な、白馬くん！」
「ええ…。こんな所でお会いできるとは思っていませんでした。……あなたの事は存じていますよ。金田一一さん、ですよね？彼の名探偵―金田一耕助氏のお孫さんにして、自身も数々の難事件を解決して

きたＩＱ１８０の天才…。マスコミには一切顔を出さず、あなたが事件を解決してきた事は事件関係者以外には一切伏せられているので知名度はありませんが、警察関係者の間では有名だ……。特に、警視総監からは非公式ながら2度も表彰されている…。」
「け、警視総監から表彰?!」
　仕立ての良い黒いジャケットに、ストライプのワイシャツのやや癖毛の少年の言葉に、神明（じんめい）が目を剥いた。
「……あんたたちは?」
　はじめの事を知っているのは、事件関係者もしくは警察関係者位のもの。〝知られていない情報〟を知っている少年を、はじめが訝し気に見詰める。
「僕は白馬探（さぐる）…。まだ若輩の身ですが、探偵を自任させていただいています。勿論、まだ資格は無いのでボランティアですがね……。そしてこっちが、」
「犬飼高志（たかし）です！山之内先生の隣の家に住んでいたのが縁で親戚同然のお付き合いをさせていただきました。今回は、どういう訳か遺産相続人の候補者に選ばれましてね！1人では心もとなかったので、クラスメイトの白馬君に着いてきてもらったんですよ。よろしく、金田一くん！」
　そう言って握手を求めて手を差し出すラフな服装の少年―犬飼に、白馬が苦笑した。
「犬飼くん、それを言うなら金田一〝さん〟ですよ。彼女は女性です。」
「え?!あ、ごめんなさい…！」
「良いよ。慣れてる。……それより、白馬クンだっけ?何で、あたしの事を知ってんの?」
　慌てふためく犬飼を軽く流し、白馬に目を移す。
「あなたの事は、父から良く聞いていましたから。…それに、あなたは気付いていなかったでしょうが、実は警視庁内であなたと何度かすれ違った事があるんですよ。……一般人には決して口外しない、という条件で父の付き添いの下、あなたの解決した事件の調書を読ませても

らった事もあります。」
「調書を…？あ、白馬ってまさか……！」
「はい。白馬警視総監は僕の父です。」
〝調書〟、〝父〟、そして〝白馬〟の姓。
もしや、と思い当たった予想は当たっていたようだ。
はじめを表彰した張本人、白馬警視総監に息子がいる、という話は聞いてはいたが、まさかこんな所で会うとは思わなかった。
剣持（けんもち）を始め、捜査一課の刑事たちから聞いていた噂と随分印象が異なるのですぐには結び付かなかったのだ。
（イギリスかぶれの探偵気取りの嫌味なお坊ちゃん、って聞いてたんだけどな…。）
自分から殺人事件に首を突っ込み、あの明智警視を３０倍傲慢にして嫌な感じにさせた奴、ともっぱらの噂だったのだが、今目の前にいる彼からはそんな感じはしない。
むしろ、その口調と態度からは傲慢さは微塵（みじん）も感じ取れず、謙虚さと品の良さを感じさせる。
その時は、噂なんてあてにならないものか、とはじめも自己完結させた。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ３

「それにしても、こんな屋敷で推理合戦を試みるなんて、流石ミステリー界の重鎮、山之内恒聖！シチュエーションも先生の初期の傑作、〝露西亜人形殺人事件〟そっくりだ。当然、金田一さんも読まれてますよね？」

好奇心に生き生きと目を輝かせた犬飼が、ダウンジャケットを脱ぐはじめに尋ねる。

「いや、全く。ミステリーには興味無いもんで…。」

「――――いや…、これは想像してたのとイメージが大分違うなぁ。でも、あなたのお祖父様も一見飄々とした方だったようだし――――。油断は禁物だ！ねぇ、神明先生。」

はじめのしれっとした答えに、一瞬目を瞬かせた犬飼だったが、クスリ、と挑戦的な笑みを浮かべ、神明に話を振る。

「フン！相変わらず素人探偵気取りだな！たかだか、近所のつまらん殺人事件を解決したからといって、良い気にならん事だ！おい、田代くん！ブランデーだ！1番良い物を持って来い！どうせもう、誰も飲む者はいないんだ！」

そう吐き捨ててドスドスと足音荒く部屋を出て行く神明を、その場にいた者たちが呆れた顔で見送った。

「やれやれ…。すっかり屋敷の主気分のようで…。」

「犬飼くん、口が過ぎますよ。」

「構うもんか。本当の事だよ。」

特に、年若い犬飼は酒に溺れ、自宅のように振る舞う神明に呆れ果てている様子だった。白馬が窘めるが、撤回する気は無いらしい。

「神明先生はお酒を飲むと気が大きくなりますから。最近、酒の量が増えておられるようで評論の原稿も以前のようなキレが無くなって…。単なる悪口で終わっているようなものも多くなってきましたね。」

「離婚がよっぽど応えたんじゃないの？」

宝田の台詞に、コツリ、というヒールの音と共に入り込んできた声

に、はじめが声の方を振り向く。
「梅園先生！」
（お水……？）
「もっとも、その離婚だって身から出た錆だけど…。」
胸元を大きく露出した、派手な柄のワンピースを着た、メイクの濃い女が続ける。
「きゃ～！嘘！〝死者の砂時計〟でミステリー大賞獲ったあの梅園先生!?」
「う～ん、絵になりますね！流石ビジュアル系作家！服もサービス精神いっぱいで♡」
「な、何この子?!勝手にビデオなんて撮って…！」
美雪がはしゃいだ声を出し、佐木も梅園の挑発的な服装をズームするが、当の梅園は佐木に引いていた。
「ちょ…、ちょっと佐木くん～!!す、すみません…。この子ちょっと変わってて…。」
「止めろ佐木。撮るならせめて許可を取れ。」
「すみません…。」
慌てた様子で美雪が梅園に謝罪した為、はじめは佐木を叱責する側に回った。連れて来た以上は、この場での佐木の言動は、はじめに責任がある。
佐木の無断撮影に対して、これまでも苦言が無かった訳では無い。だが、大抵は剣持やいつき、明智などのその時の引率者が断ってくれていた。しかし、今この場に頼りになる〝大人〟がいない以上、後輩である佐木の失態は先輩であるはじめの責任だった。
宝田は一応〝依頼人〟という枠組みであるし、迷惑はかけられない。
普段は割と自由にさせているはじめからの叱責に、佐木も思わず小さくなって梅園からカメラを外した。
「すみません、コイツ撮影が趣味で…。普段からこうなんです。ネットにアップさせたりとか悪用は絶対にさせないんで、撮っても良いですか？」

「まぁ、それなら良いけど…。」
「ありがとうございます。」
「あ、ありがとうございます！」
　キチンと元凶を叱責した上で許可を求めてきたはじめに、梅園も渋々だが許可を出した。すかさず頭を下げ、礼を言うはじめに倣い、佐木も頭を下げた。
　一瞬、気まずくなりかけた空気を変えるべく、美雪が梅園に尋ねる。
「あの…、ひょっとして梅園先生も遺産相続の候補者なんですか？」
「――――――らしいわね。山之内先生はあたしの師匠みたいなもんだから。もっとも遺産なんかもらわなくても、あたしは自分の稼ぎだけで十分潤ってますけど！」
　煙草をふかしながらフッと笑う梅園だったが、それを聞いた宝田がはじめにこっそりと囁く。
「ウソウソ…！見得張ってんですよ…。あの人、一発屋なんです…。処女作の〝死者の砂時計〟は完璧なまぐれで、その後の作品がまるでミステリーになっていないから、あれは盗作じゃないかって噂もあるくらいで……。」
「へ～…。」
「宝田さん？ヒソヒソ話止めてくれる？あんたんとこの編集長に言い付けるわよ。」
　宝田の言葉を耳聡く聞き付けた梅園に、宝田が慌てて誤魔化す。
「そ、そんな…。別にヒソヒソ話なんか…。ちょっと助っ人の金田一さんと今後の打ち合わせをしているだけで…。」
「あっそ！遺産相続戦やる気満々って訳ね！あさましい事！大手出版社の副編集長ともあろう人が…！それとも株で大借金抱えたって噂、ホントなのかしら？フフ…。」
「そういう話は止めてください！単なる噂ですよ!!」
（なるほどね…。）
　ふと横を見れば、白馬も犬飼から何やら耳打ちされている。漏れ聞こえる言葉から察するに、候補者のみが知る人間関係を教えられているようだった。

やはり、ここに集められた候補者たちは何かしらの事情を抱えているらしい。
はじめが、そんな感想を抱いた時だった。
「きゃあ！止めてください!!」
ガタ――――――ン!!という何かが倒れるような音と共に、女性の叫び声が響く。
「?!」
バッ、と白馬とはじめが同時に身を翻して声の聞こえた隣の部屋へと向かう。
「神明さん?!何をなさってるんですか!?」
はじめたちとそう年の変わらない若い女性に、後ろから抱き着いている神明に白馬が声を荒げた。
「な～に、桐江くんじゃ棚の上のブランデーには手が届かないから、持ち上げてあげようとしているだけさ。いちいち、デカい声を出すんじゃないよ、お坊ちゃん…？」
「や、止めてください！1人で取れますから……！」
ピッタリと背中に張り付き、後ろから片手で腹部を固定したまま、片手で太ももを撫でまわす神明に、現在進行形でセクハラの被害者となっているメイドの桐江想子が身をよじりながら拒否するが、神明が解放する様子は無い。
「良い加減にしてください！」
業を煮やした白馬が神明の手を振り解き、桐江を背後に庇った。
「！何をする!?」
自分のセクハラを棚に上げ、白馬に詰め寄ろうとする神明だったが、白馬に掴みかかる前に、その目の前にズイッとブランデーの瓶が突き出される。
「どーぞ？ブランデーです。……それ以上は止めた方が良いんじゃないですか？今の醜態、ぜーんぶ映ってますけど。」
「何だと！…?!」
佐木を親指で示しながら告げるはじめに、いきり立って彼女に向き直る神明だったが、不意に唖然としたようにその勢いが立ち消えた。

「お、女だったのか…?!」
（そーいや、勘違いしてたんだっけ…。このオッサン。）
先程とは異なり、ダウンジャケットを脱ぎ、防寒具の一切を取り去ったはじめは、もう少年には見えなかった。
美雪と違って決して胸は大きく無いが（それでも一応Ｃカップはあるのだが）、ウエストの細さはセーターの上からでも良く分かる。
諸事情により、体質的にカロリー消費の激しいはじめは所謂〝いくら食べても太らない〟タイプの人間で、モデルばりに細い。
本人的には美雪のような女性らしい体付きを羨ましく思う気持ちもあるのだが、そういうはじめも同世代の女子からは羨ましく思われている１人である。
神明が一瞬怯み、はじめを後押しするかのようにしっとりと柔らかな声がそれに続いた。
「相変わらずお見苦しいですね、神明先生？それじゃ、最初から遺産相続ゲームの勝負から降りたも同然ですわね！」
くすくすと軽やかに笑いながら部屋に入ってきたのは、髪を肩程の長さに切り揃えた、黒いスーツの女性だった。年の頃は２０代後半から３０代程だろうか。梅園とは異なり、薄化粧で服装も地味だが、素直に綺麗な人だな、とはじめは思った。
「幽月くん…！」
くすくすと笑う美女に気まずくなったのか、神明が一瞬狼狽えたような声を上げた。
「宝田さん…、あの人は？」
「挿絵画家の幽月来夢先生…。あの方も候補なんです…。」
「へぇ…。」
まぁ、このタイミングで介入してくる、という事はそういう事だろうとは思っていたが。
「あの方が幽月さんでしたか…。」
「？知ってんの？」
いつの間にか隣に立っていた白馬の呟きに、思わず彼の顔を仰ぎ見る。

「ええ…。山之内先生の作品は僕も拝読させていただいていました。お顔は存じ上げませんでしたが、山之内先生のファンの間ではある意味有名ですから…。」
　意味深な白馬の言葉に、どういう意味か尋ねようとするも、その前に神明が声を張り上げた事ではじめの意識が逸れる。
「フン！挿絵画家如きが、古今東西のミステリーを全て読破しているこの私と勝負だと？片腹痛いわ!!」
「フフ…。私もそう思ったので、ちょっと助っ人を連れて参りましたのよ…。」
　自分の優位を言い聞かせるように吐き捨てる神明に、幽月が意味有り気に微笑んだ。
「へぇ…。幽月さんも助っ人を？」
「ええ！」
　犬飼の言葉に頷いた幽月が扉を振り返る。
「ご紹介しますわ。奇術師のスカーレット・ローゼスさんです。」
　何気無く振り返ろうとしたはじめだったが、不意に背筋を走った覚えのある寒気にはじめが息を呑む。
　バッと振り返ったはじめの目に映ったのは、スラリとした長身を黒いスーツに包んだ1人の男。
（この男――――――――…！）
　鼻から上を覆い隠すふざけた仮面で顔を隠しているが、間違い無い。
　背筋に走った一瞬の殺気、体格・髪型も記憶と一致する。
　〝地獄の傀儡師〟高遠遙一。
　はじめと因縁のある、逃亡中の連続殺人犯にして犯罪コーディネーター。
（何でコイツがここに――……？）
　まさか、この中に〝マリオネット〟が…、高遠の息のかかった〝復讐者〟が紛れ込んでいるのか？はじめが最初から感じていた嫌な予感は、この男がいる為だったのか…？
　はじめに緊張が走る。

――――――その様子を、隣に立っていた白馬だけが気付いていた。
はじめを見て、フッと口元だけで笑った〝スカーレット・ローゼス〟に、はじめもまた気圧されないように笑みを浮かべる。
「どうかしましたか？」
「いや…。その仮面はどうされたんですか？」
声すら変えずに、何食わぬ顔で尋ねてくる〝スカーレット・ローゼス〟に逆に尋ね返した。
「ああ…。これは傷痕を隠してるんです。以前、奇術の練習中に酷い火傷を負いましてね…。」
「――――なるほど…。失礼しました。」
〝傷痕がある〟、そう言われれば取って見せてくれ、とは言い辛いのが人間だ。
現に、美雪は佐木も最初は仮面に驚いていたものの、それ以上触れない事に決めたらしい。
しかし、何故こんな分かりやすい変装を選んだのかが分からない。
〝高遠遙一〟の変装技術は一級だ。恐らく、彼の〝怪盗紳士〟や〝怪盗キッド〟にも並ぶだろう。
仮に〝マリオネット〟の〝舞台〟を観に来た、というのであればもっと怪しまれない変装を可能にする実力はあるのだ。
あまりにも堂々としている為、美雪や佐木からも逆に怪しまれていないものの、〝高遠遙一〟を知る者ならばすぐに分かる程度の変装しかしていないのは妙だった。
それに、自分がいると分かっているなら、もっとやりようがあった筈。
そうならば、考えられるのは1つ…。
（高遠にとっても、この接触は予想外だった…？）
高遠自身、偶然この館にやって来た可能性も無くは無い。
恐らく、助っ人に呼んだ、と主張する幽月は高遠の正体を知っている。いずれにせよ、幽月が〝鍵〟を握っている事は間違い無いだろう。

〝スカーレット・ローゼス〟を不自然でない程度に注視しながら、思考を巡らせていたはじめの意識を戻したのは、新たに響いた声だった。
「え～、では、皆さんお揃いでしたら、そろそろ応接間の方へお越しください！」
扉の前で一同を誘導した、スーツ姿の気弱そうな眼鏡の青年の声に、候補者たちの間に緊張が走ったのが分かる。
（いよいよか…。）
〝スカーレット・ローゼス〟を警戒しながら、宝田や美雪、佐木の安全を確保する。はじめが密かに気合を入れ直し、候補者たちに続いて歩き出した。
―屋敷の東側、時計塔―
先程の声の主、眼鏡の青年―弁護士の有頭大介に促され、はじめは5人の候補者たちと共に、時計塔の一室へと場所を移していた。
「では…、これから山之内先生からのメッセージを公開させていただきます。私、先生の顧問弁護士の代理人として派遣されました有頭大介と申します。私は当弁護士事務所を代表しまして、先生の指示を守る監視係として参りました。公平を期す為、顧問弁護士である私の上司から捜し当てるもう1つの遺言状の中身、またその隠し場所などは私自身一切知らされておりません。ですから、当然ながら遺言状に関する質問などは一切お受け出来ませんので、あしからず…。」
「前置きは良いからさっさと始めたまえ！」
落ち着いたインテリアの中で異彩を放つテレビとDVDプレーヤーの前に立った有頭が説明するが、目をギラギラとさせた神明が急かす。
「…では、」
一瞬、何か言いたそうにした有頭だったが、反論する事無く小脇に抱えていた茶封筒の封をペーパーナイフで切る。
どうやら、それに遺言状の1つが入っていたらしく、リボンと蠟でしっかりと封がされていた。
出て来たのは、1枚のDVD。

そして、５人の候補者たちとその助っ人と付き添いが見守る中、代理人である有頭（ありとう）の手によってＤＶＤが再生された――――――…。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ４

ウィィ……ン…

弁護士の有頭（ありとう）がＤＶＤプレーヤーに、封筒から取り出したＤＶＤを入れ、再生させる。

パッとテレビのモニターが切り替わり、痩せ衰えた老年の男が映し出された。

『――――やあ…、私の大切な友人であり愛すべきクインテットのメンバーでもある皆さん――…。皆さんがこの映像をご覧になる時、私は残念ながらこの世にはいない……。』

（あれが山之内恒聖（こうせい）…。）

宝田の持参した書類の写真からは見る影も無い。死の数週間前に撮られたというだけあって、ほぼ骨と皮だけにまで痩せ衰えているが、そのギラギラとした眼光が不気味だった。

『私の最期のミステリーに付き合っていただき、心から感謝する。さっそくだが、あらかじめお伝えしてある暗号文についてお話しよう。実は、あの暗号文はそれだけでは意味を成さない。もう1つ、暗号文と対になったメッセージを用意してあるのだ。後ろを見たまえ！』

振り返った先にあったのは、暖炉の上に並んだそれぞれが弦楽器を抱えた5つのロシア人形。

『第1バイオリンのコンスタンチン、第2バイオリンのターニャ、ビオラのオリガ、チェロのエミール、コントラバスのイワン。この君たちと同じクインテットを構成する5体のロシア人形こそが――――、全ての謎を解き明かす第2の暗号なのだ！これらのロシア人形と、事前に渡したあの〝詩〟を合わせた謎を解いた時、私の第2の遺書はその者の手に渡る――…。――なお、この推理合戦の参加者は期限の5日間、強制的に館に留まってもらう事になる。さあ！参加する意思があるなら受け取って欲しい。用意された君たちのパートの楽器を！』

その言葉に壁際に目をやれば、ソファに上に置かれた2つのバイオ

リンと立てかけられたビオラ、チェロ、コントラバスの3つの楽器。
（あの楽器はその為のものだったのか……。）
部屋に入った時から気になってはいたが…。
『では、また夕食前にお会いしよう。クインテットの諸君…。』
その言葉を最後に、ＤＶＤが終わる。
「――――では…。参加意思がお有りの方は、ご自分のパートの楽器をお受け取り下さい。」
「言われるまでもないな！やる気でなければこんな北海道の山奥くんだりまで来るものか！」
有頭（ありとう）の言葉に、真っ先に立ち上がり自身の担当する楽器―コントラバスを手に取ったのは神明（じんめい）だった。
「全くね…。あたしもこのバイオリンいただくわ。」
「僕は、この第1バイオリンを頂きます。」
「あたしはビオラね！」
梅園、犬飼、幽月（ゆづき）がそれに続く。
「どうしました宝田さん？取りに行かないんですか？」
動かない宝田に訝し気に尋ねると、ビクッと一瞬狼狽（うろた）えたが、すぐに取り繕う。
「え!?ええ、もちろん行きますよ。このチェロいただきます。」
（…？）
宝田の態度に何か引っかかるものを感じたものの、この場で尋ねても彼は何も語らないだろう、という確信があった。
聞くなら他に誰もいない所が良い。
候補者たちが暗号についてあれこれと議論を交わすのを背後に、はじめが暖炉上の5体のロシア人形を眺める。
（楽団は前から順に…、首を刈られた…。）
大きさの異なる5体の人形。そして、楽器。
（楽しいリズム…。）
何か掴めそうな感覚があったものの、不意に響いた大声で、はじめの意識が引き上げられた。
「何だと小僧!!」

何事かと振り返れば、神明(じんめい)が犬飼の胸倉に掴みかかっていたところだった。
(合わないなこの2人…。)
「神明(じんめい)先生、止めてください！犬飼くん、君も言い過ぎだ…!!」
間に挟まれる形になった白馬が2人を宥めるが、そこに一石を投じるように艶やかな声が響く。
「――――おやおや、皆さん…。仲がよろしいのは結構ですが、そんなふうにお互い知恵を出し合って――――。他の参加者に出し抜かれても良いんですか？」
〝スカーレット・ローゼス〟の言葉に、幽月(ゆづき)以外の候補者たちが皆ハッと息を呑んだ。
「ふと、口にしたヒントで競争相手が得をする事もありますからね。気を付けなくては……！」
「ちっ……!!私は一旦部屋に戻らせてもらう……！こんなやかましい所で暗号解読なんか出来るか!!」
ドンッ！と犬飼を突き飛ばし、神明(じんめい)がドスドスと足早に部屋を出て行く。
「そうね…。あたしも部屋でちょっと休ませてもらうわ。」
「では、すみません、私も…。移動続きで疲れてしまって……。」
気まずい空気を振り払うかのように梅園と宝田がそれに続いた。
「宝田さん。部屋に入ったらまず鍵をかけてください…。それから、必要以上に1人で屋敷の中を出歩かないように…。」
梅園の後に着いて行こうとする宝田に、はじめがそっと囁く。
宝田も、来る途中とは異なり素直に頷いた。彼も、ここに来て何かしら感ずるものがあったのかもしれない。
「わかりました…。では、金田一さん。また夕食の時に…。」
「ええ…。」
どことなく疲れたような顔で出て行く宝田を見送り、はじめが〝スカーレット・ローゼス〟へと目を移す。
「…確か金田一さん、でしたか？私が何か？」
「…いえ、随分と自信有り気でいらっしゃるので、つい…。」

「おや、そう見えましたか？私もマジックはプロですが、暗号解読は素人ですからね…。その点では、この屋敷に集まった皆さんの誰よりも不利かもしれませんね…。」
「ご謙遜を…。」
　どこか冷え冷えとした空気が２人の間に流れるが、それは不意に断ち切られた。
「それじゃ、あたしたちも少し部屋で休みましょうか。ね！ローゼスさん？」
「…ええ、そうですね。行きましょう、幽月さん。」
　意味深な幽月の笑みに、仮面の奥で軽く目を眇めた〝スカーレット・ローゼス〟だったが、立ち上がり幽月を促す。
「それでは皆さん、また後ほど…。」
　不敵な笑みを浮かべ、幽月を連れて部屋を出る〝スカーレット・ローゼス〟を、はじめが睨み付けていた。
「あの野郎…。」
　――――――そんなはじめの様子を、白馬がじっと見ていた。
「美雪、佐木。」
「なあに？」
「どうしました？先輩。」
　扉が完全に閉まったのを見届けてから、はじめが美雪たちの方を振り返る。
「田代さんに頼んで、ちょっとこの屋敷の中見せてもらってくる。お前らはここにいろ。」
「え？1人で？」
「それなら、僕も一緒に…。」
「良いから。お前らには別に頼みたい事もあるんだよ。」
　立ち上がろうとした佐木を制止し、自分の斜め掛けのリュックから取り出したメジャーとメモ帳を、ボールペンと一緒に2人に放る。
「それで人形のサイズ測っといてくんない？ついでに、どの人形がどの楽器かもメモっといて。大きさ一緒で分かりにくいから。あと、佐木は写真も。」

「あ、うん。分かったわ。」
「了解です！」
　美雪がこうしたサポートをするのは既に恒例とも言えるし、佐木もはじめの助手、を自負しているだけあって嬉々として頷いた。
「あ、それと白馬クン。」
「？はい。」
　人差し指でちょいちょい、と招くはじめに、不思議そうな顔を見せつつも白馬が歩み寄る。
「1分だけ時間くんない？すぐ終わるからさ。」
「僕は構いませんが…。」
「犬飼クンだっけ？ちょっと白馬クン借りるよ。」
「あ、はい！」
　チロリ、と送られた視線に、犬飼も詳細は分からないものの了承する。
　それに頷き、白馬に「こっち。」と指で合図し、扉の外へと促す。
　廊下に出て、３ｍ程扉から離れた場所で壁にもたれ、はじめが白馬に切り出した。
「…1分って言った手前、すぐに本題に入らせてもらうけど、その前に確認。」
「何でしょう？」
「探偵志望って聞いたけど、ポーカーフェイスと演技力に自信は？」
「…役者ではありませんので、本業には劣るでしょうがそれなりには…。」
「殺人犯が目の前にいても平常心を保てる？」
「…動揺を表情に出すな、という意味でしたら。」
　はじめの言葉に、最初は戸惑っていた白馬だったが、至極真面目なはじめの目を見て表情を引き締める。
「…なら、教えとく。迷ったけど、知らない事程危ない事は無いから…。」
「…どういう意味ですか？」
「……この屋敷の中に、連続殺人犯が紛れ込んでる。」

「な?!」
「シッ…!美雪たちに聞こえる……!!」
はじめの小声での制止に、白馬もまた声を潜めて尋ねる。
「…一体、どういう事です…?!」
「…あの〝スカーレット・ローゼス〟とか言う奇術師、あいつは高遠遙一だ…。」
「?!あの〝地獄の傀儡師〟…!?」
密やかな、しかし緊迫した口調で告げられる情報に、さしもの白馬も驚く。しかし、告げたはじめが驚く程に彼はすぐさま納得して見せた。
「成る程…。それで納得がいきました。」
「納得?」
「金田一さんの、あの時の様子ですよ。あの男が登場した時、一瞬ですが表情が強張っていましたし、先程彼らが部屋を出る直前にも険しい表情でしたから…。一瞬だったので、僕以外に気が付いた人はいないかと思いますが……。」
「…良く見てんね…。」
流石に探偵を自任するだけの事はある。警視庁内でも噂になっていた実力は確からしい。
「話は戻すけど、あいつが〝助っ人〟としてここに来たっていうのは、たぶん嘘じゃない。少なくとも、あたしがここに来た事は計算外だった筈だ。」
「…確かなんですか?」
「まぁ、経験上の勘かな。…今回の遺産相続こそがあいつの仕掛けた〝舞台〟だと言うなら、あんなにあからさまに怪しい、雑な変装はして来ないだろうし。〝地獄の傀儡師〟は、あくまでも計画は立てるだけのプロデューサーで、実行には一切手を貸さない。自分が知恵を授けた〝マリオネット〟の〝演目〟を〝鑑賞〟するというのなら、もっと目立たない役回りがいくらでもあった筈。」
はじめの推測に、白馬が真剣に耳を傾ける。
悪名高きサイコキラー、〝地獄の傀儡師〟高遠遙一。

その彼が、唯一と言って良い執着心を向けているのが目の前にいる女子高生―金田一一。

その因縁は1年程前、北海道の死骨ケ原湿原で起きた〝魔術列車殺人事件〟に遡る。

その事件こそ、高遠遙一を〝地獄の傀儡師〟として世に知らしめた、凄惨な連続殺人事件。そして、その事件を暴いた人物こそが、金田一一である。

自身の〝完全犯罪〟を暴いたはじめに、以来高遠は執着しているのだ。時には自身が計画した〝舞台〟に自ら招待し、挑戦状を叩き付ける程に。高遠の関連する事件に関わった調書には、必ずと言って良い程彼女の名前が登場する。

恐らく、この世で最も高遠遙一について理解しているのは彼女だろう。そして、逆もまた然り。

「あいつがこの屋敷で何かをする可能性は低いと思う。一定のボーダーラインさえ踏み込まなければ何もしないと思うけど…。でも、無防備でいるには危険過ぎる相手である事は間違い無いからね…。白馬クンさ、犬飼クンに探偵として依頼されてこの屋敷に来たんでしょ？」

「ええ。」

力強く頷く白馬に、はじめが念を押す。

「犬飼クンと無事にこの屋敷を出たかったら、絶対に犬飼クンを1人で行動させちゃダメだ。」

「どういう事です？」

「この屋敷は周囲を湖に囲まれた天然の密室…。それに、数十億の遺産がかかった〝ゲーム〟の勝者はたった1人だ。正直なトコ、あたしは今すぐここで傷害か殺人が起こってもおかしく無いと思ってる。」

「それは…！」

「何事も起こらなければ笑い話で済むんだ。それに越した事は無いけど、この遺産相続の話を聞いた時から嫌な予感が止まらない。でも、悪戯にそんな事公言する訳にもいかないからね…。出来れば、高遠の事もあるし常に2人一緒に行動しといた方が良い。部屋に閉じこ

もってる分には安全だろうし…。だから、白馬クン。キミが犬飼クンの分まで警戒しといた方が良い。」
「犬飼くんにはどこまで…？」
どの程度教えておいた方が良いのか。そう尋ねる白馬に、はじめが首を振る。
「余計な不安は煽らない方が良い。こんな閉鎖的な空間じゃ、パニックなんて起こった日にはあっという間に伝染する。外部と連絡が取れないなら尚更ね。」
そう。携帯も取り上げられ、5日間は強制的にこの屋敷の中に留められているこの状況下で、下手な情報開示は危険と言えた。
「……キミにも、特に高遠（たかとお）の事は教えるかどうしようかは迷ったんだけど…。」
いくら〝探偵〟を名乗っているとは言え、自分よりも年下の少年にどこまで伝えるべきかは迷いがあった。
しかし、はじめ1人で美雪たちと5人の候補者たちに目を配るのは無理がある。
それならば、自衛の為にもある程度の情報を伝えた方が安全だと考えたのだ。
「いいえ。教えていただいてありがとうございます。情報は何よりの武器に成り得ますから。」
柔らかな笑みを浮かべて頭（かぶり）を振る白馬に、はじめもホッと息を吐（つ）いた。
「ああ、それと…。」
「？」
不意に悪戯っぽい笑みを浮かべた白馬に、はじめが首を傾げる。
「くん付けが言い辛いのであれば、呼び捨てで構いませんよ？はじめさん。」
キョトリ、と目を瞬かせるはじめにフフッと笑みを漏らした白馬が続けた。
「本当は、あなたとはずっとお話してみたかったんです。こんな状況じゃなかったらゆっくりお茶でもご一緒したいところですが、それは

またの機会に取っておく事にしましょう。」
「へ？」
明智に勝るとも劣らない美貌の持ち主に、好意的に微笑まれながらそんな事を言われると、いくら普段女子力が無いだの、枯れているだの散々言われているはじめでも少しは動揺する。
思わず間抜けな声が漏れ、頬が熱くなったのが分かった。恐らく傍から見ても赤く色付いている事だろう。
とっくの昔に1分は過ぎてしまったが、はじめの頭からは最初に提示した時間の事など、すっかり抜けていた――――――。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ５

――――――それから５時間後。

５人の候補者と、その付き添いの人間たちは再び時計塔に集まっていた。しかし、先程の部屋よりも広く、ソファーの作りもゆったりと寛げるようになっていた。

午後１０時から、再び山之内恒聖の遺したＤＶＤが公開される事になっている為、各々暗号を考えたり、出された茶や酒を飲むなどして暇を潰していたところである。

「――――――お腹減ったな…。」

こんな事なら、持参したお菓子でも持ってくるんだった、と独り言つはじめを美雪と佐木が宥める。

「夕食までもう少しよ。後３０分位だもの！」

「そうですよ。後ちょっとです。」

「だいたい、なんでゆーしょくが午後１０時半なんだよ…。フツー、もうちょっと早くない？」

「ロシアは白夜の国ですから、夕食も遅いんですよ、きっと！」

「はい！はじめちゃん、チョコレートよ。」

血糖値が下がって思考能力が低下しだしたのか、喋り方が徐々に舌っ足らずになり始めたはじめに、慌てて美雪が個包装された小さな板チョコをポーチから取り出し、何枚か差し出す。

「さんきゅー…。」

チョコレートを口に含み、ポリポリしだしたはじめの顔色がやや赤みがかってきたのを確認し、美雪がホッと息を吐いた。

「もう…！いつも持ってるチョコレートはどうしたの?!」

「カバンごと部屋に置いて来た…。」

「持ち歩かなきゃ意味ないでしょ！」

「サーセン。」

全く反省していないはじめだが、彼女の体質上、ある意味死活問題とも言える為、美雪の説教は止まらない。

「また倒れても知らないわよ?!」

「ゴメンて…。」
「倒れる、とは…？はじめさん、どこか体の具合でも…？」
　そのやり取りを聞き咎め、白馬がはじめに尋ねる。
「や、違う違う。ちょっと体質的にね…。」
「はじめちゃんは、頭を使い過ぎると低血糖を起こし易くなるの。普通に3食ちゃんと食べてるなら問題無いんだけど、今日は夕食の時間が遅いし、暗号解読で頭使ったから…。」
　はじめの簡潔過ぎる否定に、美雪が補足した。
　はじめも外出する際には気を付けており、普段からエネルギーになり易いチョコレートを持ち歩いているのだが、溶けやすいという性質上ポケットに入れて持ち歩く訳にもいかず、つい面倒くさがってリュックごと部屋に置いてきてしまったのだ。
「将棋棋士みたいですね。」
「それ、前にも言われたな…。」
　驚いたように呟く白馬に、はじめが3枚目のチョコレートをポリポリしながら呟く。
　プロの将棋棋士は、常に数十手先を考えて脳を酷使している為、1回の対局で体重が2～3ｋｇ落ちる事もある程カロリー消費が激しいと言うが、はじめもそれに近い。
　ＩＱ１８０というその頭脳故か、あるいは単にはじめの燃費が悪いのか本人には分からないが、祖父に言わせればはじめは〝色々考え過ぎる〟のだそうだ。
　その情報処理能力の高さ故に、普通の人間が2～3しか終えられない事をはじめは３０も４０もこなしてしまう。特にそれが顕著に表れるのがパズルなどのロジックを必要とするもの。
　極端に言えば、普通の人間が1つのヒントで得る事が出来るのは1つの情報のみだが、はじめはそれを多面的に考える事で1つのヒントから3～4つの情報を引き出す事が出来るのだ。
　しかし、当然その分脳はエネルギーを消費する。
　はじめがその食事量の割に痩せているのも、それだけエネルギー消費が激しい為である。

また、そのＩＱの高さと学校の成績が比例していないのも、この体質が要因の１つでもあった。
生来の面倒くさがりであるという理由も無くは無かったが、単にお菓子などの持ち込みの出来ない学校では余計なエネルギーを使いたくなかった、という理由が大きい。日常生活でも無意識に〝色々と考え過ぎて〟しまい、すぐにお腹が空いてしまうのに、余計なカロリーを勉強に回そうとする程、はじめは真面目では無かった。
流石（さすが）に高校生ともなると、そこまで極端にお菓子の持ち込みが制限される程校則も厳しくないものの、元々面倒くさがり屋のはじめが心を入れ替える程の理由では無い。
まあ、それが理由の全てでは無かったが…。
閑話休題（かんわきゅうだい）
リーンゴーン…！
リーンゴーン…！
リーンゴーン…！
「――――あっ！１０時の鐘だわ。」
「後３０分か…。ん？」
美雪の声にはじめが腕時計に目をやるが、不思議そうな顔をしたのに白馬が気付く。
「どうしました？」
「いや、時計が遅れてたみたいだ。あたしの時計だとまだ９時５５分になってる。」
「いえ、この時計塔の時計自体が進んでいるようですね。まだ９時５５分３８秒コンマ６８です。僕の時計は年に０．００１秒しか狂いませんから…。」
はじめの言葉に、自身の懐中時計を確認した白馬が告げた。
「随分良い時計持ってんね…。」
（流石（さすが）お坊ちゃん…。）
高校生が持つにしては高価な時計に、はじめが内心呆れるが、鐘の音を聞いて立ち上がった有頭（ありとう）に、はじめたちの意識がそちらに向く。
「それでは、１０時になりましたので再び先生のビデオをご覧いただ

き、それから食事に参りたいと思います。」
ウィィン…
先程とは別のＤＶＤが再生され、テレビのモニターに再び山之内恒聖の姿が映し出された。
『――――やあ、親愛なるクインテットの諸君！我が露西亜館の居心地はいかがかね？さて、ディナーに入る前に、皆さんに励ましのメッセージをお届けしよう。――――まず、第１バイオリンの犬飼高志くん。私の良き隣人であり、若きミステリーの論客として交流の深かった君だが、最近はお父上の事業の失敗で可愛がっていた５匹の猟犬も借金の抵当に入っていると聞いて、私も心を痛めていた。』
山之内のメッセージに、犬飼がギクリ動揺を露わにする。
『ここは１つ、ぜひ君の英知で暗号を解き明かして君のお父上の借金を完済してくれたまえ…。』
（イイ性格してるよ…。）
屈辱に身を震わせる犬飼を見て、プライベートな内情を衆目に暴露する山之内の所業にはじめが眉を顰めた。
そして、次々と明らかになる５人の候補者たちの抱える〝闇〟。
第２バイオリンの梅園は、自動車事故による賠償金からの借金。
チェロの宝田は、株で失敗し借金を背負った上に妻が闘病中。
ビオラの幽月は、火事がきっかけで唯一の肉親である弟が植物状態で入院中で、多額の医療費を負担。
コントラバスの神明は、妻との離婚によって多額の慰謝料を請求されている。
「クソッ！」
ガシャ――――ン!!!
罵倒と共に、神明飲んでいたブランデーのグラスを床に叩き付けた。
「何なんだ！これは?!冥土に行ってまで私を愚弄する気か、山之内!!!」
「神明先生！それは違います。山之内先生は皆さんを励ますおつもりで…、たぶん…。」
怒りが収まらない神明を有頭が宥めようとするが、説得力はまるで

無い。
「うるさいっ！人のプライバシーをこんなところであげつらって！奴は昔からそうだったんだ！人格者のフリをして、実は陰湿なやり方で人を陥れようと画策するような男だったんだよ！」
ヒートアップした神明は止まらない。元々酔っていた事もあり、感情の制御が出来ない状態なのだろう。
怒りのまま、捨て台詞と共に部屋を飛び出した。
「私は部屋に戻る！食事はメイドの桐江くんに持って来させろ!!」
（やっぱり、候補者たちそれぞれが何かしらの事情持ちか…。）
それぞれ金に困っている5人の候補者に対し、遺産を相続出来るのはたった1人…。
おまけに携帯は取り上げられ、屋敷に備え付けられていた電話でさえもこの〝ゲーム〟に合わせて撤去されている。山之内の指定した5日後まで迎えは来ず、完全に外界とは隔絶された空間。
チラリ、と白馬に目をやれば彼も力強く頷いた。
（絶対何か起こるわ…。）
心無しか、空腹の為だけじゃなく胃が痛い。
この状況で1人になるのはあまり好ましい事ではないが、部屋に籠っているならば神明も心配無いだろう。
自分と白馬だけで候補者たちを守り切れるかどうか…。
これから5日は続く〝ゲーム〟の行方に、はじめは重い溜息を吐いた。
――――――そして、夕食時にそれは起こった。
神明と、給仕に務める田代や桐江以外のメンバーが食堂に集い、屋敷の様式に合わせたのか、ボルシチを始めとした伝統的なロシア料理の数々に舌鼓を打っていた時の事だ。
はじめがふと視線の先の違和感に気付く。
「佐木、お前ずっとビデオ回してたよな…？」
「？はい。」
それがどうかしましたか、とビデオ片手にボルシチを啜っていた佐木がカメラごとはじめに目を向ける。斜め向かいに座っていた白馬

も、そのやり取りに顔を上げた。
「あんな所に、シミ何て無かったよな…？」
「え？ちょっと待ってくださいね…。」
はじめの視線の先を見て、佐木がビデオを確認する。
「あ、はい！さっきはあんなのありませんでした！」
「！」
ガタガタッ！
佐木の言葉を聞くなり、はじめと白馬がほぼ同時に席を立つ。
「白馬くん？急にどうしたんだい？」
「はじめちゃん？」
急に何事かと食堂中の視線が集まるが、生憎（あいにく）２人にそれに構っている暇は無かった。
「田代さん！この天井の上には何が?!」
「え?!ああ、はい。皆さまの寝室になっております。」
「あのシミの辺りの部屋は誰の部屋ですか?!」
「ええ…と…？そうそう！確か神明（じんめい）様の部屋でございます！それが何か？」
はじめと白馬の矢継ぎ早の質問に、田代が戸惑いつつも答える。
ちょうどその時、神明（じんめい）の部屋に夕食を届けに行っていた桐江（きりえ）がカートを押しながら食堂に入って来た。
その上には、夕食に被せられたクロッシュと、ナイフやフォーク、スプーンが乗ったままになっている。
「ん…？どうしたんだね、桐江（きりえ）くん？神明（じんめい）先生は召し上がらなかったのか？」
「それが、声をおかけしても返事が無くて…。もし眠ってしまわれたんだったら、起こしたらまた酷く怒られるかもって…。」
「！白馬!!」
「はい！」
桐江（きりえ）の言葉に、同じ推測に至ったらしい白馬を促し、はじめが部屋を飛び出す。
「ちょっ、先輩?!」

「はじめちゃん!?」
　飛び出したはじめに、佐木と美雪が驚いて席を立つが、はじめは振り返る事無く階段を目指す。
「田代さん、あなたも来てください！神明先生の身に何かあったかもしれません!!」
　白馬も田代を促し、はじめを追った。
「え?!お、お待ちください…!!」
「ま、待ってください、私も行きます…!!」
「僕も…!!」
　ただならぬ空気に、田代だけでなく美雪と佐木が続き、他の候補者たちも続いた。
「神明さん?!神明さん?!!」
「神明先生!!無事ですか?!神明先生!!!」
　ドンドンドンドンッ!!
　とはじめと白馬がけたたましく扉をノックするが、一向に返答は無い。
「クソッ…!」
　毒付いたはじめが扉に耳を付けると、微かに水の流れる音が聞こえる。
「っ水の音が聞こえる…!」
　この音は、ただシャワーを浴びている訳ではなさそうだ。水音以外の音は全くしない。
「金田一さん!白馬さん！一体どうなさいました?!」
　ちょうどその時、田代たちが追い付く。
「はじめちゃん、どうしたの?!」
「白馬くん、一体何が…。」
　美雪と犬飼がはじめたちにそれぞれ尋ねるが、２人とも答えている余裕は無かった。
　ガチャッ…
「はじめさん!鍵が……。」
　駄目で元々、と例にノブに手をかけた白馬が鍵が開いている事に気

付く。
白馬に頷きを返し、はじめが再度声を張り上げる。
「神明(じんめい)さん！入りますよ!!?」
バンッ…！
「あ、金田一さん?!白馬さんも!!勝手にそんな事をされては…！」
田代が後ろから制止するが、2人とも足を止める事無く、部屋を見回しながらも真っ直ぐに水音の出所(でどころ)―バスルームへと向かった。
ザァァァァ――――――…
ピシャン…
廊下からよりもはっきりと聞き取れるようになった水音に、美雪たちも気付く。
「お風呂に入ってただけなんじゃない？」
「でも、水の音はしますけど、それ以外の音は何も…。」
美雪と佐木の言葉を背中に、バスルームへと続く扉に手をかけた白馬がはじめと目を合わせる。
「…開けますよ。」
「ああ…。」
2人とも、既に悟っていた。
これだけの物音を立て、顔を見せない神明(じんめい)。
本当にこのバスルームに彼がいるのであれば、既に生きてはいまい、と……。
ガチャ…
ザ――――――…!!
扉を開けた途端、水音がより強くなる。それと同時に鼻に付く鉄の臭いに、はじめが鼻を押さえた。
「っこの臭い…。」
「ええ…。」
浴室から溢れた、赤みを帯びた水が脱衣所に流れ込み、床に敷かれたカーペットに水たまりを作っていた。先程はじめが食堂で気付いたシミはこの為だったらしい。
「っ先輩、この臭いもしかして…！」

「来るな！お前らはそこにいろ!!」
扉を開けた事で、臭いは後ろの佐木たちの所にまで届いたらしい。
そして、その臭いの正体を悟る。
はじめは、浴室に広がっているだろう惨状を見せない為に、頭だけ軽く振り返って叫んだ。
「……白馬、心の準備は？」
「…いつでもどうぞ。」
バンッ！
白馬の答えに、はじめが浴室の扉を開け放つ。
「っ神明さん…！」
「っ惨い……。」
２人の目の前に広がるのは、開きっぱなしの蛇口によって水の溢れるバスタブと、そこに俯せに浮かぶ神明の遺体。
その頭部は無残にも肉体から切り落とされ、体と共にバスタブに浮かんでいた。
そして、バスタブは勿論、浴室内に溢れる水は全て神明の体から流れ出た血液で赤く染め上げられていた…。
バシャッ…！
「！はじめさん?!」
「そこにいろ…。」
浴室内に足を踏み入れたはじめのスノーブーツに、血の色に染まった水が染み込む。
キュッ…
ノズルを捻り、水を止めたはじめに、白馬が焦ったように声をかけた。
「はじめさん！現場は保存しなくては……！」
「すぐに警察を呼べるのならね…。」
「っそれはどういう…？」
「金田一さん?!白馬さん?!一体、何が…。」
「入っちゃダメですってば!!」
脱衣所の扉の前で佐木に止められているらしい田代が声をかける。

「佐木!!お前のデジカメ貸してくんない？美雪も付いてって!!白馬、現場の撮影が終わるまで誰も入れるなよ。」
　はじめの指示に、助手を自任する佐木が瞬時に反応した。
「ちょ、ちょっと待っててください、今取って来ます！」
「佐木くん！待って、あたしも行くわ！」
　バタバタと飛び出していった美雪たちを見送り、いよいよ不安が大きくなってきたらしい梅園が声を上げる。
「ちょ、ちょっと！どうしたっていうのよ。ちゃんと説明して！あの酔っ払いがどうしたのよ?!」
「神明先生に何か…？」
「白馬くん！一体何があったんだい…?!」
　宝田や犬飼も、部屋に漂う鉄の臭いに薄々の事態を察するが、最悪の想像を振り払うかのように梅園に続く。
　幽月も、言葉には出さないが不安が煽られているらしく、〝スカーレット・ローゼス〟にそっと寄り添う。
　皆が皆、異様な雰囲気に呑まれかけている中、唯1人、〝スカーレット・ローゼス〟だけは一切の感情を見せなかった。自身に寄り添う幽月を支えるでもなく、部屋の入口近くで壁にもたれかかり、腕を組んで静観するのみである。
「…落ち着いて聞いてください、神明さんが殺されています。」
「何ですって?!」
「まさか?!」
　このままだと脱衣所に入って来かねない、と判断した白馬が脱衣所のドアで梅園たちを押し留める。
　そんな中、カメラを取りに行っていた佐木たちが戻ってきた。
「先輩！お待たせしました!!」
「サンキュ、白馬に渡してもらえる？」
　白馬経由で手渡されたデジカメで、はじめは神明の遺体を中心に浴室内の写真を撮影する。
　そして、一通りの写真を撮り終え、この浴室内において最も異様なものをバスタブから引き揚げた。

――――――――――――山之内恒聖（こうせい）の遺した暗号の1つであるロシア人形、5体の人形のうち最も小さいイワンを。

5体のうち、最も小さいイワンの担当楽器は〝コントラバス〟。そして、神明（じんめい）の担当楽器もまた〝コントラバス〟である。

その神明（じんめい）の遺体が、〝首を刈られた〟状態で発見された。

「〝楽団は朝礼で前から順に首を刈られた〟、か……。」

感じていた不安が、いよいよ現実になり始めた事にはじめは己の無力を痛感した。

しかし、今は落ち込んでいられる状況ではない。

まずは、他の候補者たちに状況を説明すべく、浴室から足を踏み出した――――――――……。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ６

はじめが浴室から出た時、取り乱した宝田が白馬に掴みかかっているところだった。
「じ、神明先生が殺されたってどういう事です?!」
「落ち着いてください、宝田さん…!」
「落ち着いていられるような状況じゃないでしょう!?」
「取り乱しても状況は変わりませんよ…。」
カツン…と、微かな足音と共に現れ、宝田に言い聞かせるはじめに、その場にいた者たちの視線が引き寄せられる。
「き、金田一さん…!」
「神明さんが殺された、これは紛れも無い事実です。それも、暗号に〝見立て〟られて、ね……。」
説明してくれ、と言わんばかりの宝田に一瞬視線を向けつつも、容疑者を絞り込む為に、その場にいる全員に告げる。
「〝見立て〟…?」
「はじめさん、どういう事です?」
誰もが動揺を露わにしている中、冷静だったのははじめと一緒に遺体を確認した白馬と、〝スカーレット・ローゼス〟のみ。
「神明さんの遺体は、首が完全に切断されていました。そして、遺体と一緒にバスタブに浮かんでいたんですよ。この〝イワン〟がね…。」
「それは…?!」
「〝コントラバスのイワン〟!?あの暗号文の…?!」
はじめが掲げたロシア人形に、最も動揺の激しかった宝田と梅田が酷く狼狽える。
「成る程?〝コントラバスのイワン〟は暗号に使われているロシア人形の中で最も背が低い…。そして、暗号の〝楽団は朝礼で前から順に首を刈られた〟の通り、コントラバスを担当する神明先生の首も、その通りに刈られていた、という訳ですか。」
「そうなるかな…。」
この場では酷く不釣り合いな、美しいと言える程の微笑みを浮かべ

る〝スカーレット・ローゼス〟に、顔を顰めながらもはじめが頷く。
「で、でも、あの人形は〝時計の塔〟にある筈(はず)じゃ……!?」
「行ってみましょう!!」
ハッとしたような幽(ゆづき)月の言葉に、犬飼が叫ぶ。
「?!犬飼くん、待ってください!!」
それに反応した者たちがバタバタと部屋を飛び出して行く中、その場に残ったのははじめと〝スカーレット・ローゼス〟の2人のみ。
「……1つ確かめたいんだけど、この殺人、お前の仕業じゃないだろ?」
「おや?疑われていたとは心外ですね…。」
はじめの唐突な質問に、面白そうな声音で返す〝スカーレット・ローゼス〟に、はじめもまた失笑で返した。
「疑う?まさか…。むしろ確信してるよ。お前の仕業じゃあり得ないってね…。」
「…意外ですね。どうやらあなたは私の事を警戒していらっしゃるようでしたから。そんなに信頼してくれているとは…。」
「信頼?笑わせないで…。知ってるだけだ。仮にお前が手を下したと言うなら、もっと派手に〝舞台〟を演出している筈(はず)…。こんな衝動的且つ無計画に事を進める訳が無い。……そうでしょ?〝地獄の傀儡師(くぐつし)〟、高遠遙一(たかとおよういち)……!!!」
「……やれやれ。まあ、とっくに見破られているとは思っていましたけどね…。金田一さん!」
そう言って仮面を外す〝スカーレット・ローゼス〟、否高遠遙一(たかとおよういち)に、はじめが吐き捨てる。
「…バカにしてんの?そんなお粗末な変装であたしの目を騙し切れるとでも?」
「仕方が無いでしょう?何せ、君と出逢ったのはこの私にとっても予想外でした。現に、君以外の人たちは私の事に気付きもしなかったでしょう?私の素顔と声を知っている筈(はず)の、七瀬さんや佐木くんもね。」
「ふん…。」
鼻を鳴らすはじめに、高遠(たかとお)が興味深そうに尋ねた。

「それより、どうして真っ先に私を容疑者から外したんです？一般的に見れば、最も疑わしいのはこの私…。まぁ、殺ったか殺っていないかで言えば、全く心当たりはありませんがね…。」
「さっき言った通りだよ。お前が殺したにしてはらしく無かった。…まぁ、もっともらしく言うなら、バスタブの水かな。」
「水？」
「神明さんの遺体は水が流しっ放しのバスタブに浮かべられていた。通常、あのサイズのバスタブに水を満杯に溜めるなら３０分はかかる…。蛇口は全開だったから、もしかしたらもっと早かったかもしれないけど、たまたまタオルが排水溝を塞いでしまった事で浴室内に溜まった水はほとんど排水されずに脱衣所にまで溢れていた。それを考えると、あの溢れ具合から察するに少なく見積もっても４０分近く経っていた筈…。」
「ええ、それ位はかかるでしょうね…。でも、あらかじめ神明を殺すつもりでバスタブに水を溜めていたのかもしれませんよ？」
「時間的に無理があるね。午後１０時の鐘が鳴った直後に山之内恒聖のメッセージＤＶＤが公開されて、それから５分位して神明が部屋に戻ったから、逆算して神明が殺されたのは午後１０時５分から１０時３０分の間といったところ…。あたしが異常に気付いたのは午後１１時の鐘が鳴った少し後だけど、少なくとも夕食の始まる午後１０時３０分には田代さんと桐江さん以外の客人は既に食堂にいた。色々と動き回っていた田代さんと桐江さんの動きがはっきりとしないから何とも言えないけど…、少なくとも夕食が始まってからは遺体を切断する程の時間は無かっただろうし、殺されたのと首が切断されたのはほとんど間は空いていない筈…。そして、お前と幽月さん、宝田さんはＤＶＤの再生が終わってから、すぐにあたしたちと一緒に食堂に移動してる…。１０時３０分になる前にそれぞれトイレだと言って５分位席は外したけど、５分で神明を殺して遺体を切断し、もう１度食堂に戻って来るのは無理がある。…仮に、あらかじめバスタブに水を溜めて、遺体を浮かべた後で再度蛇口を開いたのだとしても、遺体の首を切断するのに数分で済むとは思えないね。いかにお前が人を

殺し慣れていて、死体の解体の経験があったとしても時間的に無理があるだろ？」

「ごもっとも。…フフッ、どうやら思考能力は鈍っていないようで安心しました。先程は少々ぼんやりされていたようですし…。これでも少々心配していたのですよ。私が唯一の〝平行線〟と認めた君が、万が一腑抜けていたらどうしよう、とね…。」

はじめの推理に安心したような笑みを浮かべる高遠に、はじめが心底嫌そうな顔をした。

〝平行線〟。

それは、高遠がはじめとの関係を示すのに好んで使用する言葉だった。

曰く、〝常に隣りにありながらも、決して交わる事の無い〟関係だと。

その言葉通り、お互いがお互いの思考を良く理解している。――――もっとも、理解はしていても共感は全く出来ないが。

はじめは時々思う事がある。

もし、祖父が自身の解決した事件の事をはじめに全く伝えず、犯罪の恐ろしさもそれが生み出す悲劇も悲哀も全く教えず、ただその〝血の宿命〟から遠ざけるだけだったなら。

もし、はじめの両親が彼女の〝才能〟を受け止める事が出来ず、はじめが親の愛情を受ける事が出来なかったなら。

もし、はじめの全てを受け止め、寄り添ってくれる美雪という親友が傍にいなかったなら。

もし、両親や美雪が卑劣な人間の手にかかって殺され、そいつらが法の裁きも受けずにのうのうと生きていたなら。

そこにいたのは、自分だったかもしれない、と…。

そして、それは高遠にも同じ事が言えた。

もし、彼が幼少期に親の愛情を受ける事が出来ていたら。

もし、彼の傍にもはじめにとっての美雪のような存在がいたなら。

もし、彼を復讐に駆り立てた近宮玲子が殺されずに生きていたなら。

――――――――2人の立場は、全くの逆だったかもしれない。
だからこそ、高遠(たかとお)ははじめに執着する。彼女を自分と同じ場所に堕とす為に。
だからこそ、はじめは高遠(たかとお)を特別視する。ｉｆの自分だったかもしれない男を止める為に。
２人の間に漂う緊張感は、強制的に壊された。高遠(たかとお)が再び仮面を着け直し、扉を振り返った事によって。
その理由は、直後にはじめも悟る。
「先輩、たいへんです！暗号のロシア人形が……!!!」
「はじめちゃん！人形が１つも無いわ!!」
バタバタと部屋に駆け込んで来た、佐木と美雪の声に。
扉側に立っていた高遠(たかとお)は、この２人の足音を聞き付けたらしい。
「全部？イワンだけじゃなくて？」
「全部です…！〝時計の塔〟には１つも…。」
佐木の肯定に、はじめもまた〝時計の塔〟へと走った。
「あ、待ってはじめちゃん！」
「置いてかないでくださいよ～…！」
バンッ！
はじめが〝時計の塔〟の、人形が置かれていた部屋に辿り着いた時、他の４人の候補者たちは有頭(ありとう)や白馬と共に、田代と桐江(きりえ)が振る舞うロシアンティーで一息吐(つ)いていたところだった。
「金田一さん…！」
飛び込んできたはじめに、まだ青い顔をしている宝田が立ち上がる。
「先輩、置いてくなんて酷いっスよ～…！」
追いかけてきた佐木たちが、はじめが開けっ放しにしていた扉から入ってきたのを確認しつつも、宝田に視線を戻した。
「人形が消えたと聞きましたが…。」
「は、はい。金田一さんの持っているイワン以外全部……！」
宝田の視線の先、５体のロシア人形が置いてあった筈の暖炉の上には、人形と一緒に置いてあった一対の電灯のみが置かれていた。

（あれ……？）
　先程ＤＶＤを見た時とは、明らかに何かが違う。その違和感が、この事件を解く鍵を握っている。
　はじめは、そう確信した。
「に、人形が無くなって、神明先生が暗号文に見立てられて殺されたって事は、まさか次に殺されるのは２番目に背の低いチェロのエミール…次は私なんじゃ…?!」
「ちょ、ちょっと待ってよ…！まさか、そんな小説みたいな事……?!」
　取り乱す宝田に、梅園も怯えたような声を上げる。
「まさか。そんな事がある筈ないわよ。金田一さんも人が悪いわ。神明さん１人が殺されただけでまるで次々殺人事件が起こるみたいな言い方して…。小説じゃあるまいし、見立て殺人なんて馬鹿馬鹿しい…。」
　場所が変わったからか、温かいロシアンティーを飲んで人心地付いたのか、落ち着きを取り戻した幽月が不穏な空気を一変させるかのように笑い飛ばす。
　しかし、それを否定したのは犬飼だった。
「…果たしてそうでしょうか？思い出しませんか？山之内先生の初期の代表作〝露西亜人形殺人事件〟を！あの小説では、集まった５人の人間がロシア人形に見立てられて次々と殺されていき、そして最後には誰もいなくなってしまった。ただ１人、真犯人〝指揮者〟を除いては――――！！」
「〝指揮者〟……？」
　山之内の小説を読んだ事の無いはじめを除き、残った３人の候補者たちがハッとする。
「〝指揮者〟というのは、山之内先生の書いた小説〝露西亜人形殺人事件〟の犯人ですよ。まるでオーケストラの指揮者の如く自分の思うままに殺人を成し遂げた、ね…。」
「ふぅん…。」
　白馬の説明に、はじめが相槌を打つ。
「…まぁ、今は小説よりも、目の前で起きた事件が大事だ。田代さん、

警察に連絡はしましたか？」
「あ、いやそれが…。」
　田代に目を向けるはじめだったが、田代は額の汗を拭きながら言い淀む。
「それは出来ません。」
「……どういう事ですか？有頭（ありとう）さん。」
「山之内先生のご指示で、遺産相続レース終了の５日後の山之内先生の誕生日の午前０時まで、外部との連絡は一切取る事が出来ないのです…。」
「人が殺されたんですよ？遺産どころじゃない。」
「しかし、遺言状に〝何があっても続行する〟という指示がされている以上、この指示が守られなければ５人の候補者の相続権は消失し、先生のご遺産は全て国に寄付される事になっているんです。その為、この相続レースに合わせて屋敷内の電話は撤去し、５日後の朝になるまで迎えも来ない事になっています…。」
　はじめの若干責めるような言い方に、有頭（ありとう）も不本意らしく、汗を拭きながら弁明した。
「候補者以外の人間が携帯で連絡を取る事も出来ないんですか？」
「…申し訳ありませんが、候補者の助っ人としていらした以上、白馬さんも、金田一さんたちも、〝スカーレット・ローゼス〟さんもその指示に従っていただきます。それだけでなく、田代さんや桐江（きりえ）さん、私もその対象です…。」
　白馬が問いかけるが、その為に携帯電話をお預かりしたのだ、と言われてしまえばはじめたちよりも先に、梅園が声を上げた。
「冗談じゃないわ！私はお金が必要なのよ?!国に寄付だなんて、それじゃ何のためにこんな所まで来たのか……!!あなたたちだってそうでしょう?!」
「そうですね…。今更取り繕っても仕方が無い。僕も、遺産が必要なんです。それが無いと、僕の犬たちが…。」
　梅園の悲鳴のような抗議に、愛犬たちを借金の担保にされている犬飼が同意した。

「そうね…。あたしも一緒よ。どうしてもお金がいるの。弟の治療費がね…。」
そして、弟が植物状態で入院している幽月(ゆづき)が続く。
「わ、私は……。」
顔を青くさせた宝田が口を開こうとした時、0時を告げる時計の鐘が鳴り響く。
リーンゴーン…!
リーンゴーン…!
リーンゴーン…!
「0時の鐘が…。もう遅いですし、話は明日に持ち越してそろそろ部屋に戻りませんか?まずは皆さん落ち着かれた方が良いかと…。金田一さん、すみません…。」
「はい?」
「イワンを貸していただけませんか?この人形も暗号の一部ですから、出来るだけ元の通りにしておくべきかと…。」
有頭(ありとう)が話を一先ず切り上げる事を提案し、はじめが手に持ったままだったロシア人形のイワンを暖炉の上に戻すように伝える。
「ちょ、ちょっと弁護士さん!その人形、死体と一緒に浮かんでたんでしょ!?そんな所に置いといて良いんですか?!」
それに待ったをかけたのが宝田だった。神明(じんめい)の死が余程ショックだったのか、その顔色は既に倒れそうな程に青い。
「しかし、遺言状にはどんな事があってもこの相続レースは期限が来るまで実行するように、との指示がされています…。続けるか続けないかは明日皆さんで良く話し合ってもらう事にして、それまでは出来るだけ元の通りにしておかないと…。」
「そうよ!こんな事で諦めてたまるもんですか!!」
有頭(ありとう)の言葉に、顔色をやや青くさせながらも頷いたのが梅園。犬飼と幽月(ゆづき)も、同意見のようで梅園の後に続くように頷きを見せていた。
「では、私は先に休ませてもらいますか…。明日からの推理合戦に備えてね。GoodNight!〝四重奏(カルテット)〟の皆さん!」
真っ先に、余裕すら滲ませて部屋を出て行った〝スカーレット・

ローゼス〃を見送った後、後を続くように立ち上がる４人の候補者たちにはじめが釘を刺す。
「部屋に戻ったら、必ずドアと窓の施錠を確認してください。それと、誰かが訪ねていっても、絶対に不用意に開けたりしないように……！」
「ちょっと?!それってどういう意味よ!?」
「分かってるでしょう?梅園さん。この屋敷は湖によって外界と切り離された言わば天然の密室！外から殺人者が侵入した可能性は極めて低い――――。つまり、神明（じんめい）さんを残虐なやり方で殺した犯人――――、〃指揮者（コンダクター）〃はこの中にいるかもしれない。」
「そ、そんな…。」
「用心するに越した事はありませんよ。犬飼くん、はじめさんの言う通りに…。」
　はじめの断言に、ショックを受けた様子の犬飼を白馬が宥めるように肩に手を置く。
「宝田さんも。良いですね？」
「は、はい…。」
　宝田に念を押し、念の為と田代に確かめる。
「田代さん！この屋敷内の鍵は、あたしたちそれぞれが持つものの他は、マスターキーしか無いんですよね？」
「はい、その通りでございます。普段マスターキーは鍵付きのキーストッカーに保管しておりますし、ストッカーの鍵はこの通り…。私が常に肌身離さず持っています。」
「それなら安心ね…。誰かが訪ねてきても、鍵を開けさえしなければ安全だわ。」
　田代の断言に、幽月（ゆづき）がホッとしたように微笑む。
「それでは、皆さま…。明日の朝食は８時からとなっておりますので、どうかそれまではごゆっくりとお休みください…。」
　田代の言葉を最後に、それぞれが割り当てられた部屋へと戻る。
――――――――不穏な気配を察しつつも、それぞれが部屋で１人の夜を過ごした。
　自身がいつ眠ったのかすら気付かずに…。

その翌日、本当に新たな犠牲者が出るとは知らぬまま、それぞれが一時(ひと)の深い眠りについていた――――――。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ７

――――推理小説家―山之内恒聖の遺した莫大な遺産を巡り、５人の遺産相続候補者たちが北海道のとある湖の真ん中にそびえる露西亜館へと集められた――――…。

彼の名探偵―金田一耕助の孫娘、金田一一は懇意にしているフリーライター――いつき陽介の紹介で、彼が世話になっている５人の遺産相続候補者の１人、文芸編集者の宝田光二の依頼で遺産相続の条件である暗号を解読する為、幼馴染の七瀬美雪、後輩の佐木竜二と共に露西亜館へと赴いた。

――――しかし、最初の夜、候補者の１人であるミステリー評論家の神明忠治が、暗号に見立てられて惨殺される。暗号を示す５人のロシア人形は消え失せ、遺産相続戦に暗い影を落とした――――…。

依頼を受けた当初から不穏な気配を察していたはじめは、それ以上の被害を防ぐべく残った４人の候補者に部屋の施錠を徹底させるが、その甲斐も無く、新たに２人目の犠牲者が現れる――――…。

――――神明が殺された翌朝、はじめは開いたままのカーテンから差し込む朝日に意識を引き戻された。

「っぐ……！」

身動きする度に襲ってくる頭痛と眩暈に、はじめは呻きながら身を起こし、サイドチェストに置かれた腕時計を手に取る。

「頭痛い……。」

おまけに、頭の一部が霞みがかったようにぼんやりとしている。

（昨日、いつ寝たんだっけ……？）

部屋に戻り、神明の血に染まった水でずぶ濡れになってしまったスノーブーツを洗い、干した記憶はある。

ただ、その後で強烈な睡魔に襲われ、シャワーを浴びる前に少し横になろう、と服を着たままベッドに寝転がった後の記憶が完全に跳んでいた。

確かに部屋に戻ってきたのは０時を過ぎており、遅い時間ではあっ

たが、いつもならゲームやらネットやらで起きている時間である。
その時間にあれだけの睡魔に襲われた、というのがまずおかしい。
（もしかして、夕食に何か…。）
睡眠薬でも混ぜられていたのだろうか。
この頭痛とはっきりとしない思考もそれのせいだとすれば納得がいく。
「っ…！宝田さん……!!」
そこまで考えて、ハッと気付く。
本当に睡眠薬を盛られていたのだとしたら、候補者たちの身が危ない。おまけに、暗号文に見立てられているというのなら、２番目に小さいのは〝チェロのエミール〟。宝田の担当楽器はチェロ。
ガバッ…！
怠い体を無理やり起こし、髪を結ぶ手間を惜しみ、干してあったブーツを履くのももどかしく、裸足のまま部屋を飛び出した。
バンッ…！
宝田の部屋は、はじめの隣の部屋である。
「宝田さん！聞こえますか、宝田さん…!!」
ドンドンドンドンッ！と激しくノックするが、応答は無い。
「せ、先輩～…？どうしたんですか、一体……。」
けたたましい騒音に、はじめの向かいの部屋の佐木が顔を出す。いつも通りビデオを回してはいるが、やはりどこかぼんやりとした様子だった。
「はじめさん…？宝田さんに何か…?!」
ほぼ同時に、宝田の部屋の向かいだったらしい白馬が、同じくどこかぼんやりしたような精彩を欠いた顔で顔を出す。しかし、探偵を名乗るだけあってはじめの様子から瞬時にある程度の状況を悟ったらしい。
すぐに同じく部屋から飛び出してきた。
「宝田さんが応答しない…。この体の怠さと頭痛が睡眠薬か何かによるものだとしたら、犯人が夜のうちに何か仕掛けたかもしれない…！」

「！この時間なら、既に田代さんは朝食の準備をしている筈です…！急いでマスターキーを…!!」
「ああ！」
「あ、ま、待ってくださいよ…！」
白馬の言葉と共に走り出す2人の後をビデオを構えた佐木が追い掛ける。
（宝田さん……！）
白馬の後ろを追い掛けながら、はじめが祈るが、既に死神の鎌は容赦無く振り下ろされた後だった――――…。
「た、宝田さん…!?」
マスターキーを手にした田代を連れ、宝田の部屋の前へと戻ったはじめたちが目にしたのは、ベッドの上で全身を滅多刺しにされ、首を切り落とされて事切れている宝田の姿だった。
血を吸い込んだシーツは黒く変色し、殺害されたのが夜のうちだった事を暗に示している。
「う、うわあああああ!!!!」
その惨状と、噎せ返る程の血の臭いに、田代が悲鳴を上げた。
「な、何?!どうしたんですか?」
「今の悲鳴は一体……?!」
その悲鳴に、はじめの逆隣の部屋の美雪と、白馬の隣の部屋だった犬飼が顔を出す。
「来るな、美雪！」
「犬飼くん、君もだ！見ちゃいけない!!」
宝田の死に、思わず呆然としかけたはじめだったが、幼馴染の声に意識を取り戻し、咄嗟に声を張り上げた。白馬も、すかさず犬飼に声をかける。
「佐木…。昨日借りたカメラがあたしの部屋のベッドボードにあるから、持って来てくれない……？」
「は、はい!!」
遣り切れない思いに震えそうになる声を抑えながら告げるはじめに、呆然と部屋の惨状を録画していた佐木が弾かれたようにはじめの

部屋へと走った。
その時、玲瓏(れいろう)とした声が響く。
「これで三重奏(トリオ)になってしまいましたね……。」
「ローゼスさん…!?」
血の臭いを忌避するでも、死に恐怖しているでも無い平淡な声で告げる〝スカーレット・ローゼス〟に、白馬がわずかに引いているのが分かる。
はじめがゆっくりと振り返ると、口元に笑みさえ浮かべた〝スカーレット・ローゼス〟が腕を組んで白馬の部屋の扉にもたれかかっていた。
「――――どうやら、あの暗号文に見立てて犯人が殺人を行っている、という金田一さんの仮説は残念ながら的を射ていたらしい…。」
「…今の問題は、この密室の中犯人はどうやって出入りしたか、です。」
どこか面白がるような口調に苛立ち、声に感情を乗せる事無く視線を逸らす。
「先輩!カメラです!!」
「サンキュ…。白馬、現場撮影するから撮影が終わるまであたしが妙な真似をしていない、って事を後ろで見ててくんない?」
佐木からカメラを受け取り、白馬を振り返る。
宝田がはじめの依頼人であり、個人的な関わりがある以上、形式的なものでも必要な処置だった。
「え、ええ。分かりました。」
白馬もそれは承知しており、承諾する。
「田代さん、すみませんが他の人たちも一緒に食堂で待機していてもらえませんか?遺体が傷まないうちに軽く現場検証しておきたいので…。それから、あなたも何か温かいものでも飲んだ方が良い…。」
「は、はい…。分かりました。」
神明(じんめい)の時とは異なり、間近で目撃してしまった事が余程ショックだったのか、今にも倒れそうな顔色の田代を遠ざける為、もっともらしい役割を頼む。
田代が佐木たちを促し、食堂へと向かうのを見送るが、動く気配の

無い男に目を移した。
「…あなたは行かないんですか？ローゼスさん？」
「別にあなた方の邪魔をするつもりはありませんよ。私も助っ人として来た身ですからね。依頼主の身に危険が及ぶ可能性がある以上、その犯人の手がかりになるようなものは見ておきたいんですよ。」
「…良いでしょう。その代わり、あたしと白馬が良いと言うまで絶対に部屋の中には入らないでください。」
「ええ、分かりました。」
〝スカーレット・ローゼス〟の正体を知る白馬が、２人のやり取りにハラハラしているのが分かるが、それに構っていられる程の余裕は今のはじめには無かった。
〝スカーレット・ローゼス〟の視線を背中に感じながら、その存在を無視して白馬を促す。
「入るよ。」
「は、はい。」
はじめと〝スカーレット・ローゼス〟の顔を見比べていた白馬だったが、一切手出しをする様子の無い〝スカーレット・ローゼス〟に、現場検証を優先させる事に決めたらしい。はじめの後を追う形で宝田の部屋へと足を踏み入れた。
宝田の遺体とその周辺を撮影した後、遺体の状況を確認する。
「この出血量から見ると、やっぱり首を落とされたのは死後みたいだな…。」
「死因は、滅多刺しにされた事による失血死といったところでしょうか…。掛け布団に複数の穴が開いているという事は、掛け布団の上から刺したようですね…。」
「ああ…。」
宝田の遺体は、ベッドの上に横たわり、掛け布団をかけたまま事切れていた。その首は、悪趣味にもサイドチェストの上に無造作に置かれている。
「よいしょっと…。」
「はじめさん?!何を…!?」

徐（おもむろ）に掛け布団ごと宝田の遺体を横にするはじめに、白馬が目を剥く。
「背中側にも傷があるな…。この傷口の大きさと合わせて考えると、凶器は少なくとも幅５ｃｍ程度で刃渡り２０ｃｍ以上…。」
「表側に比べると、背中側の傷はやや小さいですね。となると、ナイフというより包丁のようなもので殺害された可能性が高い。」
はじめの言葉を補足するように呟く白馬に、はじめが頷く。
「かもね…。」
一通り部屋の中を見て回り、白馬が窓の施錠を確かめる。
「……窓の施錠は問題ありませんね。特に細工されている様子も無いし、針金を通せるような隙間もありません。おまけにここは３階。窓の外に足場になるようなものもありませんし…。」
「となると、ドアの方…。いや、マスターキーを型取りするか何かして、合鍵を作ったのか……？」
「いえ、それは無いでしょう。この館の鍵は、マスターキーは勿論、僕たちに渡されている鍵もコピー出来ない特殊なものだと聞いています。」
しっかりと鍵のかかった部屋へと犯人が出入りした侵入経路を探す２人に、後ろから深みのある艶やかな声がかけられる。
「もっと単純な事だと思いますよ。」
その言葉に、はじめが後ろを振り返った。
「…どういう事ですか？ローゼスさん。」
「こういう事です。」
そう言うなり、〝スカーレット・ローゼス〟が扉の外側に回り、屈み込む。
「？何を…。」
一体何をしているのか、とはじめが扉へと近付いた時だった。
――――――カタンッ！
軽やかな音と共に、扉の装飾部分が内側に開く。
「！隠し扉……?!」
「こんな所にそんなものがあったとは…！」

８０ｃｍ×８０ｃｍ程の隠し扉は、大人でも屈めば楽々通れる大きさである。
「恐らく、宝田さんを殺した犯人はここから出入りしたんでしょう。この館は元々ホテルだったそうですが、確かその最初のオーナーは、当時世界で名の知れた奇術師のユーリ・イワノフというロシア人だった筈（はず）です。彼は、晩年奇術師としての遊び心をふんだんに盛り込んだホテルを作り上げた、と聞きました。それがこの館だったとは、私もここに来て気付きましたがね…。」
「それでは、こんな仕掛けが他の部屋にも……?!」
「その可能性は高いですね…。」
白馬の言葉に頷く〝スカーレット・ローゼス〟を見詰めながら、はじめが提案する。
「他の人たちも一緒に、各部屋を調べましょう。他にも抜け穴があるなら、いくら鍵をかけても全て無駄になる…！」
「それが無難でしょうね…。」
はっきり言ってこの男を頼るのは癪（しゃく）な上に危険な賭けではあるが、トリックや絡繰りを見破るのにこれ以上頼もしい相手もいない。
（胃が痛い……。）
相反する思いに胃がキリキリと痛むのを感じながらも、今はこの方法しか無い、とはじめは無理やり自分を納得させた。
「それより金田一さん?」
「……何か?」
徐（おもむろ）に話しかけてきた〝スカーレット・ローゼス〟に目を向ける。
「そろそろ靴を履いた方が良いのでは?いつまでも裸足でいると危ないですよ。」
「…そうさせてもらいます。」
（そういえば、まだ裸足だったんだっけ…。）
ついでに髪も結んでこよう。
タイミングを外したままうっかりしていた。
――――――そしてその後、各部屋で次々と仕掛けが見付かった。

幽月(ゆづき)の部屋では、チェストの引き出しを全て抜き出すと、地下のワインセラーへと繋がる階段が。
梅園の部屋では、飾られた絵の裏に隠し金庫が。
犬飼の部屋では、照明器具を引っ張る事で壁が持ち上がり、アンティークドレスのコレクションが。
美雪の部屋には、姿見がマジックミラーになっており、はじめの部屋から美雪の部屋が覗けるようになっていた。
(気付かなかった…。)
はじめの部屋側には、マジックミラーを隠すように絵画がかけられていた為、気付けなかったのだ。
そして、桐江(きりえ)の部屋には壁にかけられた仮面の目に覗き穴が仕込まれており、隣の部屋—死んだ山之内の寝室から覗けるようになっていた。
(ん……?)
桐江(きりえ)の部屋で感じた違和感に既視感を感じ、はじめが佐木に目をやる。
佐木がいつも通りにカメラを構え、部屋の中を撮影しているのを確認し、後で見せてもらう事に決めた。
最後の有頭(ありとう)の部屋では、特定の場所から見ると壁に暗号のようなアルファベットの羅列が浮かび上がった。
「さて…。私の部屋はもう自分で調べて、特に外から侵入出来るような危険な仕掛けはありませんでした。これで、各自内側から施錠すれば犯人から身を守る事が出来るでしょう。」
〝スカーレット・ローゼス〟の言葉に、はじめが田代に目を向ける。
「田代さん、確かキーストッカーの鍵は田代さんが管理されているんですよね?」
「ええ!一応そうさせて頂いていますが…。」
「合鍵は存在しないと聞きましたが、それは本当ですか?」
「その通りでございます。この鍵は、見た目こそ普通ですが、実はロシア製の極めて特殊な鍵で簡単に複製出来るものではありません。山之内先生にも、失くすとキーストッカー自体を壊さなくてはいけなく

なるので気を付けろ、と言われておりました。なぁ、桐江(きりえ)くん？」
「は、はい！あたしもそう聞いてます！」
それを聞きながら、館の入口付近のフロントを思い出す。
元はホテルだった、との言葉通りにホテル時代の名残であるフロントの奥に設置されているキーストッカーは、各部屋の鍵がそれぞれ部屋番号ごとに分けて保管されていたが、マスターキーを保管する部分のみ南京錠を逆さにしたような形の施錠式になっているのだ。
「そういえば、僕も山之内先生からそんな話をされた事があるなぁ…。」
「犬飼くんも？」
思い出したように呟く犬飼に、白馬が尋ねる。
「ああ。あれは確か、まだ先生が病気で倒れられる前の事だから、2年位前になるかなぁ…。」
まだ健康体だった山之内に誘われ、この館に遊びに来た犬飼はそのキーストッカーの前で問われた。
――――何故このホテルを作った奇術師はキーストッカーに合鍵を作らなかったのか。
――――これ程の細工を施しておきながら、鍵を失くしたが最後、マスターキーを外せなくなる、というのはホテルとして奇妙ではないかと。
「その時は、そうなったら1つ1つのマスターキーをリングにぶら下げている紐を切れって事なんじゃないかと思ってそう答えたんだけど…。後で聞いたところによれば、マスターキーをリングにぶら下げている紐は、細い金属と炭素繊維を組み合わせて織ったもので、鎖やワイヤーなんか目じゃないくらいに丈夫なものらしい。」
「犬飼さんのおっしゃる通りです…。1度、山之内先生が「1つ切ってみよう」とおっしゃって、ワイヤーカッターで切ろうとしたんですが――――、紐にちょっと傷がついた位でビクともしませんでした。相当特殊な工具でも使わないと、切断するのは不可能でしょう――――。」
キーストッカーの鍵を見せながら断言する田代に、佐木が尋ねる。

「でも、ハンマーか何かを使えば、キーストッカー自体を壊してマスターキーを奪えるんじゃ…？」
「ははは…。まぁ、乱暴ですが可能でしょうね。でも、キーストッカー自体に警報装置が入っていますから、けたたましいベルの音でみんな気付きますよ。」
「だったら、その鍵さえ完璧に管理しておけば、殺人鬼に寝込みを襲われる心配はなさそうね！ちょっとその鍵、あたしに預からせてくれない？田代さん。」
　佐木の心配を笑い飛ばす田代に、梅園が無茶ぶりをした。
「えっ?!そ、それはちょっと……。」
「どうしてよお！それが1番安心なのよ！あたし!!」
　たじろぐ田代に迫る梅園を見かねた有頭（ありとう）が提案する。
「それなら、私が預かりましょう!!弁護士の私は遺産相続権は無い訳ですし…。」
「ちょっとお!!弁護士さん！あたしが犯人だとでも言うの?!」
「そうではありませんよ！ただ。中立的な立場の私ならと……。」
「中立的立場…？本当にそうなんでしょうか…？」
　有頭（ありとう）と梅園のやり取りに口を挟む〝スカーレット・ローゼス〟に、有頭（ありとう）がピクリと反応した。
「弁護士のあなたが、実は誰かに莫大な利益を密かに約束されていたとしたら…？――――殺意の動機は目に見えるものばかりとは限りませんよ。」
「しかし、そんな事を言い出したら誰だって怪しいって事になる！そういうあなただって……！」
　揶揄（やゆ）するかのような言葉に、有頭（ありとう）が言い募るが、全く意に介する事無く〝スカーレット・ローゼス〟が続け、田代の手からキーストッカーの鍵を取り上げる。
「だからこうしてはいかがですか？この鍵は取り敢えず私が預かる――――。その代わり、私の部屋を外から決して開かないように封鎖してもらって構わない。どうでしょう？皆さん。」
　周囲をグルリと見渡して尋ねる〝スカーレット・ローゼス〟に、

真っ先に幽月(ゆづき)が同意した。
「――――そうね…。ローゼスさん!あなたなら取り敢えず安心だわ!」
「よろしいですか?金田一さん。」
次いではじめに視線を向けてくる〝スカーレット・ローゼス〟に、はじめもまた不敵な笑みを浮かべて見せる。
「――――ええ…。良い案かもしれませんね。」
「はじめさん……?!」
この中で唯一、はじめの他に〝スカーレット・ローゼス〟の正体を知る白馬が何を考えているのかとはじめを振り返った。
「ただし、美雪と部屋を交換してもらいます。美雪の部屋に外に出られるような仕掛けが無いのは皆さんもご存知でしょうから…。マジックミラーはありましたけどね。シーツか何かで鏡を塞げばプライバシーは守られる…。問題は無いでしょう?」
「え?!あたし?!!」
不意に振られた話に、美雪が驚愕を露わにする。
「やれやれ…。どういう訳か、あなたにはとことん信用されていないようだ…。まぁ、それで皆さんに納得いただけるというなら部屋を交換する位構いませんよ。では、私は夜になったらこの鍵を持って部屋に閉じこもります。それを確認してから、外から入口を閉鎖してください。」
はじめの要求を呑んだ〝スカーレット・ローゼス〟が、キーストッカーの鍵を一旦田代に返却した。
「それでは七瀬さん?部屋を交換していただけますか?」
「え、あ、はい!!」
何が何だか分からないうちに部屋を交換する事になった美雪が〝スカーレット・ローゼス〟の言葉に頷く。
「では、荷物を全て纏めて来てください。その後で鍵を交換しましょう。」
「はい!」
その言葉に、慌てて部屋に戻る美雪の後を小走りで追いかけた。

「待って美雪。1人は危ない。」
そう言って横に並ぶはじめに、美雪が小言を言ってみせる。
「もう！はじめちゃんったら勝手に決めちゃうんだから…！」
「ゴメンて。美雪の部屋が1番都合が良かったんだよ。」
余計な仕掛けが無く、はじめが見張る事の出来る距離。
「それにしたって、わざわざ部屋を交換なんてしなくても…。ローゼスさんの部屋に他に出入り出来るような抜け穴は無かったんでしょう？」
「本人の自己申告ではね。」
それに、正確に言えば〝外から侵入出来るような危険な仕掛けは無かった〟である。
あの口ぶりだと、中から外に出るような仕掛けはあったかもしれない。
念には念を入れておきたかったのだ。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ８

〝時計の塔〟の、山之内の遺言ＤＶＤが公開された部屋で、はじめは暗号を解読する手掛かりである露西亜人形を眺めていた。
現在は５体のうち３体の行方が知れず、暖炉の上に置かれているのは神明と共に見付かった〝コントラバスのイワン〟と、宝田と共に見付かった〝チェロのエミール〟のみ。
「嫌だわ…。今日も凄い霧…。人殺しのあった館に閉じ込められて、ただでさえ気が重いのに……。こんな霧を見てると、全て時間が止まってもう永久にここから出られない――――、そんな気がしてくる…。」
窓の外、湖に立ち込める白い霧に、美雪が溜息を吐いた。
「あたしたち、無事に帰れるかしら？ねぇ、はじめちゃん…。」
イワンとエミールを見詰めながら考え込んでいたはじめが、美雪の声に振り返った。
「大丈夫…。もし、５日を過ぎてもあたしから何の連絡も無かったら、剣持のオッサンか明智さんに連絡してくれるようにいつきさんに頼んでる。後４日…、無事に生き延びさえすれば帰れるさ……。だから美雪、絶対に１人では出歩くなよ？」
「うん…。」
はじめの断言に安心したように美雪の表情が和らぐ。
ガチャッ！
「先輩!!ありましたよ、この館の平面図!!棚の奥にあったのを田代さんに引っ張り出してもらいました！」
勢い良く扉を開けて入ってきた佐木と、後に続いてきた田代にはじめが歩み寄った。
「サンキュ…。田代さんも、ありがとうございます。」
「いえいえ。古い物なのでかなり傷んでますが――――…。しかし、金田一さんこんなもので何が…？」
ガサガサと保管用の茶封筒から書類を取り出しながら問う田代を、ソファに誘導しながら答える。

「例の暗号ですよ。暗号を解く鍵として用意された5体のロシア人形――…。犯人は、どうしてあの2人を暗号に見立てて殺したのか？成り行き？狂気？憎悪――――…？私はその謎を解き明かさなきゃいけない。いえ、必ず解き明かします。ジッチャンの名にかけて…！その為には、もっとこの奇妙な館の事を知らなきゃいけない――――。そう思ったんです。」

テーブルの上に広げられた館の平面図を見詰めながら、決意を新たに断言するはじめの姿に、田代がわずかに気圧された。

「あたしたちが今いるのはこの〝時計の塔〟ね！」

中庭を中心に、五角形のような形で建つ塔の図を見ながら美雪が呟く。時計回りに〝西の塔〟、〝北の塔〟、〝時計の塔〟、〝東の塔〟、〝南の塔〟という形で配置されている。

「佐木！お前のビデオ見せてくれない？この館に到着した時のヤツ。」

「はいっ！ただいま！」

はじめの頼みに、佐木が満面の笑みで頷き、求められた場面までビデオを巻き戻す。

「どうぞ。」

差し出されたハンディカムの画面を覗き込み、館を正面から写した場面を静止して確認した。

「この〝時計の塔〟が1番大きくて高いんですね～。」

「でも、良く見ると塔の高さは全部バラバラね…。デザイン上の問題かしら？」

佐木の言葉に美雪が呟く。

確かに画面を見る限り、1番高いのが〝時計の塔〟で、高さは全てバラバラになっており、1番低いのは〝南の塔〟だった。

「この塔には時計がありますから。どの塔からも、それが見えるように工夫してあるのかもしれませんね。」

「――――高さの違う5つの塔か…。」

田代の推測を聞きながら、はじめが思考を巡らせる。

「高さが違うって言えば、佐木！そう言えば、お前に例のロシア人形の写真頼んでたよな？」

それどころじゃない事が立て続けに起こったせいで、確認するのをすっかり忘れていたが。
「はい！バッチリ撮ってますよ!!もちろんビデオにも映ってます。」
「悪い、借りたデジカメ部屋に置いて来ちゃったんだ。その映像、すぐに出せるか？」
「もちろんですよ♡ちょっと待ってくださいね。え～っと…。あ、出ました！」
手早くハンディカムを操作した佐木が、はじめの望む映像を静止させて見やすくする。
「サンキュ。…っ?!」
静止画になった事で、はじめが昨夜から感じていた違和感の正体が明らかになった。
（そうか…。だからあの時……！）
1つ、重要な手掛かりを得る事が出来た事に、それまで縺(もつ)れた糸のようにごちゃごちゃとしていた思考がスッとクリアになるのを感じる。
まるで進むべき方向を見定めたかのように…。
「こうして見ると、確かに〝コントラバスのイワン〟が1番小さくて、2番目が〝チェロのエミール〟ね。」
「ホントだ！すると3番目は〝ビオラのオリガ〟…。いや、〝第2バイオリンのターニャ〟かな…？あれ、どっちだろ？」
はじめが自身の思考に沈んでいる間に、美雪と佐木もまた静止画の中のロシア人形に注目していた。
「…こうして見ると、ターニャとオリガって服装は全く違うけど良く似てるよな…。」
顔も背丈もそっくりな2つの人形に、佐木が混乱するのを見てはじめが呟く。
「そう言えば、何か背格好といい双子みたいにそっくりね！」
頷く美雪にはじめが尋ねる。
「…なぁ、美雪。どっちがビオラでどっちがバイオリンなの？あたしは全く見分けがつかないんだけど…。」

「そうねぇ、あたしにも良く分からないけど…。」
「大きさが違うのよ！」
困惑する美雪に助け船を出すように、後ろから声がかけられる。
「幽月（ゆづき）さん！」
いつの間に部屋に入って来たのか、美雪の背後にいたのはビオラを担当する幽月（ゆづき）だった。
驚くはじめたちに、クスッと笑みを漏らし、自身の担当楽器であるビオラを掲げて見せた幽月（ゆづき）が続ける。
「あたしのパートのこのビオラは、６５から６６ｃｍでバイオリンよりも少し大きいの。因みに、バイオリンは６０ｃｍ、チェロになるとグッと大きくて１２０ｃｍ、最低音を担当するコントラバスに至っては１８０ｃｍから２ｍもあるわ。」
「へぇ、知らなかった…。バイオリンとビオラってパッと見の大きさの違いが分からない位なんですけど、音も違うんですか？」
興味を惹かれた様子で尋ねてくるはじめに、幽月（ゆづき）が頷く。
「当然よ！バイオリンはビオラよりも弦の調律が完全５度ずつ高いの。同じように、５つそれぞれの楽器が異なった音域を担当しているのよ。そして、これがビオラの音…。」
そう言ってビオラを構え、試しに一小節奏でて見せた幽月（ゆづき）にその場に居合わせた者たちは思わず聞き惚れる。
確かにバイオリンよりも音がわずかに低いが、普段全く音楽に興味の無いはじめが素直に綺麗な音だ、と感嘆する程だった。
「へぇ…。」
「綺麗な音…!!」
はじめと美雪の反応に気を良くした幽月（ゆづき）が続ける。
「でしょ？バイオリンみたいに主旋律に使われる事は少ないけど、中音域を担当するこのビオラがあるのと無いのでは、曲全体の重みと厚みが全く違うのよ。言ってみれば、小説の挿絵みたいなものね。挿絵を目当てに小説を買う人はいないけど、良い挿絵が入っているのとそうでないのでは、作品の面白さが大きく違うわ。少なくとも、あたしはそう思ってる。」

穏やかな語り口の中に、高いプライドのようなものを感じ、思わず黙って耳を傾ける。
「でもね、時々ふと虚しくなる事があるのよ。地味なレパートリーからはみ出して自己主張をしてみたくなる事がね…。」
「自己主張？」
相変わらずビデオを回している佐木が幽月（ゆづき）をアップにしながら尋ねる。
「ええ！ちょっと前の事なんだけど…。あたし、実は山之内先生の小説の挿絵を描いた時、トリックの答えみたいなものを挿絵にこっそり描き込んじゃった事があるの！」
「ええっ!?」
「そ…、それってマズいんじゃ……！」
「魔が差したっていうのかな……。」
ミステリーに厳禁である筈（はず）のネタバレを行った、という暴挙とも言える幽月（ゆづき）の行動に、美雪と佐木が引く。
「トリックはミステリーの命みたいなもんだって、充分分かってたつもりなんだけど、連載小説で毎号毎号原稿を渡されてそれにあった挿絵のデザインを考えるうちに、ふとその作品のトリックの答えに気付いてしまってね――――…。そうしたら、居ても立っても居られなくなって、この答えを誰かに話したくて話したくて…。とうとう我慢出来なくなって、挿絵でそれを表現しちゃったのよ…。そうしたら、それに気付いた読者からどっとクレームが来ちゃって。焦ったなぁ、あの時は…。何しろ、その作品は山之内先生が久しぶりに入れ込んで書いていた自信作だったみたいで……。」
当時を思い出しながら溜息を吐（つ）く幽月（ゆづき）に、その様子を知っている田代が苦笑する。
「ああ、あの時ですか…。ちょっと大変な騒ぎでしたね。」
（白馬が言ってたのはこれか…。）
幽月（ゆづき）と初めて顔を合わせた時、白馬が言っていた言葉がはじめの頭によぎる。
『山之内先生のファンの間ではある意味有名ですから…。』

確かに、そんな暴挙に出たのであればあの意味深な白馬の様子にも納得がいく。
「でも、山之内先生は笑って許してくれたわ…。流石（さすが）、編集者からも読者からも人格者として慕われている山之内先生だけあるなって、あたしその時は大感激したけど…。今にして思えばどうだったのかしらね…。」
「……どういう意味ですか？」
幽月（ゆづき）の言葉にピクリ、と反応したはじめが問う。
「――――本当はあたしの事、殺したい位憎んでたんじゃないかなって……、ちょっと思うのよ。人格者で通ってた手前、許すふりをせざるを得なかったけどホントは……。」
「そ、そんなまさか！山之内先生はそんな方ではございません!!私のような使用人にも謙虚で気遣いを忘れない方で……。」
「――――本当にそうですかね？」
幽月（ゆづき）の言葉を否定する田代に、はじめが割り込んだ。
「先輩!?」
「は、はじめちゃん、急に何を言うのよ…？」
田代の言葉を完全に否定するような言葉に、佐木と美雪がぎょっとしてはじめを振り返る。
「年頃の女の子の部屋を覗き穴で覗いているような男が人格者とは、あたしには思えないんですよね。それに、この遺産相続戦だってそうだ。本当に候補者たちの事を考えていた、というならむしろわざわざ争わせるような真似をする必要は無いでしょう？５人平等に分配したって良い筈（はず）だ。」
桐江（きりえ）の部屋に隠されていた覗き穴と、そもそもの事件の発端である遺産相続戦について言及（げんきゅう）する。
「そ、そう言われると確かに…。」
「い、いや覗き穴の事は先生ご自身も気付いておられなかったという可能性も…!!」
はじめの言葉に思わず納得しかける美雪に、田代が慌ててフォローに回った。

「それに、用意されていた遺言の収められたＤＶＤ…。あの時、候補者それぞれに宛ててあったメッセージもそうだ。わざわざ人のプライベートを調べ上げて、それを他の候補者たちに公表するなんて趣味が悪過ぎる…。とてもじゃないけど、人格者には思えない。」
「あたしもそう思うわ。人格者の仮面の下に隠れた、陰湿で執念深くて好色(こうしょく)で……。――――そして、強欲で残忍な素顔が見えて来る気がする……。」
　はじめに同意し、幽月(ゆづき)が続ける。
「もっとも、それはこの館に集まった連中にも言える事だけどね！あたしだってほら！」
「!?」
「っ……！」
　言って長い前髪で隠していた顔の右半分を見せる幽月(ゆづき)に、間近で見ていた美雪とはじめが思わず息を呑む。
　彼女の顔の右半分は、無残に焼け爛(ただ)れていた。左側には全く傷も無く、滑らかな肌をしている為余計に火傷の後が際立つ。
「びっくりした？酷い火傷でしょ。以前、火事に巻き込まれてね…。その時、弟は一酸化炭素中毒で意識を失い、今も植物状態で病院に…。山之内先生がＤＶＤで言ってた事は本当なの。だから、あたしはどうしても遺産が欲しかった。どんな手段を使っても手に入れたい！もちろん、今もそう思ってるわ…。」
　そう言いながら部屋を出て行く幽月(ゆづき)を、思わず黙って見送る。
　そして、同時にその気持ちを弄ぶような〝ゲーム〟を仕組んだ山之内恒聖(こうせい)への嫌悪感が増した。
「あ、あのＤＶＤで言ってた事って本当だったんですね…。」
「…みたいだな。」
　呆然としたように呟く佐木に頷く。
「それでは、私は仕事に戻らせていただきますので、何かご用がありましたら遠慮無くお声がけください。」
「ありがとうございました。」
「いえ、これも仕事でございますから…。」

一礼して退室する田代を見送り、はじめが美雪に尋ねる。
「そう言えば美雪、あたしが昨日頼んどいた人形と楽器の大きさ、測っといてくれた？」
「あ、そうそう！渡そうと思ってたの。はい、これ。ちゃんと測っといたよ。」
「サンキュ。」
はじめが預けておいたメモ帳とボールペン、メジャーを美雪がポーチから取り出して差し出す。
「え～と、〝コントラバスのイワン〟が２０ｃｍ、〝チェロのエミール〟が３０ｃｍ、〝ビオラのオリガ〟と〝第２バイオリンのターニャ〟が４０ｃｍ、最後に〝第１バイオリンのコンスタンチン〟が５０ｃｍ…。でも、楽器は全部２０ｃｍ……。」
「あ、それあたしも不思議だったの！だからどの人形がどの楽器だったかなって余計にこんがらがるのよね。」
「つもしかして……！」
先程、幽月（ゆづき）から聞いた情報が頭をよぎる。
『このビオラは、６５から６６ｃｍでバイオリンよりも少し大きいの。因みに、バイオリンは６０ｃｍ、チェロになるとグッと大きくて１２０ｃｍ、最低音を担当するコントラバスに至っては１８０ｃｍから２ｍもあるわ。』
バッ…！
カリカリカリ…
暖炉の上にメモ帳を置き、思い付いた事を書き綴る。
数分間集中していたはじめだったが、ピタリ、と動きを止めて呟いた。
「そういう事…！」
「はじめちゃん？何か分かったの？」
「暗号が解けたよ。」
「?!ホントですか?!!」
「うん、それと〝第２の遺書〟の隠し場所もね…。犯人も見当は付いてるんだけど……。」

「ええ?!」
「ウソ?!本当、はじめちゃん!?」
「ただ、分からない事も多いんだ。動機と、わざわざ人形を見立てに使った理由もさっぱり…。」
「でも凄いですよ!!流石先輩ですね!!!」
佐木が興奮して喜ぶが、全てを解き明かす事が出来た訳では無い為か、はじめの反応は鈍い。
「佐木、もう1回お前のビデオ最初から見せてくれる?出来ればあのプレイヤー使って。記憶を整理させときたくて…。」
「あ、はい!!」
暗号が解けた、というはじめに興奮していた佐木だったが、部屋に設置されたテレビとDVDプレイヤーを指差すはじめに意識を切り替えてバタバタと準備を始めた。
「先輩、どうぞ!」
「サンキュ。」
もう1度、館に着いた当初からの映像を最初から見返す。
館の正面、候補者たちとの初対面、5体のロシア人形、と順に見ていった時、はじめがハッと目を見開く。
「雨……?!」
「え?ああ、2回目のDVDが公開される少し前に急に降ってきた時の映像っスね。」
ちょうどはじめが空腹と低血糖でフラフラになっている時ではじめには記憶に無かったが、その時振り出した雨を佐木のビデオはしっかりと捉えていた。
降り出した雨と、消えた人形たち。そして見立てられた遺体。
バラバラだったパズルのピースが組み上がったかのように、はじめの頭の中で明確な形を作っていく。
「そうか…。これで全てが繋がった……!」
「え、分かったの?!」
「ホントですか?!先輩!!」
「ああ、動機はまだ確証は無いし、細かいところが不明瞭だけど、それ

以外は大体ね…。」
そして、恐らく次に狙われるのは…。
（ちょっと仕掛けてみるか…。）
〝協力〟が得られるかどうかは微妙だが、可能性が無い訳ではない。
それに、1つ確かめなくてはいけない事がある。
「ちょっと考えたい事と確かめたい事があるから、部屋に戻るけど夕食には行くから気にしなくて良いよ。お前らは2人一緒に行動するか、部屋に籠るかしといた方が良い。」
「え?!ちょっと、はじめちゃん?!」
言い置いてさっさと部屋を出て行くはじめに、美雪が驚いた声を上げるが、はじめは振り返らずに進む。
（上手くいくと良いんだけど……。）
不安はあるが、コレが1番確実かつ安全な方法である。
溜息を吐きながらも、はじめは足を止めなかった。

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ９

美雪たちと別れたはじめは、フロントのキーストッカーの前にいた。

ジャラ…

（何だろ…。何かが引っ掛かるんだよな……。）

キーストッカーに保管されているマスターキーを弄りながら、はじめが最後に残る〝違和感〟の正体を探ろうと思考を巡らせる。

山之内恒聖の遺した暗号の謎は解け、遺書の在処も分かった。

犯人と〝見立て〟の理由、そして恐らく次に狙われる相手も検討が付いている。

しかし、最後に残された〝違和感〟。それがこのマスターキーだった。

この、丸にＵ字がくっついたような特徴的な形をしたキーリングと、マスターキーを括っているワイヤー入りの紐。

初めて見た時から、何かが引っ掛かっている。はじめの、これまで様々な事件と遭遇してきた事により磨かれた〝嗅覚〟が、何かを訴えているのだ。

まして、それを保管するキーストッカーに合鍵が存在しないと聞けば尚の事。

（これだけ〝トリック〟に拘る奇術師が、鍵を失した時点で成立しなくなるような〝仕掛け〟を作る…？）

奇術の１つに、金属で出来たリングを繋げる、というものがある。あの類の奇術は、大抵リング本体にそうとは分からないように切れ目が入っている。切れ目の存在を悟られないように如何にスムーズにリングを繋げ、再びバラバラにするのかは奇術師の腕の見せ所だが、このマスターキーも、同様の〝トリック〟が仕掛けられているのかもしれないとも思ったのだ。しかし、こうして手に触れてまじまじと見ても、そうした〝トリック〟は見付からない。

はじめ自身、そこらの奇術師顔負けの奇術の技術を持っている。まして、〝トリック〟を見抜くのは得意中の得意と言っても良い。その

はじめがこれだけの至近距離で観察し、尚且つ弄(いじ)っていても見付けられない以上、〝トリック〟自体存在しないという事なのか…。あるいは、

（高遠(たかとお)なら分かるか…？）

人格的な難はあるが、奇術師(マジシャン)としての技量は超一流とも言えるあの男ならば、その奇術師(マジシャン)としての天才的な発想で何か思い付くかもしれない。

しかし、出来る事ならばあの男を頼るような真似はしたくなかった。

仮にはじめが尋ねても、素直に教えるかも怪しいところではあるし。

はじめが意識を思考の海に沈めかけた時だった。

「はじめさん？そんなところで一体何をしているんです？」

「！白馬か…。お前こそ1人なのか？犬飼クンはどうしたんだよ？」

はじめの姿を見付け、階段を下りて来た白馬に目を瞬かせる。

出来るだけ一緒に行動しろ、というはじめの忠告を受けてから、決して犬飼を1人にさせなかった白馬が1人で出歩くのは、なんというからしくない。

出逢ってから日が浅く、付き合いらしい付き合いもまだ無いはじめだったが、白馬が友人思いであり、〝探偵〟としての責任感を持っているのは知っている。

他の候補者たちと集まって暗号解読にでも勤しんでいるのだろうか？

しかし、それならば〝助っ人〟として同行した白馬が別行動なのはおかしい。

はじめがつらつらと考えていると、白馬が苦笑する。

「犬飼くんなら部屋にいます。絶対に1人で出歩かないし、他の人間を部屋に入れたりしないからしばらく1人にして欲しいと言われて…。」

「なるほどね…。」

確かに、普通の高校生にとってはかなりショックだっただろう。自分の身にも危険が迫っているかもしれないとなれば尚の事。パニックを起こしていないだけ、冷静な方だった。

「彼がそんな状態だったので、最初は僕も部屋にいたんですが、どうにも行き詰まってしまって…。気分転換も兼ねて館の中を見回っていたんです。」

そんな中ではじめを見付けたので声をかけたらしい。

「はじめさんはここで何をなさっていたんですか？」

「ああ、ちょっと気になる事があってさ…。ちょうど良かった。白馬、お前の意見も聞きたかったんだ。」

思考が行き詰まった時は第三者の意見を聞くに限る。自身とは異なる視点での意見が、事件解決への糸口になった事は1度や2度ではない。

まして、彼の聡明さはこの短期間でもはじめも知るところである。意見を求めるのにこれ以上の相手はいなかった。

「確かに、この館を造らせたという、ユーリ・イワノフの名前なら僕も聞いた事があります。死後30年以上が経っても天才として名が挙げられる、ヨーロッパでも指折りの奇術師…。彼のマジックは素晴らしくも全てが遊び心に溢れていたと…。彼の〝奇術王〟の仕掛けた〝最期のマジック〟にしては、あまりにもお粗末過ぎる…。」

はじめの抱く〝違和感〟について説明すれば、白馬にも思うところはあったようだった。

「でしょ？で、このマスターキーのキーリング、何か気になってさ。ほら、切れ目の付いたリングを繋げる奇術あるだろ？あのリングみたいに〝トリック〟でマスターキーが簡単に外せるようになってるんじゃないかと思ったんだけど…。」

「見付からなかったと？」

「うん。で、ちょっと行き詰まっちゃったところに白馬がちょうど良く来たんだよ。」

「しかし、はじめさんでも分からなかったとなると…。僕もそれほど奇術に詳しい訳ではないですし…。せめて、外部と連絡が取れれば

1人〝専門家〟に心当たりがあるのですが…。」
「〝専門家〟？」
プロの奇術師にあてでもあるのだろうか？
「同級生に1人、プロ顔負けの奇術師がいるんですよ。彼なら、もしかしたら何か掴めるかもしれませんが…。」
「へぇ、お前がそこまで言うなんて、相当凄いんだろうな、その同級生。」
「ええ、見ていて飽きませんよ。…色々な意味で。」
どこか含みのある笑顔を見せる白馬に小首を傾げたはじめだったが、今優先すべきはこちらだと意識を切り替える。
「白馬も分かんないって事は、やっぱり何の仕掛けも無いのか…？」
ジャラ…
「そう言えば、このマスターキーを括っている紐…。」
白馬がふと思い当たったようにマスターキーを弄る。
「？何か思い付いた？」
「いえ、この紐はどうやってリングに通したんでしょう？」
「？そりゃ、1度リングを切って紐を通した後で溶接したとか……？」
「僕も最初はそう思ったんですが、見てください。」
ジャラ…
そう言って再びマスターキーを弄る白馬の手元を覗き込む。
「ほら、紐の輪よりも鍵の方が長くて、普通ならこの形に括れないんですよ…。溶接して通したのだとしても、鍵より短い輪にどうやって鍵を通したんでしょうか？」
「確かに…！言われてみれば……。」
単純に、普通に外せないならば溶接、と考えていたが言われてみればその通りである。紐の長さが足りなければ、紐を通せる筈がない。本来ならば。
しかし、ここは奇術師が作ったトリックだらけの館。
「やっぱり、このマスターキー自体に何らかの〝トリック〟が隠されてるみたいだね…。」

「ええ、それは間違いありません。」
２人の天才が〝違和感〟を〝確信〟に変えるには充分だった。
「さて、問題はどうやってこのキーリングからマスターキーを取り外すのか、ですが…。やはり、この特徴的なキーリングの形が重要なんじゃないでしょうか。」
「あたしもそう思う。最初に〝違和感〟を覚えたきっかけもこの形だったしね。」
丸にＵ字がくっついたような、特徴的な形。これが〝鍵〟になる筈(はず)だ。
そう結論付け、もう１度良く見てみようとはじめがキーストッカーに保管されたままのキーリングを手に取る。
さて、どう攻略すべきか、とはじめが思考を巡らせた時、白馬が何気無く呟いた。
「まるで知恵の輪のようですね…。」
「?!」
その言葉に、はじめがハッとする。
（もしかして……！）
ジャラ…！
リングの輪っか部分に鍵を紐ごと寄せ、１本だけＵ字型の部分に残す。
１本だけ残した、鍵を結んだ紐をＵ字型の部分に押し広げる。その状態で鍵をＵ字型の部分に上から下に通せば…、
「外れた…！」
チャラリ、といとも簡単にリングから鍵を外す事が出来た。
やはり、この厳重そうに見えるリングはフェイク。奇術師(マジシャン)が作ったというだけあって、これは一種のパズルになっているらしい。
「?!こんなに簡単に……！」
白馬の驚愕する声を聞きながら、はじめは背筋にヒヤリとしたものが伝うのを感じていた。
（あ、危なかった……！）
もし、このマスターキーの秘密に気付くのがもう少し遅かったら

……。確実にもう1人の犠牲者が出ていた筈(はず)だ。
だが、これで確かめたかった事は明らかになった。
「謎は…、全て解けた……！」
後は〝仕掛ける〟だけだ。
その為にもまずは…、
「白馬。ちょっと手伝って欲しい事があるんだけど。」
不思議そうな顔を見せる白馬に、はじめは不敵な笑みを浮かべて見せた。
――――1時間後、はじめは自室に戻っていた。
コンコンコンッ…！
「高遠(たかとお)！ちょっと話があるんだけど。」
マジックミラーをノックし、マジックミラーの向こうにいる筈(はず)の高遠を呼ぶ。
「――――何です？あなたからそんな事を言い出すのは珍しい…。」
バサリ、と目隠しの為にかけられていたシーツが取り払われ、マジックミラーの前に仮面を外した高遠が現れる。
「ちょっと頼みがある。」
「それはそれは…。」
唐突な、予想外のはじめの言葉に、高遠(たかとお)が面白そうに微笑む。
「珍しい事ですね。金田一さん、あなたが〝犯罪者〟にそんな事を言うとは……。」
クツクツと笑みを漏らす高遠(たかとお)に、はじめが顔を顰(しか)める。
「真面目な話なんだけど…。」
「これは失礼。あなたとはなかなかに長い付き合いですが、こうして〝舞台〟以外で面と向かう事など、そうありませんからね…。それで、一体どうしたんです？」
面白そうに笑みを浮かべたままの高遠(たかとお)に、はじめが静かに切り出した――――。
――――その夜。
静まりかえった深夜の廊下を歩く人影があった。

とある部屋の前で止まり、おもむろにポケットから取り出した革の手袋を嵌め、同じく取り出したワイヤーを左手に巻き付ける。
そして、取り出した鍵で扉の施錠を解除する。
ガチャ…
キイィ……！
照明が落とされ、ピッチリとカーテンが閉じられた真っ暗な部屋へと足を踏み入れた途端――――、
パッ…！
眩い光が〝侵入者〟を照らし出す。
「?!」
予想だにしていなかった展開に、咄嗟に腕をかざして目を庇った〝侵入者〟が息を呑んだ。
「待ってたよ。あんたがここに来るのをずっとね…。」
懐中電灯で〝侵入者〟を照らし出したはじめに、〝侵入者〟が叫ぶ。
「ど、どうしてここに…!?どうして、」
「〝どうして薬が効いていない〟のか、ですか？」
隣から放たれた、先読みするかのような言葉に、〝侵入者〟はバッと振り返った。
「なっ?!あなたまで……。」
いつの間にか〝侵入者〟の側に忍び寄っていた白馬に、〝侵入者〟が驚愕の声を上げる。
「僕だけではありませんよ。」
パチッ…！
「…!?」
その言葉と同時に点けられた部屋の電気に、事態を把握した〝侵入者〟が息を呑んだ。懐中電灯の明かりを消すはじめの周囲には、この館に集った全ての人間が揃っていた。
「ど、どういう事ですかこれは…?!ま、まさか…!?」
目の前に現実を突き付けられても尚、信じられないとばかりに狼狽える田代に、はじめが静かに口を開く。

「そのまさかです。神明(じんめい)さんと宝田さんを殺した犯人は――――、」

強張った表情のまま、黙り込む〝侵入者〟に向け、はじめが断罪するかのように宣言した。

「桐江想子(きりえそうこ)!!あんただよ!!!」

露西亜人形殺人事件　Ｆｉｌｅ１０

「桐江想子!!あんたがこの殺人事件の犯人、〝指揮者〟だ!!!」
はじめの言葉に、決定的な現場を抑えられ、もはや言い逃れの出来なくなった〝侵入者〟―桐江が唇を噛んで俯く。
「でも、どうして桐江さんが…?彼女は遺産相続には関係無い筈でしょう…?」
この部屋を割り当てられ、危うく3番目の標的となりかけた幽月がどこか呆然とした様子で口を開いた。
「想子さんが、まさか……。」
そして、以前から彼女と親しくしていた犬飼もまた、信じられない様子で続ける。
「……ええ、そうよ…!確かにあたしは幽月さんを殺そうとしてこの部屋に侵入したわ!それは認める…!でもそれは、その人が山之内先生のトリックの答えを挿絵に書き込んで、作品を台無しにしたのがずっと許せなかったからよ!神明先生と宝田さんを殺したのはあたしじゃないわ!!だって動機が無いもの!」
周囲からの〝信じられない〟という視線の中、俯けていた顔を上げ、幽月を睨み付けながら桐江が叫ぶ。
現場を抑えられた今夜の一件以外は自分ではない、と否認する彼女に、はじめがそれを否定した。
「…いや、違うね。あんたは遺産目的で神明先生と宝田さんを殺し、今夜幽月さんを殺そうとしたんだ。」
「い、遺産目的ったって、桐江さんの名前は候補者の中には入ってなかったじゃない…!」
梅園がはじめの推理の矛盾点を付くが、それにフォローを入れたのはいつの間にか入口から移動し、はじめの隣に立っていた白馬だった。
「いえ、それがそうとも言えないようなんです。これを見てください。」
白馬が内ポケットから取り出し、周囲に掲げて見せた封筒の宛名に

は、〝遺書　山之内恒聖〟とはっきり記されていた。
「そ、それは…!?」
「まさか、暗号が解けたって言うの?!」
封筒の宛名を見たはじめと白馬、〝スカーレット・ローゼス〟以外の人間が驚愕に目を見開いた。
「ちょ、ちょっと見せてください…!」
驚愕のあまり躓きかけながらも進み出た有頭に、白馬が素直に封筒を手渡す。
「ま、間違いありません…!山之内先生の本物の遺言書です!!白馬さん、これを一体どこで…?!」
「どうやって暗号を解いたんです!?」
有頭と犬飼の悲鳴じみた声に、再びはじめが口を開いた。
「遺言書のあった場所を説明する為には、まずは暗号の解き方について解説する必要があります。この暗号を解く〝鍵〟は、５つの人形の大きさにあったんです。」
「大きさ、ですか?」
「そう、大きさ。」
怪訝そうな犬飼に頷きを返し、続ける。
「ただし、これはそのままの大きさでは意味を成しません。ある法則に従って、人形を実際の人間の縮尺に戻してやる必要があるんです。」
「実際の人間の縮尺…?」
今度は幽月が首を傾げた。
「あたしが最初にこの暗号で引っ掛かったのは〝楽団は前から順に首を刈られた〟の一文です。〝２番の子の首を５番目の子の首の右に並べてみてごらん〟の一文から察するに、この暗号は〝前から順に〟の通りに小さい人形の順に頭文字を取っていく、という方法で間違い無い筈…。でも、実際に１番小さいイワン、エミール、オリガ、ターニャ、コンスタンチンの順に頭文字を取っても出来る文字は〝ＩＥＯＴＫ〟。２番目のＥを５番目のＫに並べても〝ＫＥ〟、つまりローマ字の〝け〟になるだけで、〝数合わせ〟にも〝楽しいリズム〟にもか

からない。」
「そうよ！・そこまではあたしも考えてたわ！」
はじめの推理に、梅園が声を上げる。
「ええ、皆さんここで引っ掛かったと思います。でも、幽月さんの話を聞いて、その法則に気付いたんです。」
「え？・あたし？・」
予想外のところで名前を出され、驚きの声を上げた幽月に頷きを返し、続ける。
「人形の大きさが大きなヒントとして機能する筈なのに、第２バイオリンのターニャとビオラのオリガが同じ４０ｃｍというのも気になってはいたんですが、幽月さんの話が、重要なヒントを与えてくれました。」
「前置きは良いから早く教えてよ！・なんなのよ、そのヒントって？！」
しびれを切らした梅園が叫ぶが、はじめの言葉で考え込むような仕草を見せていた幽月がはっと顔を上げた。
「まさか、楽器？！」
「その通り。」
昼間のはじめたちとのやり取りを思い出した幽月に、はじめが肯定する。
「楽器、ですか…？・」
いまいちピンときていない田代が首を傾げるのを見て、はじめが説明した。
「昼間、幽月さんが教えてくれたんですよ。バイオリンとビオラの違いをね…。あたしは楽器に縁があるような生活をしてなかったんで、生憎知らなかったんですけど、ビオラの方がバイオリンよりも５～６ｃｍ大きいんでしょ？・」
「それが一体どうだっていうのよ？！」
「あ、人形が持っている楽器は全部同じ大きさだ…！・もしかして……？！」
梅園とは対照的に、犬飼が何かに感付く。
「そう、この暗号はそれぞれの人形が持っている楽器の大きさに合

わせ、人形の身長を実際の人間の縮尺に戻す必要があるんです。このやり方で最も小さいイワンで考えると、イワンの身長も楽器も同じ２０ｃｍだから、イワンを本来のコントラバスの大きさである２ｍに直す事が出来る。」

「そっか…！それなら、人形の大きさが全く変わってくるわ……！」

梅園が納得いったらしい事を確認し、はじめが続ける。

「同じ法則で、チェロのエミールは１８０ｃｍ、ビオラのオリガは１３０ｃｍ、第２バイオリンのターニャは１２０ｃｍ、第１バイオリンのコンスタンチンは１５０ｃｍという事が分かります。そして、この５つの人形を背の低い順に並べると、正しい順番はターニャ、オリガ、コンスタンチン、エミール、イワンとなる。その頭文字を拾えば、表れるのは〝ＴＯＫＥＩ〟。」

「そ、そうか、〝時計〟!!」

「この屋敷にある時計は、塔の時計ただ１つだわ！」

「じゃ、じゃあ時計に遺言書が隠されていたって言うの?!」

犬飼と幽月（ゆづき）、梅園が次々に驚愕の声を上げるが、それに否やを上げたのが有頭（ありとう）と田代だった。

「まさか…！この相続戦が始まる前に、正解な時間を把握する為に、田代さんに時計を合わせて頂いています…！あの時計はわずかな足場の他は巨大な文字盤と針しか無いんです、隠せるような場所なんて……！」

「そ、その通りでございます…！私が３日前に時計を合わせた時には、そのようなものはありませんでした…！」

２人の主張に対して、説明を引き継いだのは白馬だった。

「田代さんが発見出来なかったのも無理はありませんよ…。この暗号で２番目に重要なのは、暗号文に示された時間通りに行動する事なんです。」

「あ、暗号文に示された時間…？」

「それは一体…？」

「〝さあお次は数合わせ。２番の子の首を５番目の子の首に並べてみてごらん。〟この言葉通りに、オリガのＯを５番目のイワンのＩの

隣に並べると、何が出てくるのか分かるかい？犬飼くん。」
白馬の質問に、一瞬面食らった犬飼だったが、彼自身もミステリーマニアであり、殺人事件を解決した事もある頭脳の持ち主である。すぐに答えは導き出された。
「そうか、数字の〝１０〟……!!」
「その通り。」
はっと顔を上げた犬飼に、白馬が頷きを返した。
「数字の〝１０〟っていう事は、まさか１０時に時計に行け、という事ですか？」
「そう。これを裏付けるのが暗号文の最後の一文、〝楽しいリズムの始まり始まり〟。つまりこの暗号は、１０時の鐘が鳴っている中で時計の文字盤の前にいれば遺書が手に入る、そういう意味だったんだ。」
佐木の疑問に頷きながら、白馬が更に補足する。
「この遺書は、今夜…、まぁ日付的にはもう〝昨日〟ですけどね…。夜１０時に文字盤まで降り、手に入れたものです。白馬と、〝スカーレット・ローゼス〟さんがその証人ですよ。」
はじめのその言葉に、それまではじめの推理を興味深そうに眺めていた〝スカーレット・ローゼス〟も頷いた。
「…そして、あたしの推理が正しければ桐江想子（きりえそうこ）、あんたを殺人へと駆り立てた〝動機〟がその遺書には書いてある筈（はず）だ。」
「え…?!」
「山之内先生の遺書に〝動機〟が…!?」
はじめの宣言にあからさまに顔色の変わった桐江（きりえ）がはじめから目を逸らす。
「有頭（ありとう）さん、その遺書を読み上げて頂けませんか？はじめさんの推理と、僕自身の推察が正しければその遺書に〝答え〟が隠されている筈（はず）です。」
「は、はい…！それでは読み上げます……!!」
白馬の言葉に、有頭（ありとう）が遺書の封を切り、広げる。
「え～…。〝私、山之内恒聖（こうせい）の出題した暗号の謎を解き明かし、この

第2の遺書の在りかを突き止めた人間こそが我が遺産を手にする事になる。相続資格は5名の資格者、〝神明忠治〟〝梅園薫〟〝幽月〟〝来夢〟〝宝田光二〟〝犬飼高志〟に限られる。…ただし、〝」

そこまで読み上げたところで、有頭がはっと息を呑んだ。

「〝…ただし、暗号解読の期限になった時点でこれら5名の有資格者が1人も館にいなかった場合は――、資格者に限らず暗号解読者本人に譲るものとする！〟」

「なっ?!」

「なんですって…!?」

「それじゃ、もしあたしたちが全員死んだとしたら……！」

犬飼と梅園が息を呑み、幽月が核心に迫る。

「そう…。5人の資格者が期限を迎えるまでに館内から全員存在しなくなった時点で、遺産の相続権はこの第2の遺書を見付けた者へと委ねられる。…桐江想子、5人の資格者たちよりも先にこの遺書を見付けたあんたは、5人がいなくなれば遺産を掠め取る事が可能であると知った。それを知った時、あんたの心に悪魔が囁いた…。5人の資格者たちを期限までに全員殺し、何食わぬ顔で暗号が解けたように見せかけ、遺書を見付けてみせれば数十億の遺産は全てあんたが受け取る事になる、ってね。」

鮮やかさを増したはじめの紅茶色の瞳が、まるで断罪するかのように桐江を射抜く。

「しかし、運命の悪戯か、あんたにとっては不運にも〝2つの偶然〟が重なってしまったんだ。その〝偶然〟こそが、あたしに大きなヒントを与えてくれた。」

「〝2つの偶然〟、ですか…?」

「どういう事?はじめちゃん。」

佐木と美雪が尋ねるが、はじめは真っ直ぐに桐江だけを見据えていた。

「1つ目は雨。あんたが遺書を盗み見たのは、恐らくは5人の資格者たちが山之内恒聖からの悪趣味なビデオレターを見ている時だ。多分、10時の鐘の音と共に作動する仕掛けだろうから、あんたはそ

の少し前から時計の文字盤の前で待機していた筈(はず)だ。しかし、間の悪い事にちょうどその頃から雨が降り出した。あたしはその時はそれどころじゃなくて気が付かなかったけど、佐木のビデオにはその雨がはっきりと映っていた。あんたは焦った筈(はず)…。鐘が鳴るにはまだ時間があり、しかしそのまま外で待っていたらあっという間にびしょ濡れになってしまう。夕食の時間も迫る中、髪や服が濡れているのを他の人間に見られれば怪しまれる事は必至…。かといって、一旦部屋の中に戻る事も難しかった。文字盤まで降りるには一切の明かりの無い、長い梯子(はしご)を昇り降りしなくてはいけない。微妙なタイミングが必要な中、そんな危険な足場を素早く往復するのはかなり困難だ。場合によっては命の危険もあり得る…。だからこそ、あんたは時計の針を進めるという選択をしたんだ。この館に時計は〝時計の塔〟の大時計が1つだけ…。後でこっそり戻しておけば問題無いと踏んだんだろうけど、この時あたしと白馬は自分の時計で時間を確認して大時計が5分程度進んでいるのに気が付いた…。これが2つ目の偶然だ。」

「っ…!」

はじめの推理に、桐江(きりえ)が唇を噛んで俯く。

「そして、あんたはこの時にたった1つ、しかし重大なミスを犯してしまった。」

「ミス?」

「そう…。大時計への唯一の出入り口、人形の後ろの窓を開けっ放しにしてしまった事だ!」

佐木の問いかけに頷きながらも、はじめが続ける。

「時計の針を5分進めたものの、遺書を取り出して長い梯子(はしご)を昇り切り、部屋の中に戻る頃には雨は激しく、風も強くなっていた。そのせいで、窓から激しく雨が吹き込み、窓際に置かれていた5体の人形は全てびしょ濡れになってしまったんだ。」

「!そうか…!!あの〝見立て〟の理由は……!」

「そうだよ。神明(じんめい)さんと宝田さんが暗号に〝見立て〟られたのは、この致命的なまでの失敗をカバーする為の完全なアドリブだったんだ!びしょ濡れの人形をそのままにしていれば、誰かが窓を開けっ放

しにしていた事がすぐに分かり、〝大時計〟への決定的なヒントになってしまう…。濡れた窓際や床は拭いてしまえば分からないだろうが、人形の服はそうはいかない。あんたは全ての人形を持ち去り、服が乾いた順に死体と一緒に発見させたんだ。」

「な、なるほど…。あたかも暗号文になぞらえ、人形の背が低い順に殺人が行われているように錯覚していたけど、実際には小さい人形程早く服が乾き、乾いた人形のパートの人間が順に狙われていた…。それだけの理由だったんですね？」

はじめの推理に、佐木が納得したように頷く。

「そ、そうか…！だから、その日のうちに殺してしまった神明先生の場合は、濡れている事がバレないようにバスタブに浮かべられていたのか……！」

「その通り。付け加えるなら、双子のように背の高さが同じオリガとターニャの場合は厚手の冬服を着てるターニャより、薄手の軽装のオリガの方が乾くのが早かった。今夜幽月さんが狙われたのも、そんな理由だった訳だ。」

犬飼の言葉に補足したはじめが、更に続ける。

「…そして、この時濡れてしまったものはもう1つある。」

「もう1つ…？人形の他に一体何が？」

白馬が驚いたようにはじめを振り返った。

「スタンドだよ。」

「スタンド…？」

その言葉に、桐江がはっと息を呑む。

「佐木のビデオにしっかり映ってたよ…。最初にあたしたちが人形を見た時と、神明さんの遺体を発見した後では人形の側にあったスタンドの傘が違っていた。…最初のスタンドの傘は、あんたの部屋にあったよ。どこか間違ってるところがある？〝想子さん〟。」

「…いいえ。分かったわ…。全て認めてやるわよ…！ーーーそうよ、あたしが殺ったのよ!!あたしがあの2人を殺した殺人鬼、〝指揮者〟よ!!!」

はじめの問いかけに1つ溜め息を吐いた桐江が、ばっと顔を上げ、

彼女を睨み付けた。そして、周囲を見渡し、その豹変ぶりに唖然としている犬飼や田代らに嘲笑を浮かべる。
「あら、何よ？その顔…。まさか、あたしがホントに純情な田舎者丸出しのいかにもメイドの小娘だとでも思ってた？残念でした！言っとくけど、あたしはねぇ…！こう見えてもあんたらなんかより、ずっと修羅場潜ってんのよ！」
あははは！と嘲りも露に嗤う桐江に、耐え切れなくなった犬飼がすがり付くように尋ねる。
「そ、想子さん何故…！なんでこんな事、たかが金の為に殺人なんて……!?」
「たかが金!?ハッ！そんな事が言えるのは、あんたがこれまで苦労知らずの臑齧りだったからよ！誰1人身寄りのいない、あたしみたいな女にとってはお金が全てなんだよ!!お金さえあればお腹を空かせたりしないで済む！手をかじかませて働いたり、嫌な男に媚びを売って屈辱的な事をやらなくったって生きていける！綺麗な服だって買えるし、住む所だって困らないーーーーーー!!そうよ！山之内の莫大な遺産があれば、こんなお城みたいな屋敷で使用人を抱えて、お姫様みたいな生活だって出来る!!金！金！金よっ!!あたしは金が欲しかったの！山之内の遺した何十億という金が……!!」
桐江の、魂が込められたかのような悲痛なまでの叫びに、その場の者たちは皆気圧される。
しかし、そこに淡々とした様子で告げられたはじめの一言に、桐江でさえも驚愕に目を見開いた。
「まぁ、気持ちは分からなくも無い…。共感は出来ないけどね…。山之内が築いた財産は、本来は想子さん。あんたが受け取るべきだと言っても過言じゃなかったんだから。」
「!?あんた……?!」

「まぁ、気持ちは分からなくも無い…。共感は出来ないけどね…。山之内が築いた財産は、本来は想子さん。あんたが受け取るべきだと言っても過言じゃなかったんだから。」
「!?あんた……?!」
　はじめの意味深な台詞に、桐江が目を見開いた。
「!?はじめさん…?それは一体どういう……?」
「山之内先生の財産が、本当は想子さんのものだったって…?!」
　白馬と犬飼が驚愕も露わに声を上げるが、はじめはそれに構う事無く続ける。
「あんたが殺人という禁忌を犯しても尚、遺産を手に入れようと固執したのには訳がある。山之内が手に入れた財産は全て、本来ならば彼自身が手に入れるべきものではなかったものだからだ。より正確に言えば、本来手に入れるべき人物は他にいた。その人物の名前は白井雄一郎!!桐江、……いや白井想子、あんたの父親だ!!!」
「な?!」
「白井雄一郎だって……?!」
「想子さんの父親…!?」
「い、一体どういう事ですか!?だ、旦那様の財産は本来は桐江くんの父親のものだったと…?!」
　驚愕の声が上がる中、はじめが自身の足元に置いていた紙袋からある物を取り出す。
「これを見てください。…これは、山之内恒聖の書斎の、隠し金庫から見付けたものです。」
　そう言って周囲が見やすいように掲げられたそれは、大きなクリップで纏められた、原稿用紙の束。
　その表紙に書かれていたタイトルに、その場にいた者たちは皆目を疑った。
「〝露西亜人形殺人事件〟?!」
「で、でも作者の名前は山之内先生じゃないわ…!!」

「そう。これは山之内恒聖ではなく、この露西亜館の以前の主、白井雄一郎が書いたものだ。」
「父が、小説を書いていた……?!」
はじめの断言に、桐江が呆然とした様子で呟く。
「嘘でしょ…?って事はまさか先生……!」
その表紙と作者名に、頭に浮かんだ疑惑を振り払おうと否定する者たちの期待を裏切るように、はじめが告げる。
「そう、この小説は正真正銘桐江想子の父、白井雄一郎が書き上げたものだ。山之内恒聖が発表した〝露西亜人形殺人事件〟は、白井が考えたトリックと大まかなストーリーをそっくりそのまま盗用して書き上げられたものだったんだよ!」
「な、なんですって……!?」
「まさか、そんな事が……!」
「嘘……!」
特に、日頃山之内と交流していた3人の候補者たちが言葉を失う。
「白馬!」
「は、はい!!」
一瞬呆けていた白馬だったが、はじめの呼びかけに反応して彼女に目を向ける。
「お前、確か山之内の本を読んでいたよな?」
「は、はい。勿論……。」
「その時、疑問に思わなかったか?発想豊かな奇想天外なトリックと、伏線もまるでなっていない凡人そのものの何の捻りも無い文章に。」
「え、ええ…。確かに…。最初はトリックは別の人間が考えているのではないかと思った位です。…でも、まさか…。」
「盗作とは思わなかった?」
「はい…。恥ずかしながら……。」
「別に恥じる必要は無いよ。これまで誰も、出版社の人間や読者は勿論、側で山之内に仕えていた田代さんでさえ誰も気付かなかったんだから。」
白馬に軽い慰めの言葉をかけ、はじめが言葉を失っている桐江へと

視線を戻す。
「この原稿と一緒に、もう1つ見付けた物がある。…白井雄一郎の日記だよ。」
「?!父の日記ですって……!?」
そう言ってはじめが先程の紙袋から取り出したのは、1冊の日記帳。
「恐らく、山之内恒聖もこの原稿と日記の存在については知らなかった筈だ。隠し金庫そのものがかなり捻った隠され方をしてたからね…。あたしも〝ローゼス〟さんが気付かなかったら分からなかったよ。」
そう、チラリと目線を送ったはじめに、それまで静かに佇んでいた〝スカーレット・ローゼス〟がニヤリと口角を上げる。
はじめのその言葉と、〝スカーレット・ローゼス〟の様子にはじめの他に唯一その正体を知る白馬が複雑そうな顔を見せたが、はじめはそれに気付かない。
「…悪いとは思ったけど、その日記を読ませてもらいました。お陰で、あたしの疑惑を確信へと変える事が出来た…。」
「疑惑、ですか?」
衝撃から冷めやらない一同に代わり、白馬が代表で口を開く。
「元々、あたしはここに来る以前から山之内の〝人格者〟という評判について、疑問を感じていた…。その想いはこの屋敷に来て益々強くなったよ。幽月さんは何となく感じていたようですが、他の皆さんは疑問に感じませんでしたか?数十億とも評される遺産の相続者はたった1人。しかも、山之内恒聖はそれぞれ5人の候補者が経済的に困窮している事を調べ上げ、ご丁寧にも悪趣味なビデオレターまで遺していた…。何故そんな事をする必要があったんだ?経済的に困窮している事が分かっているなら、5人平等に分けるように指示したって良かった筈だ。……本当に遺産を譲る気があったのならね。」
「?!それはどういう…?」
「本当は譲る気が無かったとしたら…?」

「「「「?!!!」」」」

はじめの言葉に、その場の者たちに少なくない動揺が走る。

「これを説明するには、最初から、山之内恒聖と白井雄一郎との出逢いから、全てを説明しなくちゃいけない…。」

「全ての始まりは、山之内恒聖の学生時代に遡る…。当時、山之内恒聖と想子さんの父親—白井雄一郎は学生時代、同じミステリー研究会に所属していた親しい友人だった。お互い小説家を志していたという事もあり、当時はかなり親しい間柄だったらしい。」

はじめの口から語られる、知られざるエピソードにその場の者たちは固唾を呑む。

「しかし、卒業後2人がそれぞれ進んだ道はまるで異なるものだった。小説家を志し、アルバイトでその日暮らしを送っていた山之内に対し、父親の後を継いで貿易商として成功した白井雄一郎はかなり裕福な生活を送っていたらしい。そして、そのうちに白井は結婚し、1人の女の子をもうけた。——想子さん、あんたの事だね？」

「——ええ、そうよ……。」

「残念ながら、妻となった女性は若くして亡くなってしまったが、貿易商としての成功と裕福な暮らしと可愛い子ども、白井は一見順風満帆な生活を送っていた…。しかし、彼は学生時代から抱いていた小説家になるという夢を捨て切れず、思い付いたトリックやストーリーを1冊のノートに纏めていたらしい。この露西亜館を購入したのもこの頃だ。この館内に随所に隠されたパズルやトリックがその心を擽ったようだね…。——そんな中、この露西亜館に1人の男がやってきた。それが若き日の山之内恒聖だ。」

「や、山之内先生が…？」

思わず口を挟んだ田代に頷きつつも、はじめは構わず続ける。

「山之内は、成功した昔の友人に金の無心に来たんだ。それも、1度や2度じゃなかったらしい。昔の友人、それも特に親しかった相手からの頼みを白井は快く受け入れ、山之内をこの露西亜館へと招き入れていた。どうやら、自分と違って夢を追い続けていた山之内に対しての憧憬もあったらしい。『彼の夢の為に一役買えるのなら、こんなに嬉

しい事は無い』。日記にはそうも書いてあった。――――――そして、白井は何の気無しに見せてしまったんだよ。小説家志望の昔の友人に、自身の考えたトリックやアイデアを纏めたノートをね。」
「で、では先生はその時に〝露西亜人形殺人事件〟のアイデアを盗んだと……?!」
犬飼の言葉にはじめが頷く。
「日記によれば、その時山之内はそのトリックノートを酷評したらしい。『奇想天外なトリックだが、小説には使えない』ってね。その時点で、山之内は恐らくそれらのトリックを盗用する事を思い付いていたんだろう。だからこそ、白井雄一郎がそのトリックを使用した小説を書き上げる前に思い留まらせようとしたんだ。…実際には、その時既に白井は彼自身の処女作〝露西亜人形殺人事件〟を書き上げていたが、山之内のその言葉に出版社への持ち込みを断念したらしい。『自分よりも余程苦労しながら小説を書き上げている彼がそう言うのなら、所詮は素人の浅知恵。とても人様には見せられない。』と書いてあったよ。――――――それこそが、山之内の狙いだとも知らずにね…。そして、それから数ヵ月後に白井は不幸な事故で命を落とした。日記の日付から察するに、彼の死からおよそ半年後、山之内は〝露西亜人形殺人事件〟で鮮烈なデビューを飾った。人のアイデアを完全に盗用する、という恥知らずにも程がある方法で偽りの才能を騙ってね…。そしてこの露西亜館を買い取り、隠されていた白井雄一郎のトリックノートを見付け出し、そのトリックを次々盗用して莫大な財産を築いていった。――――――想子さん、あなたはそれを知ってしまった。」
「……何もかも、お見通しって訳ね…。ええ、その通りよ……!!山之内が書き上げた小説のその全てが、あたしの父が書いたトリックをそっくりそのまま使った盗作だった!!!!あのトリックノートは父の夢そのものだった…!学生時代から少しずつ書き溜めていたトリック、それをいつか自分の手で小説にして発表したい――――――、そんな父の夢をあたしは膝の上で何度も聞いてきたわ!それをあの男は……!!!山之内は父の夢を踏み躙っただけでなく、自分のものとして発表し

たのよ……!!」
桐江の血を吐くような悲痛な叫びに、その場の者たちが皆息を呑む。
はじめでさえ一瞬気圧される中、唯一〝スカーレット・ローゼス〟だけはいっそ不気味な程静かに彼女の姿を見詰めていた。
「父が仕事先のヨーロッパで事故に遭い急死した後、父の会社は色々な人の裏切りに遭い、あっという間に傾いてしまった…。何年かしてこの館も二束三文で人手に渡り、母も兄弟もいないあたしは天涯孤独で施設に送られた――――…。それからは、話したくも無いような人生だったわ。もう食う為にはどんな事でもやったわ！例えば売春まがいの事だってね…！」
ははははは…！と自棄になったように乾いた笑いを洩らす桐江を、犬飼が複雑そうな顔で見詰める。
「今思い出すと、あの頃はそういう自分に対して疑問も抱いてなかった。生きてくだけで精一杯だったし…。小さい頃から1人きりで、その前の短い幸せだった頃の事なんか思い出してる余裕も無かったもの。……そうね…。いっそ、思い出さないままだったら良かったのかもね…。ちょっとした運命の悪戯で、本当は自分のものだった筈の幸福や富や名声を失ってしまった。そんな事に気付かないままなら、人を殺してまで失われたものを取り戻そうとは思わなかった。――――でも、気付いちゃったのよ、あたし……。皮肉な運命の悪戯がもたらした偶然のお陰でね。」
「〝運命の悪戯〟…？」
桐江の笑みがそれまでとは異なる感情を刻む。それに気付いたはじめが問いかけるが、その次の瞬間桐江が浮かべた笑みに、ゾワリと全身が総毛立つのを感じた。
「ねぇ、金田一さん？とうの昔に落としてしまった、大金の詰まった財布を――――。思いもよらない場所で偶然見つけたとしたら、あなたならどうする？拾うでしょ？当然！他に手を伸ばそうとしている連中を――――、押し退けてでも……ね！」
「っ…！」

はじめだけでなく、その場にいた者たちが思わず息を呑んだが、桐江(きりえ)は構わずに切り出した。

「――――そう、あれは…確か2年前。あたしが16になったばかりの時だった……。その頃、あたしは北海道のとある田舎町で場末の安酒場にホステスとして年を偽り、名前もユカリと名乗って勤めていた――――。毎日毎日、安い時給と品の無い酔っ払い親父たちの相手に疲れて、そろそろこの店も潮時かなって思い始めた頃だったわ……。忘れもしないあの夜――――…、外は狂おしく吹雪が舞っていたっけ……。夕方から降り出した大雪のせいで客も来なくて、そろそろ店を閉めようとしていた時だった。ある3人の男が客として来たのは…。」

滔々(とうとう)と語る桐江(きりえ)の表情は苦々しく、口調も吐き捨てるようだった。口を挟めるような雰囲気ではなく、はじめたちは皆、黙って耳を傾ける。

「3人の男たちはいずれも高そうな服を着て、言葉使いからしても東京から来たとすぐに分かる様子だった。あたしは辞める前に小金が欲しいと思っていたし、上手く取り入れば上京して少しはマシな生活にありつけるかもしれない、という下心もあっていつもの何倍も愛想良く振舞ったわ…。その時よ、その3人の男の中の1人、〝先生〟とか呼ばれてちやほやされている男が、昔父に良く金を借りに来ていた男だと気付いたのは…!あの、食うにも困っていた男が〝先生〟と呼ばれるような人間になっていた事に疑問に思ったあたしは、取り巻きの1人として一緒に店に来ていた男―宝田に尋ねたの。『〝先生〟ってお医者様とかなんですか?』ってね…。ミステリー作家と聞いて驚いたわ。でも、その後の衝撃に比べれば大した事じゃなかった…。有名なミステリー作家と聞いて、当時同僚として働いていたホステスがここぞとばかりに媚(こ)びを売って、あたしもそれに合わせておべっかを使ったわ。そしたらその男―山之内は、プレゼントだと言って目の前で自分の本にサインをして渡してきたのよ…。〝露西亜(ろしあ)人形殺人事件〟をね……!!!そのタイトルを見て、全身に鳥肌が立ったわ…!そして、その本に書かれたトリックや設定は、お父さんがあたしに話し

て聞かせてくれた内容そのものだった……!!」
桐江の口調が激しさを増し、その激情を垣間見せる。
「この本は、山之内が父の書き溜めていたノートを見てネタを盗んだに違いない、父の受けるべきだった栄誉や称賛を横取りして我が物としているに違い無い。そう確信したあたしは、名字も騙って山之内の家にメイドとして入り込む事にした。山之内は、あたしとお父さんがかつて住んでいたこの露西亜館を別荘として買い取っていたのよ。そして、ある晩あたしははっきりとこの目で見たわ！梅園が割り当てられた部屋の隠し金庫を開けた山之内が、中からお父さんのトリックノートを取り出し、真剣な眼差しでページをめくっているその様を……！あたしは、昔の記憶を必死に辿って、金庫のナンバーを思い出して開けたわ。…間違い無かった！山之内の傑作と言われる作品は、ことごとく父の考えたアイデアをそっくりそのまま盗用して書かれたものだったのよ！」
語るうちに込み上げた激情が、桐江の口調をより激しいものに変えていく。
「……許せなかった!!だって、山之内が受けた名誉も称賛も財産も!!!その全ては、本来ならばあたしの父が得る筈のものだった!!!山之内が父に、『小説にならない』なんて言わなければ、父はきっと書き上げた作品を発表していたわ！いいえ!!そうでなくても、あの時父が事故で死んだりしなければ、いつかきっと…！それとも、あたしがもっと早くノートの存在を思い出していれば、娘であるあたしが小説にして発表出来たかもしれない!!要するに、何もかもあたしのものになる筈だったのよ！この館も何１０億っていう財産も！それを生んだ作品も名誉も幸福も、全て、何もかもね!!」
皆、桐江の吐き出す激情に呑まれていた。
――――――だからこそ、初動が遅れてしまった。
桐江が隠し持っていたナイフを取り出した時、はじめは間に合わなかった。
「?!想子さん、何を…!?」
はじめが叫ぶが、その手は届かない。

否、はじめだけでなく、白馬や犬飼の手も届かなかった。
「だ、ダメだ想子(そうこ)さん！」
「いけません……!!」
――――見ている事しか出来なかった。
「近寄らないで！もう終わりにしてやるんだから！」
その喉元に、ナイフの切っ先が突き付けられるのを。
「あたしの最悪の人生なんか…、不運続きの辛いだけの人生なんか……!!」
微かに震える桐江(きりえ)の手が、狙いを定める。
「もう、いらないっ!!!」
震えが、止まった。
――――覚悟を決めたように。
「ダメだ！止めるんだ、想子(そうこ)さん!!」
はじめが駆け出すよりも、速く。
「バイバイ、名探偵さん…！」
「想子(そうこ)さ……!!」
ザクッ……!!
鈍い音を立てて、そのナイフが桐江(きりえ)の喉元へと突き立てられる。
バッ…
そして、はじめの視界が深紅に染め上げられた――――――。

バッ……!!!
深紅に染まった視界に、また間に合わなかったのかとはじめの顔が悲痛に歪む。
だが、その直後驚愕に目を見開いた。それは、桐江の行動を見ている事しか出来なかった周囲の者たちも同じく。
「「「「!!!?」」」」
――――ヒラリ…
「…?え……?」
手のひらを擽るような柔らかな感触と微かな甘い香りに、覚悟を決め固く目を瞑っていた桐江が、恐る恐る目を開く。
ハラリ…
「バ……、バラ…?」
いつの間にか握っていたナイフは消え失せ、代わりに手にしていたのはいくつものバラの花。
「ど…、どうしてこんなものが……?」
当事者である筈の桐江も、状況を理解する事が出来ずに目を白黒させていた。
「やれやれ…。この程度の事で死を選ぶとは…。桐江さん、あなたは犯罪者には向いていないようだ。」
誰もが状況を理解出来ない中、不意に響いた艶やかな声に、はじめと白馬、そして幽月がハッと声の主を振り返った。
「ローゼスさん…?!まさかあなたが……?」
「ええ…。――――私は約束は守る主義でしてね。殺すと言った獲物は、たとえどんな障害があっても必ず仕留める…。その逆もまた然り。少々不本意ではありますがね…。これ以上誰も死なないように手を貸す事…。それが、今回あなたと交わした〝約束〟だった…。――――そうでしょう?金田一さん。」
〝スカーレット・ローゼス〟のその言葉に引っかかるものを感じる間も無く、ゆっくりと外された仮面の下から現れたその素顔に、真っ

先に気付いた有頭が叫ぶ。
「あっ！あんたは指名手配中の殺人犯！」
「そ、そうだ…！その顔ニュースで見た事がある……!!」
「嘘でしょ…。〝地獄の傀儡師〟、高遠遙一……!!
流石、とでも言おうか有頭の叫びに真っ先に反応したのは、犬飼と梅園。
「な、何であの〝地獄の傀儡師〟がこんな所に……!?」
「はじめちゃん！もしかして最初から気付いて…?!ううん、それよりももしかして幽月さんは高遠さんの正体を知ってて…??!」
「え?!それって〝逃走幇助〟ってヤツなんじゃ…?」
はじめと最も因縁深い連続殺人犯の登場に、佐木と美雪の疑問が明後日の方向に向かう。
「……いや、厳密に言えば〝逃走幇助〟っていうのは、拘置所や刑務所なんかの〝法令において拘禁されている相手〟を逃走させる目的で援助した場合にのみ成立するんだ。つまり、直接脱獄の手助けをしたという場合でない限り適用されない。既に逃走した後でその逃亡生活を手助けした場合は、〝犯人隠避罪〟に当たる…。まぁ、幽月さんがそれに該当するかどうかは知らないけどね……。」
「…幽月さんは私の友人の1人ですが、出会ったのは逃亡生活を始めてからですよ。」
佐木の言葉で周囲の者たちが幽月に向ける視線が鋭く、疑惑に満ちたものに変化したのを感じ、はじめが気を逸らすように〝逃走幇助〟について説き、すかさず高遠が続ける。
嘘は言わず、出会った時期のみを伝える事で巧みに周囲の意識を逸らしたのは、流石奇術師と言えた。幽月が仮面の下の素顔を知らなかった、とは一言も言っていないのに巧みな言葉選びであたかも幽月は何も知らなかったように聞こえる。
実際、幽月が高遠と出会ったのは、逃亡後に公園でマジックショーを開いている時だった。記録に残るような付き合いもしていないので、警察も調べ切る事は出来ないだろう。
高遠なりに幽月を庇うだろう、と予測していたはじめも何も言わな

い為、白馬も薄々察してはいたものの口を噤(つぐ)んだ。
その甲斐(かい)あってか、周囲が幽月(ゆづき)に向けていた疑惑の視線は、何も知らなかったのだろうという同情の視線へと変わっていた。
因(ちな)みに、はじめが珍しく法律関係の知識を正しく解説出来たのには理由がある。
以前、真犯人の計略に嵌められて重要参考人として警察に追われた事があり、その時に友人知人に全面的に逃亡を手助けしてもらった際、はじめなりに色々と調べた結果である。
閑話休題(かんわきゅうだい)
「まぁ、それはともかくとして金田一さん！これで〝約束〟は果たしました…。私はここでお暇(いとま)させてもらいます。ちょうど、夜も明けてきたようですしね…。」
「何を…?!」
そう言って暖炉に飛び乗り、その上の窓を開け放つ高遠(たかとお)に詰め寄ろうとした白馬だったが、それは横から伸びてきた手に押し留められた。
「はじめさん……？」
「追うな。――――それが、今回の〝約束〟だからね…。」
眉を顰(ひそ)めながらも口を開くはじめに、クツクツと高遠(たかとお)が笑みを漏らす。
「そう…。これ以上誰も死なせないように全面的に協力する事に代わり、私の逃亡を黙って見送り以後２４時間は警察に通報しない。これが、今回私たちが交わした〝約束〟です。――――覚えていてくださって嬉しいですよ、金田一さん？」
「……お前相手に口先だけの誤魔化しは意味が無い。みすみす寿命を縮めるのと一緒だからね。〝約束〟は守るさ。だが、今度会ったらその時こそ逃がしはしない……!!!」
「やはり、あなたこそが私の唯一…。ただ1人認めた〝平行線〟だ。私の事を良く理解してくださっているようですね――――……。」
はじめの強い決意が宿った眼差しに、ニィと高遠(たかとお)が愉悦に満ちた笑みを浮かべる。

その２人のやり取りに、見守るしかない周囲が思わず息を呑む。
特に、間近でそれを目の当たりにした白馬の衝撃は大きかった。
（希代のサイコキラーが、唯一執着する〝名探偵〟――――……！噂には聞いていたが、これが２人の……！）
危うい。何と危うい関係性か。
間近にいるからこそ感じる緊張感に、ツ…、と白馬の頬を汗が伝う。
「――――些か名残惜しくはありますが、そろそろ行くとしましょう…。そうそう、桐江さん。」
呆然と座り込んでいた桐江が、高遠からの呼びかけにハッと顔を上げる。
「探偵にちょっと追い詰められたくらいで簡単に死を選ぶようなあなたでは、冷徹な犯罪者には到底なり得ません。あなたはたった今、１度死んだ。生まれ変わる気があるなら、次はもう少し自分のあるべき姿を見詰め直してみる事ですね……。」
その言葉に、桐江が目を見開くが、彼女の反応に一切構う事なく高遠がポケットから取り出した小さいリモコンのような物を操作する。
ピッ…！
「――――さて、私は夜明けの美しい湖に浮かぶ壮麗なロシア建築でも眺めながら、空の旅と洒落こませてもらいますよ。」
その言葉と同時に、窓の外から浮かび上がってきたのは巨大なアドバルーン。
「「「「「!!」」」」」
予想外の物体の登場に驚くはじめたちを尻目に、高遠がアドバルーンから伸びるワイヤーを掴んだ。
「それでは皆さん、また会うその日まで――――――。Ｇｏｏｄ Ｌｕｃｋ！」
言うや否や、窓際からアドバルーンに飛び移った高遠を苦々しく見送ったはじめの耳に、不意に嗚咽が響く。
「う……、うう……。」
他の者たちも、ほぼ同時に気付き振り返った。

「うっ…、うっ……。うあ…、あああああ――――――――!!!」
耐え切れぬ嗚咽を洩らしていた桐江が、遂に感情を爆発させたように床に座り込んだまま泣き伏せる。
桐江の過去と動機を知った者たちが、かける言葉を見付けあぐねて二の足を踏む中、はじめがゆっくりと桐江へと歩み寄った。
「――――想子さん。お願いがあります。」
「はじめさん…?」
徐に切り出したはじめに、何を言うのかと白馬が訝し気な声を上げるが、はじめはそれに反応する事無く、桐江だけを見詰めていた。
「あなたのお父さん、白井雄一郎さんが書いたこの〝露西亜人形殺人事件〟を出版させる許可をいただけませんか?」
「っ……?!」
はじめの予想外のその言葉に、桐江がバッと伏せていた顔を上げた。その頬には、幾筋もの涙が伝っている。
呆然とはじめが掲げる原稿を見上げる桐江に、はじめが原稿を差し出す。
「…この原稿は全て読ませてもらいました。トリックは勿論、伏線や登場人物の機微、文章構成、全てが素晴らしかった。これが発表されていたら、ベストセラーは間違い無かったでしょう。山之内なんか足元にも及ばない、素晴らしい才能です。――――――これを読めば、本当の作者がどちらであるのかは一目瞭然だ。」
「「「「「!!!」」」」」
はじめの最後の一言に、桐江だけでなく、その場にいた者たち全員が息を呑んだ。
「これまで、他人のアイデアとトリックを盗用し続けてきた偽りの作家に、本当の作者からの正当な復讐を。得るべきだった栄誉を、正当な資格者に返すべきです。」
「ち、父に、栄誉、を返す……?」
しゃくり上げながらも、桐江がつっかえつっかえ言葉を紡ぐ。
「これまで山之内が築いた財産を想子さんが得るのは難しいかもしれない…。でも、この原稿は正真正銘あなたのお父さんが書き上げたも

のだ。これが出版され、正当な評価を得る事が出来れば、それは山之内の築き上げた権威の失墜に他ならない。」
「……そんな事が、本当に出来る、っていうの……？」
はじめの断言に、わずかに希望を見出した桐江が縋るような目をはじめに向ける。
「あたしの知り合いに、顔が広いルポライターがいます。彼の伝手を頼れば出版までこぎつけるのもそう難しい事ではないでしょう…。何なら、彼に一筆書いてもらう事だって出来る。〝旧友に全てを奪われた悲劇の天才作家〟とでも銘打ってもらえれば、世間の関心を惹く事も出来る。……まぁ、これは想子さん自身の事に触れる事にもなりますから、本当の最終手段ですけどね…。」
「いいえ！あの男から父の栄誉を取り戻す事が出来るのなら、あたしの事は何て書いたって構わないわ……!!全てを明らかにしてちょうだい!!これ以上、あんな男にお父さんが得る筈だった栄誉を良いようにされるのは真っ平よ……!!!!!!」
「……分かりました。そこまで言うのであれば、知り合いに記事を書いてもらえるように本格的に頼んでみます。」
山之内への怒りと憎しみで、再び桐江の目に光が戻る。
彼女が、もう死を選ぶ気は無い事を見届け、はじめはこの一件の全てをいつきに頼んで記事にしてもらおうと心に決めた。
（これ以上、あの下衆野郎の思い通りにさせるか……！）
――――その後、警察に通報出来る高遠との約束である２４時間が過ぎるまでの間、桐江は元の美雪の部屋である、マジックミラーのある部屋に軟禁される事となった。
桐江本人も心身共に疲れていたのもあるのだろう、桐江自身からの申し出によるものである。
部屋には風呂場とトイレが備え付けられている為、数日なら生活するのも苦では無いだろう、とはじめと白馬もそれが最善と判断したのだ。
水と、一先ず1日分は保つだろう食料品を渡した上で、部屋の外にはバリケードが築かれ、内側からは出入り出来ないようにして、他の

人間は食堂に集まった。
　田代の入れてくれたコーヒーを飲みながら、いつ殺されるかも分からない緊張感から解放された反動か、皆先程までの驚愕からも徐々に冷め、口数が戻ってきている。
　そんな中、梅園が言い辛そうに口を開いた。
「ねぇ、ちょっと…。この場合遺産ってどうなるワケ…？」
「梅園先生！こんな時に…！」
　ぎょっとしたように振り返る犬飼に、梅園もバツの悪そうな表情を浮かべた。
「分かってるわよ…。でも、あたしにはお金が必要なのよ……！あんただってそうでしょう?!」
「っ…、それは……。」
　率直な梅園の言葉に、犬飼が咄嗟に言葉に詰まった。
「山之内先生が書き遺された遺書には、第２の遺書の在処（ありか）を突き止めた５人の資格者の誰かとなっておりますが……。今回の場合、暗号を解読し、大時計から遺書を取り出したのは金田一さんですから…。全額国に寄付という形になりますね…。」
「ああ、やっぱり…？」
　言いにくそうに口を開いた有頭（ありとう）の言葉に、梅園はやっぱりか、と肩を落とす。
「――――仮に暗号を解読していたとしても、山之内が素直に遺産を譲ったかどうかは分からないけど。」
　遺産が手に入らなかった以上、今後の金の工面をどうやっていくか、と弁護士である有頭（ありとう）に助言を求める候補者たちの声にかき消されるように、ポツリ、と呟いたはじめの言葉を拾う事が出来たのは、隣に座っていた白馬１人。
「？それは一体どういう……？」
「いや、何でも無い…。」
　聞き返す白馬から目を逸らし、はじめはそれ以上は口を開かなかった。
――――そして、それから２６時間後、駆け付けた地元警

察によって桐江想子(きりえそうこ)、本名は白井想子(そうこ)は拘束され、霧の立ち込める奇怪な露西亜(ろしあ)館を舞台にして起きた連続殺人事件は、晴れゆく霧と共に終わりを告げた……。

露西亜人形殺人事件　Epilogue

――――高遠が逃亡してから、およそ27時間後。

駆け付けた所轄の警察により、はじめたちは無事に保護され、一連の連続殺人犯桐江想子は拘束された。

そして、駆け付けた警察の中に、良く見知った顔を見付けたはじめの顔が盛大に引き攣る。

本来ならばいる筈の無い人がいた事に、白馬も目を瞬かせるが、それ以上にはじめのリアクションに驚く。どうかしたのかと尋ねるよりも早くその人が口を開いた。

「全く君は…。ことごとく事件に巻き込まれる運命にあるようですね……。尤も、今回は自分から巻き込まれに行ったようなものですが…。」

「別に好きで巻き込まれた訳じゃ…。」

麗しい顔を顰めて皮肉を洩らすその人。警視庁捜査一課警視―明智健吾の言葉に、はじめが顔を引き攣らせたまま反論する。しかし、明智の苦言は止まらない。

「高遠が現れた…。そこに君がいたと聞いて、私と剣持くんがどれ程胆を冷やしたか……。ただでさえ、あの男は君に強く執着している。――――その時の私たちの心境が君に分かりますか？おまけに連絡は取れない、自宅に問い合わせても詳細は分からない…。こうして顔を見るまでは、私も剣持くんも生きた心地がしませんでしたよ。」

「……ごめん…。」

その秀麗な美貌に浮かぶわずかな疲労の影に、はじめも事の重大さを悟った。

普段は嫌味なまでに完璧に整ったその美貌も今日は些か精彩を欠いており、キラキラしいオーラも幾分か陰っているような気がする。

何より、エリートの中のエリートたる警視庁の警視である明智が今この場にいる事こそが、どれ程心配をかけたのかを物語っていた。

広域指名手配犯である高遠が現れた以上、担当する明智に連絡が行くのは至極当然の事ではあるが、いくら何でも行動が早過ぎる。はじ

めが警察に通報してから、まだ3時間弱しか経っていないのにも関わらず北海道の山奥に到着出来るとは、一体どれ程の無茶をごり押しで通したのか…。

出会ったばかりの頃はいざ知らず、現在ではまるで兄か父親のようにはじめの事を殊の外気にかけている明智である。はじめが巻き込まれる事件がよりその凄惨さを増しているのに比例するように、その過保護ぶりにも拍車がかかってきた、というのが彼の部下たちの共通認識だった。

最近では、大阪府警に直々に抗議の電話をかけた事は記憶にも新しい。

閑話休題

「明智さんが来たって事は、今回の指揮は明智さんが……？」

「ええ。高遠が関わった以上、捜査権はこちらにあります。しかし、今回は高遠自身偶然居合わせただけのようですし、既に容疑者も全面的に自供しているようなので、ある程度指示を出して私は高遠の足取りを追うつもりですが…。」

美雪の問いに軽く頷く明智に、わずかに逡巡したはじめが意を決したように彼の袖を引く。

「明智さん、ちょっと調べて欲しい事があるんだけど…。」

「調べて欲しい事……？」

「ちょっと耳貸して。」

珍しい行動を取ったはじめに目を見開いた明智が、それでも素直にはじめが耳打ちしやすいようにわずかに腰を屈める。

「《……。》」

「…なるほど。良いでしょう。すぐに調べさせます。」

はじめが囁いた言葉に、すっと真剣な表情に戻った明智が頷く。

「よろしく。」

「明智警視！」

明智に再度頼み込んだ直後、所轄の警官が指示を仰ぐべく、明智に駆け寄ってくるのを確認し、はじめが邪魔をしないように明智から静かに離れた。

「はじめさん、明智警視に何を……？」
「…はっきりしたら教えるよ。今はまだ、予測でしかないから……。」
敢えてこちらに聞こえないように明智に囁いたはじめの心情を慮ったのか、同じく小声で尋ねてくる白馬に囁き返し、はじめはそれ以上は口を噤み、何も語らなかった。

――――――事件終着からおよそ5日後。
世間の耳目を惹いていた、山之内恒聖の遺産を巡る陰惨な殺人事件は未成年者が真犯人だったというセンセーショナルな事実と、あの〝地獄の傀儡師〟が居合わせたという衝撃も相まって、ここ数日のワイドショーの話題を独占していた。
ネットでも、ある事無い事を書き立てて騒ぐ輩が続出し、生き残った候補者たちの名前は明らかにされていないものの、どこからか情報が漏れた様子で、未成年者である犬飼はともかくとして他の2人―梅園と幽月の下には連日多くの報道陣が詰めかけているという。
そして、もう1人連日押しかける報道陣に迷惑している者がいた。
「おい、白馬ぁ…。あのマスコミ連中何とかしろよ……。ったく、ここんトコ毎日じゃねぇか。鬱陶しいったらねぇぜ。」
都内の公立校―江古田高校の教室の一角で、正門に詰めかけるマスコミを窓から見下ろし、顔を顰め白馬 探に文句を垂れているのは、クラスメイトである黒羽快斗である。
余談ではあるが、露西亜館で白馬がはじめに対して語った、プロ級の奇術師とは彼の事だった。
「何で今回の事件に関しては何もコメントしねぇんだよ？オメェがさっさと詳細教えてやれば、あいつらだって満足して来なくなるじゃねぇか。そうすりゃ、犬飼だって……。」
〝登校出来るようになるじゃねぇか。〟
彼の有名な高校生探偵―白馬 探が事件に居合わせたと聞き、少しでも情報を掴もうと連日殺到しているマスコミに、いい加減辟易し始めただけでなく、未だに登校出来ないでいるクラスメイトを心配している快斗が白馬に詰め寄る。

彼らのクラスメイトであり、山之内の5人の遺産相続候補者の1人でもあった犬飼については、未成年者でもある為、世間的には名前が伏せられている。しかし、人の口に戸は立てられない、という言葉通り、江古田高内では知っている者も少なく無かった。校内でも一定の発言権を持つ快斗と白馬、そして同じくクラスメイトの小泉紅子の口添えもあって、今のところそれ以上の広がりは見られないものの、ちょうど事件と同時期から欠席を続けているとなれば彼と事件を関連付けて考える者が出ないとも限らない。

犬飼の父の事業が失敗した事は、事件の前から既に噂になっていたのだから。

犬飼を慮り、後半は声を潜めた快斗に、窓の外を眺めていた白馬が快斗に視線を移し、常に自身に満ち溢れた彼にしては珍しく、静かに否定した。

「いや…。僕が話せる事は何も無いんだ。今回の事件を解決したのは僕じゃないからね…。」

「はぁ?!」

てっきり目の前のクラスメイトが解決したと思い込んでいたところへの、まさかの本人からの否定に快斗が目を剥いた。

いけ好かない相手だが、その探偵としての実力は自身も知るところである。まさか、この白馬を出し抜ける相手がいたとは…。

一体誰が解決したのかを問い詰めようとした快斗だったが、ピロン♪という通知音に遮られた。

「っと、失礼。僕だ。」

「って、音切っとけよ…。」

何となく肩透かしを食らったような気分になって文句を付ける快斗を受け流しつつ、白馬がスマホを操作する。

白馬が個人的に連絡先を交換している相手は意外にも少ない。

人当たりも良く、フェミニストの彼は良く女子から連絡先の交換を求められるものの、普段からイギリスと日本を行き来している上に事件やら何やらで多忙な事を理由に、そのほとんどを断っている為だ。

よって、白馬に個人的に連絡を取れるのは極々少数の親しい人間に

限られる。因みに、クラスにおいてさえ白馬と直接プライベートでもやり取りが可能なのは、快斗(かいと)と彼の幼馴染だけである。
その白馬のスマホ、しかもこのタイミングでラインで連絡しようとしてくる相手となれば、白馬には心当たりが1人しかいなかった。
逸(はや)る気持ちを抑え、ラインのトーク画面を開けば案の定、想像した通りの相手からの連絡だった。
[今日の放課後、時間ある？]
[直接会って話したい事があるんだけど…。]
[ダメだったら、近日中に空いてる日教えて。]
ピロン♪ピロン♪と立て続けに送られたラインに、返信する。
[大丈夫です、空いてます。]
[どちらに伺えば…？]
即座に既読が付き、ピロン♪とさほど間を開けずに返事が来た。
[１６時に、米花町の喫茶店〝ポアロ〟で。]
江古田と不動山市の中間地点にあたるのが米花町である為、妥当なチョイスと言える。また、〝ポアロ〟も一時期高校生を中心にＳＮＳで有名になったので白馬も場所くらいは知っていた。
[分かりました。]
[では、１６時に。]
既読が付いて以降、沈黙したスマホをマナーモードに設定し直し、ネットでバス時間を確認する。
授業が終わるのがおよそ１４時半。そこから米花町までバスで３０分程。１５時７分のバスに乗る事が出来れば約束の１０分前にはポアロに間違い無く着く事を確認し、スマホをしまった。
「オメェがラインなんて珍しいな…。」
「まぁ、否定はしませんが。僕だってラインで連絡を取り合う相手の1人や2人いますよ。」
そう言って再び窓の外に視線を向ける白馬に、再度口を開こうとした快斗(かいと)だったが、タイミング良くキーンコーンカーンコーン♪と鳴り出した予鈴に肩を竦(すく)めて自分の席へと戻った。
昼休みも終わりである。

放課後問い詰めるか、と思い直した快斗(かいと)ではあったが、結果的にそれは叶わなかった。
授業終了の号令と同時に教室を飛び出した白馬を、思わず呆気に取られて黙って見送ってしまった事が彼の敗因だったと言える。
――――――カランコロン♪
軽やかなドアベルの音と共に姿を現した待ち人の姿に、白馬がコーヒーをソーサーに戻し、立ち上がる。
「はじめさん、こちらです。」
「悪いね。待たせたみたいで…。」
不動高校の制服を纏い、謝罪しながら歩み寄るはじめに、ソファ側の席を勧めながら白馬も座り直す。
「急に呼び出してごめん。直接話した方が良いかと思ってね…。」
「いいえ。僕もお聞きしたい事もありましたから。」
首を横に振る白馬だったが、まじまじと見詰めてくるはじめに怪訝そうな顔をする。
「あの、何か…?」
「ああ、いや…。てっきりブレザーかと思ってたから学ランなのが意外だっただけ。」
何でもない、とパタパタと手を振ってみせるはじめに白馬が苦笑する。
「それ、良く言われるんです。」
「あ、やっぱりそうなんだ?」
クスクスと笑い合う様子は、2人とも制服姿なのも相まって傍から見れば付き合いたての高校生カップルのようにも見えた。
視界の隅で、女性店員がお冷を手に注文を取りに来るタイミングを計っては二の足を踏んでいるのに気付いたはじめが声をかけるよりも早く、カウンターに入っていた男性店員が女性店員の手からお盆を取り上げ、はじめたちのテーブルへと近付いてきた。
「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか?」
お冷を運んできた若い男性店員に、白馬がはじめにメニューを差し出す。

「ここのコーヒーはおいしいと評判みたいですよ。」
「うん、知ってる。あと、ハムサンドと日替わりのケーキが絶品だって美雪が騒いでたから。」
「ああ、ＳＮＳでも話題になってましたしね…。」
「うちのクラスの女子も一時期通ってたらしいんだよね。」
「それはそれは…。そこまで評価していただけるとは、嬉しい限りですね。」
　はじめたちの会話を聞き、輝くような営業スマイルを浮かべる店員にチラッと目を向け、はじめが注文する。
「カフェラテとハムサンドお願いします。…白馬は？」
「大丈夫です。」
　コーヒーカップの中身が大分少なくなっていた白馬に振るが、白馬がそれを断る。ならば無理に勧める事もあるまい、とはじめは頷き店員へと視線を戻した。
「以上です。」
「かしこまりました。少々お待ちください。」
　素早く伝票に書き付け、一礼して戻る店員の背中を何となく見送り、白馬がはじめに視線を戻した。
　口を開きかけ、わずかに逡巡（しゅんじゅん）する白馬を見やり、はじめが本題に入る。
「――――――見せたい物があってね。」
「見せたい物、ですか？」
　そう言ってはじめがスクールバッグから取り出したのは、1冊の週刊誌。特に主婦層をターゲットとした、所謂（いわゆる）ゴシップ誌だった。ただし、白馬も知る大手出版社のそれは、比較的しっかりとした裏取りがされている記事がほとんどであり、時に政治家の汚職や大手企業の内部告発が明らかにされる事も少なくないものである。
「本来明日発売だけど、いつきさん―知り合いのルポライターが1部都合してくれてね…。例の事件について、しっかり記事にしてくれたよ。」
「！」

はじめの言葉に、ハッとした白馬が急いで差し出された週刊誌を手に取る。
〝山之内恒聖の裏の顔!!その成功の影に全てを奪われた男と、翻弄された娘の姿!!〟
表紙に大きく取り上げられただけでなく、そこから8ページにもわたって書かれた記事には、山之内の学生時代から掘り下げられ、〝露西亜人形殺人事件〟の真の作者—白井雄一郎について丁寧に記されていた。そして、その娘こそが今回の連続殺人事件の犯人である事も…。
その他にも、これまで信じられていた、〝人格者〟という山之内の批評を覆す例が事細かに書かれている。中には山之内から陰湿な嫌がらせを受けていた、という証言もあり、たった5日で良くぞこれ程詳細な内容を調べ上げたものである。
「宝田さんは、いつきさんにとっても親しい友人の1人だったらしいから…。」
遣り切れない思いを滲ませながら呟くはじめに、かける言葉を探して視線をわずかに彷徨わせた白馬が、ある一文に目を止めた。
いつきが書いた、事件の発端となった遺産争奪戦そのものが、山之内が仕掛けた殺人教唆だったと断言されたその記事に。
「な?!」
真犯人である少女Sは、山之内の心理誘導に踊らされた被害者である、と断言されたその記事に、白馬の声がわずかに上ずった。
「あの争奪戦が、山之内が仕掛けた殺人教唆……?!どういう事ですか?!」
「シー…、声がデカい。」
思いがけない記事に、意図せずに声を荒げる白馬を窘めつつ、はじめがスクールバッグから大きな茶封筒を取り出した。
「?これは……?」
「開けてみな…。」
眉を顰めながら封筒を差し出すはじめの姿に引っかかるものを感じたものの、逆らう事無く受け取り、封筒を開封する。

「原稿用紙、ですか？…？！これは……！！」
封筒に入っていたのは、クリップで纏められた原稿用紙の束。
そして、そのタイトルに白馬が驚愕に目を見開いた。
〝露西亜館　新たなる殺人〟
そして、その作者は……、山之内恒聖。
「山之内先生の、未発表遺稿……。それも、この内容はまるで……。」
ざっと原稿を斜め読んだ白馬が、呆然と呟く。
「あたしたちが北海道に行っている間、代理人から文芸常談の編集部に送り付けられたそうだ。例の事件の事が伝わって、すぐにでも掲載されそうになったところにいつきさんが例の記事を持ち込んで、編集部で掲載するべきか揉めてる間に警視庁からストップがかかったらしい。事件に深く関わる内容だから、掲載・出版は控えて欲しいってね…。読んでもらえば分かると思うけど、登場人物の名前が若干捻られているだけで内容は今回の事件がほとんどそのまま書かれてる…。あたしや白馬、アイツがいなかったら、恐らくその小説の通りに５人の相続者全員が殺されていただろうね。」
「山之内先生は、全て計算していた、と……？」
「ああ。山之内の書斎から、今回の殺人事件の〝計画書〟とでも言うべきメモが出てきたらしい。まるで想子さんをコマのように扱った、ね…。……想子さんは自分でも気付かないうちに精神操作されて、その憎悪と殺意を煽られていた可能性が高い。」
「！まさか…？」
「全てが明らかになった後、衝動的に自殺を図ったのも、もしかしたら、ね…。山之内の書いた遺稿でも最後に犯人であるメイドの少女は自殺している…。今後、慎重に精神鑑定に回されるらしい。」
「もしかして、はじめさんが明智警視に頼んでいたのは…？」
「そう。山之内が何か仕掛けてるんじゃないかと思ってね…。日記か何か遺ってないかと思ったんだけど、まさか原稿として遺してるとはね…。想像以上の悪趣味さだよ。今回の事件、〝真の指揮者〟は山之内恒聖自身だった、って訳だ…。」
はっきりと眉を顰め、グラスから水を飲むはじめが吐き捨てる。

「…想子さんの罪が、少しでも軽くなれば良いんですが……。」
「ああ…。」
薄汚い男の欲望に翻弄され続けた少女を想い、束の間の沈黙が降りる。
「お待たせしました。カフェラテと、ポアロ特製ハムサンドです。」
そこにかかった声に、２人ともハッと顔を上げる。
「ごゆっくりどうぞ。」
はじめの前にカフェラテとハムサンドを置き、爽やかに去っていく店員の背中を２人で黙って見送る。
「《…今、話聞かれた？》」
「《いや、ギリギリ大丈夫だったかと…。》」
思わず小声で確認し合うが、それを確かめる術は無い。
声量に気を付けていたとは言え、流石にこんな場所で話をするのは些か不用心だったかと反省する。幸いなのは、明日にでも全国的に知れ渡るような内容しか話をしていなかった事か。
気を落ち着ける為に、はじめがカフェラテを一口口に含む。
（あ、おいしい…。）
一時期ＳＮＳで有名になっていただけの事はある。
「……はじめさん。」
「ん？」
顔を上げれば、白馬が真剣な瞳ではじめを見詰めていた。
「高遠の事で、ずっと気になっていた事があるんですが……。」
「高遠の事？」
その言葉に、カップをソーサーに戻し白馬に向き直る。
「何故、あの時高遠は想子さんを助けたんでしょうか？」
「……そうだな…。〝約束〟したからってのもあるだろうけど。アイツ、自分でも言ってたけど基本的に有言実行だから…。でもまぁ、第一は…。」
「第一は？」
「自分と重なったから、だろうな。」
「あっ…。」

はじめの言葉に、以前調書で呼んだ彼の〝地獄の傀儡師〟の経歴を思い出す。
「高遠遙一が〝地獄の傀儡師〟として生きていくきっかけになったあの事件で、アイツを連続殺人に駆り立てたその動機は、まさしく同じ母親が遺した〝トリックノート〟だった…。母親を殺して彼女の遺したノートを奪い、まんまとマジシャンとして成功した連中を殺した自分と、父親の〝トリックノート〟を元に生み出された莫大な遺産を手に入れる為に殺人に手を染めた想子さん…。偶然とは言え、良く似た理由で犯罪を犯した彼女に、恐らく高遠は昔の自分の姿を見たんだろうな…。」
どこか苦いものを感じさせる表情で、はじめは静かにカップを傾ける。
「今回は見逃さざるを得なかったけど、今度逢ったらそうはいかない…。今度こそアイツの考えを叩っ切って、監獄に送ってやるよ。」
――――――――はじめの瞳が、強い光を宿し、紅茶色に煌めいた。

吸血鬼の館

プシュ――――――――……!

ブロロロロロ……!!

「さて、と……。」

バスから降り立ったはじめは、住所を確認してスマホのマップを起動させた。

「げ…。こっから徒歩で1時間半……?!」

目的地である寅倉家までの距離に、一瞬眩暈を感じる。

これからこの山道を延々登って行くのか、と思わずうんざりしたはじめだったが、もたもたしている場合ではないと意識を切り替えた。

「行くっきゃないか…。」

溜息を1つ吐き、バックパックを担ぎ直し、山道へと足を踏み入れた。

何故、はじめが1人こんな山道を登る事になったのか。それは3日前に遡る。

――――――――3日前。

ガララ…

「ただいま。」

「あら、おかえり。あんたに手紙が届いてたわよ。」

「手紙…?」

玄関の戸を開け、学校から帰宅したはじめに、台所からひょいっと顔を覗かせた母が下駄箱の上を指差す。

見れば、下駄箱の上に置かれたシンプルな白い長封筒の宛名には、確かに〝金田一一様〟の文字があった。

見覚えのある筆跡に、ドクリ、と心臓が嫌な音を立てるのが分かる。

バッ…!

急いで封筒を手に取り、裏返して送り主を確認した。

〝都津根毬夫〟。

「っ!!」

見知った筆跡で記された、見覚えのあり過ぎる名前に、ギリッと唇を噛み締める。
（高遠……！）
〝都津根毬夫〟は、はじめと高遠遙一が初めて邂逅した事件で高遠が使っていた偽名。
そして、以前にも奴はこの名を使ってはじめに手紙を送り付けてきた事があった。
「はじめ？誰からだったの？」
険しい顔をしている娘を疑問に思ったのか、不思議そうな声で問いかけてくる母にハッと顔を上げる。
「あ、ああ…。前に事件で一緒になった人。急に何だろうと思って。」
嘘は言っていない。
まして、〝事件に関係した人〟と聞けば、母はそれ以上は突っ込んでは来ない。事件に巻き込まれる度に、はじめが大なり小なり傷を負って来る事を誰よりも良く知っている為である。
「そう…。これから買い物行って来るけど、今日何が食べたい？何でも良いって言うのはダメよ。」
案の定、母はそれ以上追及する事無く、話題を変えた。
「じゃあ、寒いからキムチ鍋。シメにうどんと卵入れてね。」
「キムチ鍋か…。最近食べて無いし、白菜と豆腐、卵もあるし良いわよ。じゃ、ニラと豚肉とうどん買い足せば良いわね。」
「シメジか椎茸も入れてよ。」
「そうね。確か干し椎茸もあった筈だから良いわ。その代わり、あんたも手伝うのよ。」
「分かってるよ。それまで宿題してるから、帰ってきたら呼んで。」
パタパタと冷蔵庫の中身を確認し、エコバックの準備をする母に言い置いて階段を上って自室に向かう。
ガチャ…
――パタン
自室に入るなり、手紙の封を切って中身を確認する。
シンプルな便箋に書かれていたのは、ある場所を示した住所と、指

定された日時。そして、珍しくも記された一言。
〝誰にも知らせず、1人で足を運ぶ事。破られた場合、マリオネットの命は保証しかねます。〟
「…今度は、何を企んでる高遠……！」
はじめ1人を指名するのは、高遠にしては珍しいとも言える。これまでは、明智警視にも自ら挑戦状を送り付けたり、はじめが剣持や明智を頼るのを黙認していたのだから。
おまけに、これまでに高遠がはじめに送り付けてきた〝犯罪ガイドマップ〟とは異なり、記されている住所は1つだけ。しかも、日時すら指定してきている。
嫌な予感が止まらないが、今回ばかりは明智は勿論、剣持にも頼れない。基本的に高遠は有言実行。誰かに知らせた時点でマリオネット、つまりは犯罪コーディネーターである高遠の依頼人の命は消えるだろう。
誰かが死ぬと分かっていながら、出来る訳が無い。
高遠の掌の上で踊らされている事に歯噛みしながら、はじめには条件を呑むしか道が残されていなかった。

――――――――そして、それから3日後。はじめは手紙に記されていた群馬と埼玉の県境に位置する寅倉家の邸へと足を運んだ。
舗装はされているものの、コンビニ1つ無い山奥を延々と歩く事約1時間40分。
「…やっと着いた……。」
着く頃には既に夕方になろうとしていた。
（に、してもデカい家……。）
こんな山奥に家を建てた、というよりはむしろこの山全てが持ち物という事なのだろう。まるでヨーロッパの貴族が住んでいたような豪奢な邸である。
ガンガンガン……！
インターフォンが見当たらず、取り敢えず扉に取り付けられたノッ

カーを鳴らす。
ガチャリ…
「どちら様でしょう？」
しばらくして顔を覗かせたのは、執事服を纏った老人。
細面ながら品の良さそうな顔が、はじめを見た途端に喜色を露わにした。
「おお…！もしや、金田一様でしょうか？」
「え？はい、そうですが…。」
「お待ちしておりました。さ、遠路はるばるお疲れでしょう？どうぞお入りくださいませ。」
予想外のリアクションに戸惑うはじめを余所に、執事が邸内へとはじめを誘う。
「申し遅れました。私、この寅倉家の執事―古賀と申します。」
「金田一一です。あの、何故私がここに来る事を……？」
これまでに無かったパターンに、いまいち理解が追い付かない。これまで、高遠によって送り付けられた〝犯罪ガイドマップ〟によって導かれた際は、高遠が直接関わってるか否かに関係無く、はじめの存在は犯人（或いは、これから犯罪を犯そうとしている者）にとってはイレギュラーである事が常だった。その為、スムーズに介入出来た事は少なく、状況によっては容疑者になった事も少なくない。
しかし、今回ははじめが今日この邸に来る事が予め周知されていた様子である。
高遠が手を回していたという事なのか…。
「それは当然、旦那様からお伺いしていたからでございます。半年前の奇怪な事件を解決すべく、彼の昭和を代表する名探偵―金田一耕助のお孫さんをお呼びする、と…。」
「……旦那さんが…？」
その〝旦那様〟が高遠の依頼人なのか、それとも…。
「その旦那さんとお会いしたいんですが…。」
「はい。間も無くお目覚めになると思いますので、夕食の席で皆さまにご紹介させていただきたいと思います。それまで、どうぞ客間でお

寛ぎくださいませ。」
「お目覚めって、お体の調子でも…？」
日中寝るような生活なのか。
「ああ、いえ…。実は……。」
どこか言い辛そうに古賀が口を開こうとした時だった。
――――――――ブロロロロロ……！ブロロ…！
「ああ、もうお一方いらっしゃったようですね…。金田一様、お話は後程でもよろしいでしょうか？」
「はい、大丈夫です。」
「それでは、ただいまいらっしゃったお客様とご一緒に客間にご案内致しますので、少々お待ちくださいませ。」
そう言い置いた古賀を見送ろうとしたはじめの耳に、どこか聞き覚えのある声が届いた。
（？…何か、どっかで聞いた事のある声が……。）
扉が締められている為、内容までは聞き取れないものの、どこかで聞き覚えのある声が外から聞こえてくる。
古賀が扉を開けたタイミングで何気無く外を覗いたはじめが、声の主を見付けるより先に、その声は響いた。
「あれ?!はじめ姉ちゃん!!??」
「え?!コナン……!!?!」
そこにいたのは、何かと縁のある眼鏡の小学生。
「あ、あんた……！」
「あっ……。」
そして、一緒にいたのは前回気まずい出逢いとなってしまった、浪速の高校生探偵だった。
――――――――3度目の邂逅は、偶然か、それとも必然か。
〝傀儡師〟の視えない糸に操られ、3人の探偵が〝舞台〟へと導かれた。
その〝舞台〟の行く末を知る者は、まだ、いない。

ドラキュラ伯爵

「なんでコナンたちがここに……。」
「はじめ姉ちゃんこそ、なんで……？」
予想外の邂逅に、はじめだけでなくコナンたちも一瞬言葉を失う。
この前一悶着あった服部平次がいる事に、はじめからすれば若干の気まずさもあった。あの時の気持ちに嘘偽りは無いが、若干感情的になり過ぎてしまったとも反省していたのだ。
「なんや、このお嬢ちゃん知り合いですか？」
その様子を見咎め、コナンたちと一緒にいた右眉に傷のある男――大阪府警の大滝警部が小五郎に尋ねる。
「あ、ああ…。前に事件で知り合ってな…。この嬢ちゃんは金田一一、彼の昭和を代表する名探偵――金田一耕助の孫娘だ。」
「げっ…!!こ、このお嬢ちゃんがあの?!」
「？」
小五郎が代表ではじめを大滝警部に紹介するが、その名前を聞いた瞬間、大滝警部が思い切り仰け反った。顔も引き攣らせており、その予想外のリアクションにはじめが思わず首を傾げる。
はじめは知る由も無いが、大滝警部のリアクションも無理からぬものではあった。
前回、はじめと服部平次が邂逅したファミレスの事件の後、その場に居合わせた剣持に事の詳細を聞いた明智警視が、〝浪速の高校生探偵〟による捜査妨害への苦情を大阪府警に理路整然と申し立てたからである。
曰く、父親の権力を笠に着て現場を荒らす素人探偵を増長させているのは警察官としてあるまじき怠慢であり、大阪府警が特別扱いしてきたせいでこれまで服部平次が都内で行ってきた〝捜査〟によって現場が荒らされ、鑑識や所轄の警官から度々苦情が寄せられている、と。
明智警視の電話を取った1刑事（しがない巡査長）が慌てふためいて大滝へと繋ぎ、反論（基、言い訳と言った方が良いか）しようにも

1つの言い訳に対して3倍以上になって返されるド正論の中に込められた嫌味の嵐に、再起不能となりかけた事が思い出される。
事情を聞き付けた、他ならぬ大阪府警本部長にして平次の父―服部平蔵が大滝の手から受話器を取り上げ代わるまで、徹底的にへこまされる事となったのだ。
あの後、階級が上である服部本部長にも明智警視はその舌鋒（ぜっぽう）を緩める事は無かった、らしい。遜（へりくだ）りながらも息子（つまりは平次）の育て方、また部下の管理不足について言及（げんきゅう）されたようだった。
階級が下でありながら上の人間に対してそこまで追求出来る明智警視の心臓の強さもさる事ながら、完全に理詰めで来られた故に一切反論出来ない本部長の姿もまた衝撃的だったのである。
また、話はそれだけに終わらなかった。明智警視からの電話を皮切りに、これまで平次が関わった地方の警察署から次々と苦情が舞い込む事となったのだ。
警察というのは縦、つまり上司から部下へのやり取りが全てでは無論無い。
当然、仕事柄他の署の人間と連携を取り合う必要がある故に、管理職同士で情報提供を行う事もあれば、人事異動などによって個人的に広い人脈を持っている者もいる。
それは同じ都道府県内だけに留まらない。
例えば、別の都道府県で事件を起こした被疑者が他県で別の事件を引き起こし逮捕された場合、実際に事件の起こった都道府県の警察署同士で、情報提供なり何なりを行う事は決して珍しい事では無い。事件そのものの規模によっては、最初から異なる都道府県の警察同士での合同捜査を行う事もある。
その為、そうした経験から個人的に他県に人脈を持つ者も多いのだ。
今回、本庁の明智警視が遂に重い腰を上げた事により、それは本庁から所轄へ、そしてそれぞれの人脈を辿って全国の警察署へと伝わった。
それにより、それまでマスコミによって名を上げ、事件現場に堂々

と入り込むようになっていった〝探偵〟たちへの苦情が余波として寄せられる事となったのである。

大阪府警には服部平次への、そして警視庁へは毛利小五郎と工藤新一への苦情が。

この3人が槍玉に挙げられてしまったのは、その知名度による影響力がそれだけ大きかった事が挙げられる（より正確に言えば、毛利小五郎は江戸川コナン（つまりは工藤新一）のスケープゴートにされているだけである為、実は被害者でもあるのだが、それを知るのは極1部の人間しかいない為、仕方が無い）。

上記の3人（しつこいようだが、実は2人）は、時にマスコミの前で推理を披露する事もあり、前々から被害者家族や友人、または被疑者の家族や恋人から個人情報保護についての苦情が度々寄せられていたのである。だが、その功績と後ろ盾（バック）の大きさ故に下で止められて上や本人たちに届く事は無かったのだ。

しかし今回、彼らを庇い続けていた警部たちよりも上の階級である警視が動いた事により、一気に表面化する事になったのである。

因みに今回、明智警視は大阪府警に苦情を入れる前に自身の部下でもある目暮警部を始めとする〝目暮班〟の者たちに直々に厳重注意（に伴う嫌味付き）を行っていたが、事件捜査を民間人に頼りっきり、という事態が表面化した事を重く見た上層部により、〝目暮班〟の面々は3か月の減俸処分を喰らう事となった。

そして、大滝警部がはじめの名を聞いて仰（の）け反（ぞ）った事も、それに起因するのである。

無論、明智警視ははじめの名を引き合いに出す事は一切しなかったものの、大阪府警に舞い込んだ地方の警察署からの苦情の中に〝金田一耕助（こうすけ）の孫〟と平次を比較する者が何人かいたのだ。

曰く、同じ〝高校生探偵〟でも〝金田一耕助（こうすけ）の孫〟はマスコミに一切顔を出さない分評価出来る、自分が解決したとしてもそれを一切公表しようとしない謙虚さがある、等々（などなど）…。

実際にははじめの事もそこまで高評価している訳では無く、単に平次をこき下ろしたかったが為に都合良くはじめの名前を出しただけ

であるのだが、それと同時に流れてきた〝噂〟があった。
『〝金田一耕助の孫〟は明智警視が庇護している。』
『〝金田一耕助の孫〟は明智警視の〝お気に入り〟である。』
『明智警視の逆鱗に触れたく無ければ、〝金田一耕助の孫〟に余計な手出しするべからず。』
――――――と。
まことしやかに囁かれているそれの真偽はともかくとして、明智警視に少なからずトラウマを植え付けられた大滝警部としては、その当の本人の登場に過剰に反応せざるを得なかったのである。
また、補足すると槍玉に挙げられた平次は父親の平蔵から大目玉を喰らい、思い切り横面を殴り付けられた。
その後、2度とマスコミの前で不用意な発言をしないように誓約書を書かせ、手打ちとしたのだ（本来ならば、探偵を名乗る事自体を止めさせたかった平蔵だったが、自身の息子の性格上完全に頭から抑え付けるのは逆効果だと踏み、妥協したのだ）。

閑話休題

「おや、金田一様のお知り合いの方々でしたか？」
「え？ああ、こっちの3人はそうですがこちらの関西弁の人は……。」
はじめとコナンらのやり取りを見た古賀が尋ねるが、生憎と見覚えの無い大滝警部にはじめが言い淀む。
「ああ、こちらは大阪府警の大滝警部だ。」
「初めまして。」
小五郎のフォローにはじめが大滝警部に頭を下げたところで、古賀が口を開いた。
「おお……！あなたが大滝警部でしたか。ようこそおいでくださいました。執事の古賀と申します。服部本部長の父上とは同期の桜でして…。こんなに大勢で来られるとは思っていませんでしたが…。」
「……わざわざ警部さんまで呼んだ、という事はよっぽどの事があったんですね？」

寅倉家が位置するのは、群馬と埼玉の県境。コネを使ってわざわざ管轄の異なる警官を呼び寄せるなど、厄介事の臭いしかしない。高遠の息がかかっている以上、ある程度の事は覚悟してきたものの、警官まで招待されているとなると、既に何かしらの事は起こっているのだろう。正式に警察に要請は出来ないものの、コネを用いて警察関係者を頼りたいと思わせる何かが。

「ええ、はい…。後に旦那様から詳しくお話がある事と思いますが、実は半年前にこの邸で働いていたメイドが1人亡くなったのです……。それも、殺されたらしく…。」

「殺された？」

「はい。この邸の近くの森の中で遺体が見付かったのですが、その遺体の様子があまりにも奇妙で……。」

はじめの問いに、言い淀むようにしながら説明する。

「森の中で見付かった彼女の遺体は、立てた杭に体を逆さにして縛られた、無残な姿で発見されました。首筋に2つの穴が開けられ、体中の血が抜かれ失血死した姿で……。」

「首筋に2つの穴……？」

まるで……古に語られる怪物のようではないか。

「……確か、寅倉家のご先祖がそんな逸話をお持ちでしたね。」

今回、いつきに頼んでこの周辺に伝わる民話や昔話を当たってもらった中に、確かにそんな物騒な話があった筈だった。

（逸話になぞらえた〝演出〟…。如何にも高遠が好みそうな事だ……。）

「ご存知でしたか…。それもあって、容疑者として真っ先に疑われたのが、旦那様。この邸の主―寅倉迫弥でございます…。」

「何か疑われるような事でもしたんか？」

古賀の説明に、平次が容疑者として挙げられた理由を尋ねる。

「その亡くなったメイドの清水さんが、『旦那様が最近不気味で身の危険を感じるからメイドを辞めたい』、とシェフに漏らしていたそうです。しかし、旦那様にはしっかりとしたアリバイがございまして…。清水さんが亡くなった死亡推定時刻に、旦那様はずっと部屋に籠って

寝ていらしたのです。皮肉にも、それを証言したのは清水さんに相談を受けていたシェフなのですが……。」
「なるほど…。」
状況として最も疑わしいが、物理的に不可能だったと。
はじめが今回の依頼人と思(おぼ)しき相手が置かれている立ち位置を、一先ず内心で整理する。
そして、古賀の話で気になった点について尋ねようとしたが、それよりも先に声を上げたのはコナンだった。
「ねえ、何なの？最近の旦那様の様子が不気味だったって……。」
「…近頃の旦那様は、陽を避けるように昼間はずっと部屋で寝てらしたり…。愛用なさっていた銀の食器類も自分は銀アレルギーだと急に言い出されて全てお捨てになったり…。先日は、好物のニンニクの入ったスープの皿を叩き割られて、『血が腐るから2度と入れるな。』と大層ご立腹で…。」
(そりゃまた……。)
演技なら大分徹底しているし、本気なら本気で通院の必要性を感じる。
「お、おい…。それってまるで……。」
内心ちょっと引いたはじめの思考に被さるように、小五郎が古賀に向かって口を開く。
古賀もまた、小五郎の言いたい事を理解しているように頷いた。
「ええ…。メイドの清水さんの目にはそう映ったんでしょう…。まるで吸血鬼、バンパイアのようだと…。」
重く告げる古賀に、はじめが気になった事を聞くべく口を開こうとした瞬間、
「「バ、バンパイア!?」」
不意に響いた悲鳴じみた声に遮られた。
何事かと振り返ってみれば、先日ファミレスの事件の時にいた女子高生が2人顔を引き攣らせながら立っている。
「今、バンパイアって言(ゆ)うてへんかった？」
「きゅ、吸血鬼がどうかしたの？」

（苦手なのか、ホラー…。）
知らずに来たのか、この邸に。
２人のリアクションで何とはなしに事情を察する。
「あ、いや……。」
「バンパーやバンパー！レンタカーのバンパーに傷付けてしもて、どないしょー言うてたんや！」
「何だ、バンパーか…。」
一先ず納得したらしい少女たちが、そのままはしゃいだ様子で平次に話しかけるのを見て、思わず呟く。
「ナイスボケ。」
「ハハ…。」
その声を聞き咎めたらしいコナンが、乾いた笑いを洩らしたのが印象的だった。
「あれ、あんたもしかして…。」
ハッとしたような声が聞こえ、そちらに目を向ければ関西弁を話すポニーテールの少女がはじめをじっと見詰めていた。
「やっぱり…！あんたこの前の、ファミレスの事件の時に会うた……。」
「えっと、確か金田一さん……！」
「何で、あんたがここに…？」
ポニーテールの少女―遠山和葉の言葉に、もう１人の少女―毛利蘭が思い出したように声を上げる。
「ちょっと所用があってね…。あんたたちこそ、何でここに？」
見たところ、ホラーが嫌いなんだろうに。
言外にそんな問いを滲ませるはじめに、コナンが慌てて声を上げた。
「そ、それよりさぁ！ボク何だか喉乾いちゃったな～…。」
「それでは、皆様中へお入りください。そろそろ陽も傾いて旦那様もお目覚めになられる頃合いですので…。夕食の支度が整うまで、どうかお寛ぎくださいませ。」
コナンの苦肉のフォローに、何かを感じ取ったのか古賀も一同を邸

内へと促す。
「問題の遺産相続の話し合いは、夕食後との事ですので…。」
（遺産相続…？）
　どうやら、自分が呼ばれたのはその為だったようだが…。
「古賀さん、夕食前に寅倉さんにお目にかかる事は可能ですか？」
「夕食前に、でございますか？」
　はじめの問いに、古賀がその細い目を見開く。
「はい。私は今日この場所に呼び出されこそしましたが、それが誰からなのか、どんな要件なのかは一切知らされていませんでしたので…。」
「まさか、そんな筈は……！」
「寅倉さんからは、私が来るという事は知らされていたという事で間違いありませんか？」
「は、はい。今日の夕食時に行われる遺産相続の為の話し合いの事もあり、半年前の事件の真相をぜひ解き明かしてもらわなくてはいけないから、彼の金田一耕助の孫を呼んだと…。夕食の時に自分と顔を合わせるまで、丁重にもてなすように、とだけ……。」
「そうですか…。」
（という事は、寅倉さんが高遠と何らかの形で繋がっている事は間違い無いな……。）
「申し訳ございませんが、旦那様からそう言いつかっている以上、私の一存では…。旦那様がお目覚めになっておられましたら確認させていただきますので、どうか客間でお待ちくださいませ。」
「分かりました、そういう事でしたら…。」
　夕食時に会う、と言っている以上何か動きがあるならその後だろう。
　勝手に他人の邸を出歩くのも気が引ける。
　この場は大人しく待っていた方がいいだろう、とはじめも一先ず納得してみせた。

血の制裁

――――――――――客間に通され、コーヒーを振る舞われた後に、一旦退室していた執事の古賀が、再び客間に顔を出した。
「申し訳ありません、金田一様。旦那様はまだお目覚めになっていないようでして…。やはり、夕食までお待ちいただきたく……。」
「そうですか…。わかりました。」
「申し訳ございません。夕食の支度が整うまで、後４０分少々お時間いただきますので、それまでどうかお寛ぎになってお待ちくださいませ。」
　前半ははじめに、後半は客間の全ての人間に向かって断った古賀が丁寧に一礼して再び退室した。
（さて、それまで暇だな……。）
　大人は大人で何やら地酒の話で盛り上がっているし、Ｊ？２人は邸が豪華だの客間の調度品が高価そうだだのとりとめのない話で盛り上がっている。大阪の高校生探偵と、チビッコ探偵も２人で額を突き合わせてコソコソと小声で何やら言い合っていた。
　集団の中に１人放っておかれた時程、手持ち無沙汰な事は無い。
　某俵型ぬいぐるみのゲームでもしようか、とスマホを取り出したはじめに、チビッコ探偵ことコナンが思い出したように声をかけた。
「そう言えば、はじめ姉ちゃんってこのお邸の旦那様に呼ばれたの？」
「ああ、たぶんね…。」
「たぶんってどういうこっちゃ？」
　はじめの曖昧な言葉に、平次が疑問の声を上げる。
「さっきも言ったと思うけど、今日この場所に呼び出されはしたけど、それが誰からなのかは、ここに来て初めて知ったからね。」
「どういう事？」
　コナンの疑問にはじめが静かに目を逸らす。
「……詳しくは言えない。」
「言えないってなんやねん。」
「言わないんじゃなくて言えない。私がギリギリ言えるのはそこまで

……。」
はじめのその言葉に、２人が訝(いぶか)し気(げ)な顔をしたが、仮にも探偵を名乗っている以上、守秘義務については重々承知している。そんな事もあるだろう、と深くは気に留めなかった。
――――――その数時間後、コナンと服部ははじめに詳しい話を聞いていなかった事を後悔する事になる。

――――――約1時間後、大広間の長テーブルに夕食の支度(したく)が整えられた。
まるで映画に出てくるような素晴らしい調度品に囲まれた大広間と、そこに整えられたコース料理の支度(したく)に、蘭と和葉はすっかりはしゃいでいる。
「すごいね――――――！こーゆうのって映画やドラマで良くあるけど、実際に体験出来るなんて…！」
「ホンマ…！あたしらも貴族になった気分やわァ♡」
きゃいきゃいとはしゃぐ2人を、不意に不審そうな声が制した。
「誰よ？あんたら……。」
「え？」
「あ…。」
その刺々しい声に、蘭と和葉がハッと入口を振り返り、はじめたちもまた視線を移した。
「どこの馬の骨だって聞いてんのよ!?まさかアンタ、お義兄(にい)様の隠し子とかじゃないでしょうね!?」
胸元の大きく開いた服を着た、メイクの派手な女性が捲(まく)し立てる。
「そんなわけないだろ？もしそうなら、兄さんが僕たちをここへ呼ぶ訳無いし…。」
その後ろから、人の好さそうな眼鏡の男性が宥めていた。
（夫婦…？）
２人が揃いのマリッジリングを嵌めているのを見て、はじめが内心で呟く。
恐らく４０代には届いていないだろう女性と、既に５０歳は超えて

いるだろう男性では些(いささ)か年齢が離れているが、昨今では年の差カップルなど珍しく無い。

――――――――はじめが本当に驚いたのはその後だった。

「そうね…。もし本当に隠し子なら…、迫弥(はくや)の遺産は私たち兄弟じゃなく、子どもに全額相続されちゃうんだから……。」

続いて大広間に入り、皮肉気に語るのは、恐らく６０代は超えているだろう女性。派手なメイクと大きく胸の開いたドレスを着ているが、年不相応な服装とメイクのせいか、どことなく品が無いように見える。

「でもわかんないっスよォ？何年か前に急に連れてきたじゃんよ！年の離れた子連れで美人の婚約者を…。隠し子が２、３人いてもおかしくないんじゃね？」

一緒に入ってきた、恐らく２０代後半と思われる喋り方の軽い、チャラい茶髪の男。

親子にしては容姿に共通点が無いが、夫婦にしては年が離れ過ぎている。先程の夫婦の比ではない。

この２人の関係性がいまいち分からない、と内心首を傾げていたはじめだったが、全員が揃い、紹介された夕食の席でそのドレスの女性と、チャラい茶髪の男が恋人同士だと知った時の衝撃は凄かった。

（……マジか…。）

言っちゃなんだが、純粋に想い合っているというより、若い男をアクセサリー感覚で連れ回すおばさんと、完全に財産目当てのチャラ男(お)にしか見えない。

（通りでギスギスした空気だと……。）

そりゃ、こんな空気にもなるわ、とそれを知った時ははじめも思わず頬を引き攣(つ)らせた。

閑話休題(かんわきゅうだい)

――――――――時間を少し戻す。

隠し子が２、３人いてもおかしくない、と発言したチャラ男―羽川(はがわ)条平(じょうへい)が肩を竦(すく)めながら続けた言葉に、大広間の空気が一気に殺伐としたものとなった。

「でも、その婚約者、運悪くすぐに死んじまったけど…。あ、そっか、あんたらにとっては運良くか？」
「お、おい君!?」
　ニヤニヤと品の無い笑みを浮かべながら遺産について揶揄する羽川に、眼鏡の男性―寅倉家次男であり、現当主寅倉迫弥の弟、寅倉麻信―が窘めるような声を上げたが、それよりも厳しく釘を刺した者がいた。
「テメェ…。今度そんな口叩きやがったらただじゃおかねぇぞ!!」
　ガッと羽川の襟元を掴み上げ、ドスの効いた声で脅し付けたのは、厳つい髭面の男―寅倉家の三男、寅倉岸治だった。
「な、何だよ!?あんただってホントはラッキーだって思ってんだろ？あのまま結婚されて今も生きてたら遺産もらえねぇし…。」
　取りなすように引き攣った笑みを浮かべながら言い繕ろう羽川が、その軽薄さを明らかにしていく。
（やっぱ財産目当てか、コイツ……。）
　はじめが思わず頬を引き攣らせる。
「あ、何？もしかしてあんた…。あの子連れの愛人にガチで横恋慕してたとか？」
「き、貴様……!!」
　ヘラヘラと岸治の神経を逆撫でする羽川の言葉を止めたのは、新たに登場した眼鏡の女性だった。
「愛人の話は止めてくれる？私も父が愛人に生ませた子どもだし…。」
（どーりで若いと…。）
　他の兄弟たちが４０～６０代なのに対し、新たに登場した女性―寅倉家次女の寅倉実那―だけがまだ２０代半ばとヤケに若い。
「まぁ、法律的には被相続人に兄弟しかいなかったら、相続金はそれぞれ同額なんだから仲良くしましょ…。あの兄さんが今夜の話し合いで誰かを贔屓するなら話は別だけど…。」
　含みのある発言をする実那に、兄弟たちが反応するよりも早く、その後ろから遠慮がちな声がかかる。
「あのー…、そろそろ料理をお出ししていいか聞いてきてくれとシェ

フが……。あ、でもお話がお済みでないなら…、もう少し後でも……。」
殺伐とした空気を察知し、廊下から恐る恐るといった様子で進言するメイドに、羽川とその恋人—寅倉家長女、寅倉守与—が底意地の悪い笑みを浮かべながら口を開いた。
「話は食いながらでも出来っから、とっとと持ってきちゃってよ!」
「まぁ、あの奥さんのただの連れ子のあなたには関係の無い話だけどねぇ……。」
「あ、はい…。」
ニヤニヤと立場を揶揄するような恋人たちに戸惑ったような様子を見せつつ、メイドの女性—桧原ひかる—が一礼して下がった。
(つまり義理の娘になってた人をメイドに……。)
何て複雑な家だ。
「……こら、絵に描いたような遺産相続争いやわ…。」
「だな…。」
思わず、といったように呟いた平次と小五郎だけでなく、コナンや大滝らの顔もうっかり引き攣る始末である。

——それから、館の主人である寅倉迫弥が姿を現さないまま、晩餐は始まった。
寅倉迫弥が遅れて来るのは珍しい事ではないらしく、自分が席に着かずとも先に始めているように、と執事の古賀も予め言いつかっているらしい。
はじめら客人の紹介も寅倉迫弥が来てから行う、との事で先に料理が運ばれ、酒が振る舞われた。
決して穏やかとは言い難かったものの、それでも腹が満たされるにつれて、徐々に先程までの緊迫した空気が徐々に緩んでいく。
そんな中話題となったのは、今回一族が一同に会す事となった遺産相続の話し合いについてだった。
「え?!不治の病?この家の主の寅倉迫弥さんが!?」
「ええ…。もって後、半年とか……。」

小五郎が上げた驚愕の声に、寅倉家次男の麻信が頷く。
「あら、後3カ月じゃなかった？」
それに首を傾げたのが、麻信の妻、瑠莉である。
「だから、この晩餐会に来たんですのよ？」
「まぁ、招待状に〝欠席者に遺産は無し〟なんて書かれちゃねぇ…。」
相変わらずニヤニヤと品の無い笑みを浮かべた守与と羽川が続けた。
「…にしても、遅くねぇか？兄貴……。」
ふと、三男の岸治が顔を上げて未だ空席となっている上座を見た。
「確かに…。いつもなら料理にケチを付けてる頃なのに……。」
それに同意するのは、岸治の正面に座した次女の実那。
「んじゃ、悪いけど娘さんたち…、ちょっと起こして来てくれね？」
そう、羽川が声をかけたのは、ちょうど彼の正面に座していた蘭と和葉の2人と、自身の隣に座っていたはじめだった。
「え？」
「アタシらが？」
「廊下を右に曲がって、一番奥の部屋だからさ…。」
蘭と和葉の疑問を流し、羽川が続ける。
「寝起きに赤の他人に起こされるのって、嫌じゃありません？」
少なくとも自分は絶対嫌だ。
はじめの反論は、守与の含みのある笑顔によって否定された。
「いえ、迫弥も若い娘さんが起こしに来てくれた方が喜ぶと思うわ。」
「はぁ、そういうものですかね…？」
ニヤニヤと何かを含んだ笑みが気になるが、そこまで言われては拒否もし辛い。
「じゃ、ちょっと行ってきます。」
「あ、じゃあ私たちも…。」
「ちょっと行ってくるわ。」
ガタリ、と立ち上がったはじめに釣られ、蘭と和葉も立ち上がる。
パタム、と軽い音を立てて閉まった大広間の扉を背に、廊下を右に進む。

（に、してもデカい邸……。）
「な、なぁ…！」
「何？」
後ろを付いて来ていた和葉が、意を決したようにはじめに話しかけた。
「き、金田一さんは何でこの家に来たん？旦那様に呼ばれて来たんやろ？」
沈黙が辛かったのか、チラッと振り返ったはじめに世間話のノリで尋ねる。
「…それが、あたしにも良く分かんないんだよね。詳しい話はその”旦那様”がしてくれるだろうけど……。」
前に向き直り、歩みを進めながら答えるはじめに、蘭が不思議そうに尋ねた。
「良く分からないって、それじゃどうやってここに？」
「今日の日時と住所を記した手紙が送られて来たんだよ…。詳細は省くけど、無視するにはいかない理由があってね……。」
「無視するにはいかない理由……？」
はじめの意味深な言葉に、蘭が更に疑問の声を上げるが、「あ、ここちゃう？」という和葉の声に遮られた。
話を進めているうちに、一番奥の部屋、即ち邸の主である寅倉迫弥の部屋の前に辿り着いていたらしい。
コンコンコンッ…！
はじめが扉をノックする後ろで、和葉が怪訝そうな声を上げた。
「けど何かおかしない？普通、こないな事お客さんにやらせるかなァ？」
「確かに、ちょっと変だよね？」
コンコンッ…！
「寅倉迫弥さーん！もう晩餐会始まってますけどー！」
扉越しにはじめが声をかけるが、全く応答が無い。
「返事無いね…？」
「まだ寝とんのちゃう？」

ガチャリ…
「開いてるな……。」
何気無くドアノブに手をかけると、容易く開いた。
――――――フワリ…
同時に部屋からの空気が廊下に流れ出るが、その直後、はじめが異変を感じ取った。
(!これは……。)
「……大滝警部を呼んだ方が良いみたいだ…。」
「え?」
「大滝ハンを?何で?」
はじめの低い呟きに、後ろにいた2人が目を瞬かせる。
微かに鼻に付くこの臭い…。
「……わずかだけど死臭がする…。……人の体が徐々に腐っていく時の臭いだ。」
「えっ!?」
「ア、アタシ大滝ハン呼んでくるわ!!」
振り返ったはじめの、強い光を宿した紅茶色の瞳に、蘭が息を呑み、和葉は事の重大さを察して大広間へと踵(きびす)を返した。

そして、それから数分と経たずに、大広間にいた人間が寅倉迫弥(とらくらはくや)の部屋の前へと駆け付けた。
「金田一ハン!死臭って一体……?!」
「そうよ!洒落(しゃれ)にならない冗談は止めてくれる!?まるでお義兄(にい)様が死んだみたいじゃない!!」
はじめに事の次第を尋ねようとする大滝を遮り、瑠莉(るり)がはじめにがなり立てる。
「……本当に寅倉迫弥(とらくらはくや)さんかどうかは分かりませんが、少なくともこの部屋で、誰かが亡くなっているのは事実かと……。」
「何でそんな事が分かるのよ!?」
「経験、ですかね……。微かですけど、この部屋の中から死臭がします。恐らくは、亡くなってから数時間と経過していない、体が徐々に

腐り始めた時の、嫌な臭いが……。」
「な?!」
強い光を湛(たた)えたはじめの双眸(そうぼう)に、瑠莉(るり)がわずかに気圧される。
そして、大滝もまた、それを見て気を引き締めた。
「ほな、ワシが代表して確かめさせてもらいますわ…。毛利さんもそれでええですか?」
「ええ、お任せします。」
先日の一件を受け、”民間人”を現場に踏み入れさせないように配慮した大滝の言葉に、色々と思う事があったらしい小五郎もまた深く頷く。
そして、こんな時にこれまでだったら名乗り出たであろう平次もまた、黙ってその様子を見守った。
コナンでさえ、多少そわそわした様子を見せたものの、その場を動こうとしない。彼もまた、2度に渡るはじめとの邂逅(かいこう)で何か感じ入るものがあったようだ。
キイィ……
懐から取り出した手袋を嵌めた大滝がそっと扉を押すと、微かな音を立ててゆっくりと部屋の様子が露わになる。
フワッ…
「「「!?」」」
先程よりも扉が大きく開いた事で、部屋の中の空気が廊下へとゆっくり流れ出る。
そして、現役警察官と3人の探偵は、先程のはじめ同様にはっきりとその臭いを感じ取っていた。
「こりゃあ……、」
「間違い無いようですな……。」
微かに息を詰めた大滝に、小五郎もまた鼻を押さえて頷く。
「まさか……?」
「嘘でしょ?ホントに……?」
その様子に、それまで半信半疑だった麻信(あさのぶ)夫妻が不安気な顔を見せる。他の兄弟たちもまた、お互いに顔を見合わせていた。

そんな中部屋に足を踏み入れた大滝は、異様な物を見付けていた。
「これは、棺桶…？何でこないなモンがこんなトコに？」
何故か入口近くに置かれた棺桶に、大滝が怪訝な顔をする。
「最近の兄さんの寝床なんです、その棺桶…。どーせその内入るからって……。」
「かなり悪趣味だけど……。」
「そらまた、けったいな。」
麻信と実那の説明に大滝が理解出来ない、とばかりに呟くが、すぐに死臭の発生源が、目の前の棺桶である事に気付く。
すっ、と表情を引き締めた大滝が、棺桶の蓋に手をかける。
ガコッ…
蓋が完全に開いた瞬間、ブワリと部屋に流れ込んだのは、明らかな血臭。
「「っ」」
わずかに息を呑むような沈黙の後、
「「キャアアアアアア――――――――――ッ!!!!!!」」
蘭と和葉の悲鳴が邸中に響き渡った。
棺桶に横たわっていたのは、無残にも胸を太い杭で打たれた、この邸の主――寅倉迫弥の遺体。
黒い外套を纏い、片眼鏡を身に付け、断末魔の声を上げるように大きく口を開き顔を歪ませたその姿は、正しく古の怪物を思わせた……。
そして、棺桶の蓋に生々しく血で記された文字が、凄惨な殺人劇の幕開けを物々しく演出していた。
”我が怒りは未だ収まらず
同じ罪を繰り返す堕落しきった我が末に血の制裁を……
寅倉迫仁”